人生と藝術

島村抱月著

Life is short.
Art is long.

進文館叢書
第二篇

人生と藝術

島村抱月著

東京
進文館
一九一九年

在るがまゝの現實に卽して
全的存在の意義を髣髴す
觀照の世界也
味に徹したる人生也
此の心境を藝術と云ふ

目次

囚はれたる文藝……一一
沙翁の墓に詣づるの記……六六
ルイ王家の夢の跡……一〇〇
美學と生の興味……一四〇
文藝上の自然主義……一七四
人生觀上の自然主義……二一八
懐疑と告白……二三一

人生と藝術

島村抱月

囚はれたる文藝

第一

去年八月三日の夜は、我れ伊太利ナポリの港に舟がゝりして、感慨の事ども多かりし。中にも分けて老いたる文明のいぢらしさ。文藝の伊太利は死なざれど、さりながら、今の世に亡軀を曝らす哀れさよ。更にアドリアチコの海一つ越えては、同じ命運の岸に、苦しき息吹の身を横たふる希臘。世は二十世紀の叫びけたゝましき頃を、御身も尙ほ求むる所ありてや、見る眼も傷ましき覺悟かな。

兎かう思ふ頃、日はヴェシゥヰアス山の背後に沈んで、跡に曳く五彩の輝かしさ、「死に行くものは皆斯くの如く」と天の示しに會ふ心地して、やがて浪の染め色、人の面の染め色、みな消ゆると見れば、そこにヴェシゥヰアスの活きたる火こそ我が胸を焦したれ。

ポムペイの町々に花と咲いたる藝術を、一夜の怒りに、永劫の夢と埋め了んぬる千八百餘年の昔語りは、今も尙ほ此の山の烟と共に長くして、其の同じ烟の、晝は黑く世を愁ひの息にも包まん氣色すれど、夜の眺めはまた更に凄じ。見られよ。渦巻き上る烟の根、今は次第に焰となつて、明くまた暗く、おのづから呼吸を宇宙の胸の動悸に合はすならずや。其の底に萬年消えず燃ゆる思ひの潛めばこそ、夜ごと天に向つて噴く熱氣には、石も熔けやう、空も焦けやうなれ。あはれ囚はれたる此の火、太古以前は世を擧げて皆御身の領なりしならんを、冷めたるものつれなく、殼となり層となつて御身の周圍を鎖ざし了うせり。百年千年に一たびは、忍耐の紐きれて、山を裂き都を埋むる自暴の振舞も、思へば恕すべき謂はれはあり。我等もまた命を造化に享け、熱を御身と分かちて、此の熱、此の命を保たんが爲めに、仁義の縛め、幾

その羈絆に身をもだへしことか。あゝ、されども此の羈絆は遂に斷つべからず、一たび之を斷つときは、軌道よりすべりし星の如く、一切の人見る〳〵溶け去つて、無相の海に入滅す。なまなか我れに智識あり、此の理を知るが故に、みづから、流るゝ星の如く美しく消えんとも得せず。さりとて胸に一念の火は盡きざるをいかにせん。

はかなき罅隙を窃みては燃え上る夫の火柱よ、道義の繩に縛られて、世を引かれ者と過ごさすが造化の趣意ならば、何故人間に感情といふ凶器をば與へたる。昔全能の神はアダムを造りて、地球の邊に横たへ、彼方太虛の世界より、指頭を延ばして、そこに生命あらしむ。人の命といふもの、譬へば月の光を葉頭の一滴露に溶かして、永劫不斷と引くが如く、此の時始て、妙へにして見るべからざる一縷の流れとなりて神の指頭よりアダムの指頭に通ひ來たり。かしこ羅馬の法王殿の天井は、ミケランゼロが絶代の筆と稱して、此の崇高なる詩歌を、今も觀者の想像に活かしたり。あゝ此の全能の神は、斯の如くして生命を我等に分かちながら、何故に其の行く道を二手には築きし。左に沿ふものは感情の下り路にして、右は智識の坂、道德の峠なり。登らで叶はぬが人の世の道ならば、假りそめにも降ることの易きを味はす造化は、つれなからずや。また降るが正しき道ならば、登る苦勞は始めより省いてこそ欲しきなれ。

ホルマン、ハントが一代の名畫『世界の光』は、一切眞理の幽微と玄黑とを擧げて、基督が携ふる一燭のために明白々たりと描けり。されば我がオクスフォドのキーブルカレッヂに此の繪を見し夜は、我はまた眞理の明燭を片手に揭げ、紫微の御門の扉を敲いて「あはれ萬能造物の御神、世は待對矛盾の塊にして、其所やがて調和を要し、節制を要し、努力を要し、道德を要し、苦痛を要するの根原たり、そも〳〵待對矛盾として此の世を表白し給ひし理趣如何」と詰らまほしの情に禁えざりしが。

我が瞑想のやうやく理に入らんとする時、ヴェシゥヰアス山は、再び其の面目を展開したり。今まで黑き衣に覆ひかくせし胸を披くと見れば、慘ましくも一痕の生ま傷、たとへば、みづから衷心の苦悶に堪えずして、爬き剜りたる深手とも見えて、山腹の

谷間にラヴの流れ尙ほ燃え殘れり、晝は心づく人もなし、夜に入れば其の色血より赤く、おのづから人の腸にこたえて物々し。

此の時夜はすでに更けたり。我が立つ上甲板の端のあたりは唯闇くして人も居らず。耳を欹つれば何れの岩に住むざれ貝が、何れの岸の藻の花に便り送るか、四方ただひた〳〵と浪のさゞめきのみ聞こゆ。

と見るに、山腹なるラヴの火よりか拔け出でたる、異裝の者一人、頭に頭巾を戴き眞紅の長衣を垂れ、彼方の岸に立ちて我を招くと覺えしが、我れや行きし、彼れや來たりし、知るべからず、彼れと我れとは忽然として幷び立つたり。

此の異裝の友こそは伊太利繪畫の祖、ジオットーが筆と傳へらるゝフィレンチェのダンテが肖像そのまゝなりけれ。

第二

彼れは徐ろに手を擧げ遙かに白む地平線のあたりを指しながら、

「見られよ、東海の客。我れ足下のために古今を示すべし。かしこ天と水と相迫るところに、かすかに髮の如き一道の明るみあるを見たまはずや。天地いかに晦朦の夜なりとも、此の一線の明白は、曾て消ゆることなし。

闇より滑り出でゝまた闇に入るべき一葉舟の微といへども、一たびこの白光域に來たるときは、詳細に其の本體を露呈す。彼の岸と此の岸と始終と周圍とは、凡て黑漫々として知るべからざれども、ひとり中間の一線のみは極めて明徹、極めて白精、來たるものを照破せずといふことなし。我れ今此の白光の中に古今を觀せまくす。

しばし待ち給へ東海の客。唇を動かし給ふは、白光とは何ぞと問はん心なるべし。其の答はかしこにこそ。」

指さす方を望めば、光道おのづから二列に分かれて、一は物みな靑く、一は物みな赤く映ずと見えたり。たとへば、一は赤き雲、一は靑き雲なんどにて敷き詰めたる道

ともいふべし。其の折忽ち一群の人數、彼方の闇より我等が視界の地平線に過り入つたり。

「いかに東海の客、夫の一群は、青き道をこそ驅けぬけんとはするらし。其の先頭にある寬衣の紳士等は、希獵のプラトーン及びアリストテレースなり。中にもプラトンは、殆んど半脚を赤き道に踏み入れんとしては、また引き戻す。手に携ふる所は「フ井ードラス」の卷か「シムポジアム」の卷か、はた『レパブリック』の卷なるべし。

最上絕對の鄕を忘じ得ず、夢の如くかすかに之れを追慕して、憧れ仰ぐの情に堪えずと說きしプラトニック、ラヴの心根は、赤き道行く人に近からずや。されど其の最上絕對のエロスは、遂に智識によりて近づくべき理體たるを免れざりき。此の人もまた、理により、智識によつて闇黑を照破せんとするならずや。アリストテレースに至つては、其の淨化（カタルシス）の說、一點の別彩となつて彼れの詩論を麗しくするにも拘はらず、思想方式の調子、手障り、みな赤き道に上るべき人とも覺えず。智識、理性を以て萬象を照らさんとするに於いては、他の哲學者流と異なるところなし。

東海の客、我れは哲學に於いても、此の以外のものを求めんとするなり。

中世の哲學は基督敎の註釋なり。智識の燭を揭げて、宗敎の靈龕を照さんとはしたれど、神祕の一扉これを遮ぎりて通ぜず。其の光は空しく反射して、自己の上に落ちたり。見られよ、かしこに佛のデカート等再び靑き道に據り、群をなして登場せり。彼等が自己の左右を顧みて叫ぶを聞き給はずや。曰く、己れとは何物ぞや、と。是れ所謂近世哲學の開始を報ずる聲なり。されども斯くの如き思想の流れは、智識の範圍に於いてのみ完結せんとする限り、尙我が胸の深海には達すべくもあらず、唯これ表面の窪みを傳ふ一系の水脈に過ぎざるなり。我れも一たびは同じ道を尋ねんとしたれど、末は詩の都、神の宮殿とこそ心ざしたれ。

こゝに嬉しきは、カントかな。智識、理性に無上の權威をば持たせながら、傍らに一種の別なる力あることをも忘れず、純理性、實理性の上に、更に微妙なる判斷力とい

ふものゝ存在を認めて、而して此の判斷力の重なる發現は、快不快等の感にありとなす。味ひ深く、優しく、溫く懷かしき觀方にはあらずや。見られよ、カントが場を降るとき、靑赤の兩道は殆んど相合せんとしてまた分かれたり。

次いで心ゆくものは、ショーペンハワーが意志の說なり。彼れに取りては一切の根元實在は意志なり。されども我れは此の所に於いて意志といふ名を嫌ふ。我が內的經驗には情といふ名こそ一層明瞭にして事實に切なるを覺ゆれ。

我れとショーペンハワー等と、押さへたるは同一實在の活動ならんこと有り得べき結論なり。されども之れを意志と呼ぶときは、黑、冷、力の氣餘りに盛んなり、我はむしろ熱あり、光りあり、色彩あり、香芬ある活動を想像して、情念と呼ぶものに與せんと欲す。カントは判斷力と稱して我が思ふ所の一半を說き、ショーペンハワーは意志と稱して我が思ふ所の一半を說けり。二つのものは、相合して人生至高の力の府たるにあらざるか。而して一切の學問智見は綜括して此の一團力に觸れ來らざる限り、未完成のものたるをば免れざらん。斯くの如きは主義無く、生命なく、言はゞ急所を有せざる學問となるべきなり。我れは急所ある哲學を求む。

十九世紀の或る部分は、科學萬能の旗下に奔趨したれども、世紀末に於ける彼等の叫び聲は失望なりし。何ぞや、智識の根本を忘れたればなり。我等が燭を秉つて闇夜を照らすとき、見んと欲するものは向ふにあり、されども、見て以て何とせんかと問はゞ反射して自家に還る。我れ彼の物に對して覺悟を定めんが爲めならずや。かくの如くして、智識の根本は、物我の關係を定むるにあるが故に學問は凡て此の點に達して始めて完結す。此の一結を缺くものは、不滿足なり、尙何物をか要求せざれば已まず。一切の學問は哲學に入り、哲學は我れの安立の情を揣摩するに及んで始めて眞に意義あり生命ありといふべし。此の意に於いて哲學は科學の仕上げなり、畫龍の點睛たりといふを妨げず。」

第三

「あゝ我が言説復た抽象に走せたり。許されよ東海の客。來たつて文藝の跡を見たまへ。赤き道の末、朦朧たるが中に一列の長き影うごめくは、中世紀のさまなり。青き道の遙かに後れて明るきは、智識が感情に追ひ越されたるさまとや見ん。赤き感情の路にあるものは、之れを意ともせずして猛進す。其の重なる人數は、歴代の法王等か。朦朧たるが中に、只一點輝くものあるは、黄金の十字架なり。あゝ是れ十字軍！

げにも中世の歴史に於いて最も麗しく夢の如きものは十字軍なり。中世の暗黑なる歴史も、是れを燒點として見るときは、則ち許多の光耀あり。

それ信仰感情の絶對權未だ衰へず、隱若ピーターの勸進に始まりて、幾萬の士女が始めてゼリッサレムの聖地の前に泣き伏せしまで、おのづから是れ一篇の詩を實行に移せるものなり。何等の情致ぞや。中世に文藝なし、一切の感情は馳せて宗教に之いたり、而して其の磅礴する所、遂に發して自然の文藝となれるものは、十字軍ならずや。而して闇黑時代の濃霧尚ほ歐洲の都市を壓して垂れかゝりたる中より、かしこナポリの丘腹に挺然たる寺塔の十字架のみ已に燦然として光を放ちたり。是れかすかに天の一角に芽ぐめる文藝復興の第一光が早くも頭地を拔ける塔の頂に反射せるならずや。やがて黄金の如き光線は、林を浸し野に溢れ、天地はじめて一朗、人畜共に舞ひ、百禽聲を揃へて歌ひ出づるの盛觀を呈したり。世に若し斯くの如き文藝復興の圖あらば、其の壯麗いかばかりならん、想像しても見給へや。

さて十字軍の一隊は過ぎ去れり。後れて一人、長衣の袖を叉ぬきて、俯き勝ちに赤き道を辿り來るは、誰れと思はるゝぞ。青き道にもしば〳〵跨ぎ入るを見ずや。あゝ東海の客、足下うなづく所あるか。斯くて兩道に携はれるモンク頭巾の彼れこそは、我れダンテの前身なれ。

我れは今も一代の事業を誤れりとは思はず。文藝復興の夜明けの鐘は、我れ撞けり

とこそ信ずれ。唯だ、過ぎし我が意を、今の我が意にて解釋すれば、多少の言ふべき節なきにしもあらず。

我れはもと二つの傾きを有して生まれたり。一つは理に行くの癖にして、一つは情に行くの性なり。わかゝりし我が生涯、いな恐らく我が一代の生涯は抑へがたき情のさすらひにして、情の熱する所、周圍を顧みれば不平あり、我が思ふところを行へば葛藤あり。斯くの如くして我が五十七年は、ローマを追はれ、エロナに隱れ、フランスに避けたる、流離遁竄の歷史となれり。されども、我れはまた盲なる情の一面のみには從ひ得ざりき。我が理智性は、生れ得て鋭敏『神曲』中の理趣は言はずもあれ、夫の悲哀に富める『新生涯』の一卷すら、記敍の方式に究理の調あるは、足下も心づき給ふ所か。さればこそ、中世、闇黑の覆ひの下に潛み通へる學問興復の氣に、我れは逸早くも衆に先だちて感染したるなれ。智によりて過現を照し、情によりて未來を察す。斯くて我が情は闇中模索の妄飛躍をば嫌へども、智識の盡る所、飛躍の外に途なしといふ時は、則ち情の翼に羽打つて飛躍せんことを願ふ、未來に對して無限に向上せんとする所以なり。然れども、我れは遂に之れに向つて突進すること能はず。之れを爲さんには我れ餘りに聰明なりき。內に憂愁を抱いて、一代を轗軻の間に送るの人たりしこと、また憐むべしとは見給はずや。」

第四

「さらば當時我が豫見せし未來は如何なりしぞと問はるゝか。『神曲』淨罪界の初めに、我が意は盡きたり。下界にては見し事もなき四つの星、燦然としてきらめき出づれば、天に歡喜の光り滿つる、其の天こそ我が理想なれ。四つの星に額を照らされて面も輝くかと見ゆる一老翁は、問うて曰ひけらく「語れ、御身は何者ぞ、此の眼しいたる流れを溯り、彼の永劫の牢屋より遁れ出でしと覺ゆるは」我が東道の主人ヴージルは答へて曰はく「自由を索めんがために旅するものぞ」と。あゝさなり、精神の自由、

語は陳なれど、之れよりも切に此の一塊の思想を表白すべき言葉はあらざるべし。當時、政教混亂して一となり、一切の主權は擧げて法王の手に委ねられたり。政治はいふに及ばず、學問藝術みな舊教の隷屬たるを免れず。而して舊教はすでに其の生氣を失ひて、地中より堀り出だせる巨獸の骸の如く、徒らに大に、徒らに人を壓するのみ、滔々として寄せ來たる智識の潮をばおろかにも自ら體を横たへて防止せんと欲したれど、そは無益なりし。精神の上に牢獄を築いて我等を囚へんとする者は實に此の巨怪なりしなり。我れ乃ち思へらく、是れ基督教の罪にあらず、俗輩之れを汚して斯くの如くならしめたるのみ。眞の神、眞の愛の尊とさは、古今いさゝかも變りあらずして、現に我が胸に躍々たり。此の清き愛、此の絶大なる想ひは、直ちに是れ内在經驗の事實ならずや。我れは今より後唯之れを追うてあこがれんのみ。新生命に入り、新光明に接せんが爲めには、先づ舊教義舊慣例の我れに邪魔するものを擺脫せんと念ふ。我が精神を法王專制、教義專制の羈約より拯うて、そこに大自由を得しめんことは我が願ひなり、と。

斯の加く思惟して、我れは基督教の精神に新たなる光を注がんとはしたり。後世のニーチェ等が如く、直ちに走りて基督教を破却せんには、我が智識餘りに聰明に、また我が基督教に對する愛着の情餘りに强かりき。されどこゝに顯はれたる世界の一傾斜は、此の後永く平衡に返ることなく、延いて二十世紀の今日に及んだり。後れたりし青き智識の道にあるもの、感情一存の振舞に快からず、赤き道にあるものを追ひ越して久しき抵屈を伸べんと奮起せる有樣は、やがて我が身に代表したりし文藝復興の夜明けなり。コンスタンチノープルの落滅、印刷機械の發明と、史家が數ふる文藝復興の外緣は多けれど、一味の溫光は、早くほの〴〵の夜明けより、人の心の底に通ひたり、畢竟は是れ自然なる命數の循環のみ、節奏のみ。世は智識と感情との一大競爭場にして、二者の漲落は世態の變遷なり。今文藝復興の初めにあたりて、智識は千年の長き屈伏より起き、清新の光りを放つて四方を照破す。新日昇つて山河鮮やかなるの概あるも宜なるかな。

智識の汪溢、若しくは智識の勝利、是れまことは十三四世紀以後、延いて今日に及ぶまでの歐洲思想界の原動力にして、此の間は唯だ一傾斜のみ。文藝復興乃至學問興復といふものは、卽ち智識の復興にして、十六、七、八、九世紀は其の連續たり。史家の所謂近世是れなり。而して、智識の流れと相沿ふべき感情の領土は、智識の流勢のすさまじさに壓倒せられて動々もすれば其の氾濫に任せんとす。文藝の森、宗教の園、是等は凡て道德といひ、科學といふが如き智識の流れと對映して感情の領土を代表する者なるにも拘はらず、近世の文藝は、殆ど常に、かしこの木の間に科學の泉、ここの木の間に道德の盆池を隱見せしめて、其の森の姿勢を整へんとす。宗教また、智識の流れを引いて其の園に灌ぐを禁じ得ず。斯くの如くして止まる所なくんば文藝の森、宗教の園は終に智識の水底に溺れ果つべし。夫の科學興こりて詩歌亡ぶと叫びし者の聲を聞かずや。また夫の科學興こりて宗教亡ぶと叫びし者の聲を聞かずや。十四、五世紀に於ける文藝復興の氣運は、十九世紀の末、當然の結果として斯かる叫びに到達したるなり。智識全盛、感情屏息の義、明かならずや。』

第五

「されども我れは單に概般の理を語れり、更にかの赤き雲の道行く我が姿を見られよ。窶れたらずや。我が煩悶は闇黑不快の世より出でて早く光明自在の天地に到らんと願ふにあれども、斯かる願の本となりて、打つとも蹈むとも變るまじき、大地の如き誠の上に我れを据ゑしは、あゝ其のかみよ、愛の一念力なり。我れは何事を思ふにも眞率誠實の外に行くこと能はず。眞率誠實は、涙を盛りたる袋の如きものか。之れに觸るれば涙出づ。我れは事を想うて深く誠なる毎に涙のはふり落つるを禁ずること能はず。あゝ此の涙こそは、我が早き生涯に於いて愛より受けし賜物なれ。我が愛の名はベアトリチェなり。うるはしき其の名かな。之れを聞けるのみにてだに、腦は春の野と開けて、得も知らぬ芬芳の香に、魂銷ゆると覺ゆ。頃は千二百十七四年五月、花祭りの日な

り。ベアトリチェは九歳の春なほ淺く、我れはやがて十歳ともなるべき兄にして、二人は此の日初めてしみ〴〵と相見たり。ベアトリチェの父が春の宴には、我が父も列なれり。我れは父の跡につづきて、奥なる客室に導かれしが、此の時客は既に半ばをも越えたりと覺ぼしく、歡聲笑語湧き立ちて、窓の前に相對するもの、隅なる安樂椅子に身を横たふるもの、卓を圍みて座するもの、立つて室内を歩むもの、女、男、黄に赤に緣に色彩の輝かしさは目もまばゆきばかり。暫くありて、再び裳の戸に觸るゝ音ありと見れば、母と共に入り來たりたるベアトリチェの立姿、氣高くも美しかりし面影よ。天降りたる星かと見えて、今立てるは水色窓掛の前なり。衣裳は抑へ薄めたる眞紅の色にして、帶、胸、頸の飾りは、天つ乙女が集めたる珠のかず〴〵、塵の世の人品とも思はれず。

少女は默してにこやかに我が會釋を受けしまゝ、はにかめる我が姿をつく〴〵と見ぬ。我れも一たびは其の眼を見たり。されど其はただ刹那にして、長くは見るに堪えざりし。長くは見得ざりしかども、此の一瞥こそは、我れに永久の神祕となりて殘りたれ。深くも潛める我が靈は、此の時全身に動悸を傳へて打ち震ふと覺えしが、之れより永く其の身を愛に捧げたり。

九年は仇と過ぎて、二たびベアトリチェに巡り會ひしは、十八の春、フォレンチェの町に人の往き來も繁き頃なりし、此の婦人、われには尋常の人蓄とも思はれず。天人などにやあらん。此の日は純白の粧ひして、二人の年長けたる婦人を左右に伴へり。我れは、はたと彼等に行き合ひて耻しさに顔も得擧げず、此方の軒下に身を避けしが、之れを見たりしベアトリチェは、世にも心を寵めて我が方に會釋を送りぬ。情ある會釋の言葉なりしよ。始めて之れを聞きし我が嬉しさは、推察あれや東海の客。命かぎりの幸福は是れを極みぞと思ひて、我れはただ醉ひたり、恍惚として夢心地となりぬ。淋しき我が家に歸りては、尙さらに、一念ベアトリチェが其の日の事を忘れ得ず。不思議の夢も見たりけり。

後は語らずもがな。十六年の雨風、卑怯なりし我れよ、女々しかりし我れよ、はた思

ひ迫つては遣る瀬もなかりし我れ、薄倖にして多感なりし我れ。我れはただ失望、憂愁の雲に鎖ざされて、後世『ヱルテル』のゲーテ『チイャルド、ハロールド』のバイロン等と一つ思ひに身をもだへたり。而してベアトリチェは千二百九十年、明け行く空の星と消え去りぬ。殘る想ひは、我が胸に祕めたれども、如何にせんや、眉目人の心を語る、世にダンテが面型といふもの、客も見知り給ふべし。されども東海の客、我が此の胸裡には、指さば指にも觸るべき一塊の物あり、名づけて誠といふ。是れあるが爲めに我が思ふ所は悉く涙なり。感激にも涙來たり、喜悅にも涙來たり、悲哀にも涙來たる。而して此の優しき涙の源を穿ちしものは如上の戀の歷史に外ならず、清き戀に泣き盡くせし人は、必ずや、眞率誠實の情に富むべきなり。」

第六

ダンテの影去りて、赤き道には登場の人しばし荒んだり。と見る間に、後れて來たりし青き道の人數も、今は一散に驅けぬけて、赤き道にあるものと先きを爭はん氣配あり。世は早や近世に移れりと覺ゆ。中に二人の風骨すぐれたる紳士あり、赤き道より上り來たる。ダンテは之れを指して、

「彼等は伊太利の畫家及彫刻家、ラフエ、ロとミケランゼローとなり。中にもラファエロが聖母の圖は、遂に古今を絕して、彼れの外に出づるものなし。足下は彼れが歐洲近世の思潮と如何なる交渉を有するかを知れりや。其の點二つあり、曰はく一味の智識なり、曰く一味の人間なり。

由來智識の勃興に伴ひて起こるべき文藝上の變動は、外形には常に寫實といふことゝなりて見はる。文藝復興期の文藝が當然其の色を帶ぶべきは言ふに及ばざるべし。古き批評家はいふ、ラファエロはミケランゼローの寫實的なるに反して、理想的なるが故に、些細なる點にまで智識の要求を充たすべき寫實をば敢てせざりきと。されども此は寫實理想の語を妄用して自ら矛盾の結論に陷る滔々者流の筆法なり。古今同嘆、

深く論ずるに足らず。ラファエロの寫實は必ずしも定規を手にし解剖學書を傍に置き乍らといふが如きものにはあらざりしならん。されど其の疎描たると密描たるとに論なく、背景に於いて、遠近、布置に於いて、明暗、權衡に於いて、歩一歩前代の穉氣を脱し行くの觀あるは、大局に於ける寫實的精神の發展なり、理想は目的として之れあるを妨げず、手段としての寫實的精神の發展、すなはち智識の光明を增せる徵候は、ラファエロが畫に於いて歴々數ふべし。是れ疑ひもなく、彼れの畫をして、何所ともなく一種近世的、若しくは近世にも尙且活きたりといふが如き感を呼ばしむる所以ならずや。

但し此の如きは、所詮外形の論たり。彼れの繪畫には、智識あり人間あり。是れ近世の氣運を當時に權化せるものといふべし。

ラファエロが一代は凡そ三期に分かちて見るべし。第一期は尙ほ師ペリウジノー等の跡を追ひて、古畫風に囚へられし頃なり。第二期はフ*レンチエに來たりて、レ*ナルド、ダ、ヴィンチ及ミケランゼロー等の影響を受けし時代なり。第三期はラファエロみづからの時代ともいふべし。今は此の三期に亘りて、彼れが聖母の圖を援き來たらんに、第一期は卽ち、むしろ文藝復興以前の思潮を見はしたり。ローマの法王殿なる『マリアの戴冠』の圖は、最もよき此の期の代表畫たるべし。周圍の如何は問はずもあれ。中央に坐し合掌して今や將に聖冠を頭に受けんとするマリアの顏の表情は、唯是れ信仰なり、無我なり、淸淨なり、柔和なり、之れを見つむること少時なる時は、我も又、先づ頭腦より徐ろに溶けて消え入るが如き心地す。卽ち宗教畫として偉大の力を有する所以なり。されども一たび頭を回らして之れを思ふときは、我が心中に尙ほ何者かの不滿あるが如し。此の畫に神聖は是れあり、耽溺は之れあり。人の心のさま尙中世の如くして、既成の基督教義に絕對の威權ありし世は、是れを以ても足れりとせしならむ。否此の書はすなはち此の如き世を代表したる者なるべし。是れわが古派と名づくる所以なり。然れども時移りて、文藝復興の氣に感染したりし人は、必ずや之を十分の滿足とはなし得ざりしならん。蓋し此のマリアは余りに神聖なればなり、余りに

信仰一圖、神々しさ一邊にして、動もすれば模型的となり、抽象的となり、血あり肉ある此の世の人と遠ざるの度余りに大なればなり。一言以て言はば生命無し、否、生命は無きにあらざるも、狹隘なる既成教義の下にのみ生ける生命なり、不自然に抑壓したる生命なり、若しくは人世の行路に惱み疲れたる、氣魄悄沈、寒枯瘦貧の生命なり。近世の始めは正しく此くの如き宗教的抑壓の下より醒起して、光明、活氣、自由、豐富、積極といふが如きものを得んとするの氣に充てる時なり。第一期のラファエロは、以て之れに當たるべくもあらず。

此に於いてか第二期の彼れは出でたり。今フィレンチェにある聖母の諸畫、例へば『太公家のマドンナ』『金翅雀とマドンナ』の如きは皆よく此の期を代表す。而して此の期の彼れが特色は、聖母の顏に、一味の智識の光りを漏し來たれること是なり。

此の點に關しては歐洲の評家も已にいへる所あり。『太公家のマドンナ』を以て此の傾向の初頭に置くを例とす。されども、其の最もよく此の事實を示すものは『金翅雀とマドンナ』の圖に如くはなし。金翅雀を持てる聖兒等を膝に倚りかゝらせながら、左手には書を繙きたる聖母の顏に、一點現實の氣の漲り來たると共に、其の最も著しき表情は、怜悧、聰明、といふが如き標徵なり。されば之れを見るに、賢女の相あり、而もなほ、溫良、純潔、信仰といふが如き感は油然として人の肺腑に湧くを覺ゆ。ただ斯くの如くして、近世の智識的傾向は、中世の信仰感情と調和の形を示したれども、之れが爲めに、其の耽溺一邊なりし神聖といふが如き意義は些も損失を蒙らざりしか。或る種の人が、此の期以後のラファエロ、マドンナを以て俗氣ありとなし、却つて初期の抽象的なる聖母像に心を寄せんとするものは、むしろ注意すべき一現象にあらざるか。更に言ひかふれば近世の藝術が漸く人間と相接近せんとするに從ひ、超人間的なる宗教の生命は多少の變改を來たさざるを得ず。此に於てか或者は智識に媚びて人間に墮せんよりも、理は如何ともいへ、去つて單一なる宗教的感情に身を捧げんと願ふ。此の如きは、智識に慣れず、近世に慣れざるものか、然らずんば智識に慊たらず、近世

に慊たらざるものゝ行くべき道なり。復古の思想こゝに於いてか起こる。此は十八世紀末及び十九世紀末の事實ならずや。此の理は尚後にこそ。」

第七

第三期のラファエロは、獨逸ドレスデンの畫堂にある、サン、シストーのマドンナを以て、遺憾なく表出するを得べし。此の畫は、彼れが死する前二年、千五百十八年の作と傳へられ、或る評家は、之れを以てラファエロが一代の聖母像中最も傑出せる者なりとなす。少なくとも第三期のラファエロを見るに於いて、之れに勝る圖はあるべしとも覺えず。薄き暖色の光りを徐ろに集中したる中央に、聖母は雲を踏んで立てり。抱いたる聖兒の額は、母の頰にもたれ、其の裸體なる肉の丸み及び色合には、現實の味ひこぼるゝが如し。聖母が穿てる袴は、深藍の染め色に、神祕、永久の意を現はし、膝のあたりに至りて、强き光線を反射せしむ。上衣は氣高き赤にして、之れまた小兒を抱ける左手の肱より腕にかけて、光線を出だせり。總じて之れをいふに、母子の顏、小兒の肌、聖母が膝、腕に受けたる光線、及び聖母像の半身程に高まりたる左右のシスタスとバーバラとが、肩、背の明るみ等を中心として有力なる明暗の分布、變化、まづ少なからず人の注目を惹く。青、赤、黃、白、茶、橄欖等の色の鮮やかにして、而かも沈痛の氣を失はざる、脚下及び周圍の群のおのづから尋常の物ならずと思はるゝ、是等は玆にくだくだしく言ふ迄もなかるべし。最も驚かるゝは、此の聖母が顏なり。中にも其の眼こそ世界の不思議といふべけれ。

サン、シストーのマドンナは遂に人間のものとなれり。其顏には我等と同じく、活きたる血通へり。第二期に於いて見はれたる知識、聰明の相は、尚ほ是れあれども、其の以上更に何物をか加へたり。其は人間的意義卽ち是れなり。始めて此の畫に對するものが、一見先づ其の餘りに近世的なるに驚き、唯是れ一幅の無邪氣なる田舍乙女が圖にはあらずやと訝るたぐひは、此の理を說明して餘りあり。第二期の聖母にすら既

に快からざりしものは、此の畫を見るに及んで、あゝ、ラファエロ遂に人間に墮したりと叫ぶなるべし。然れども、此の圖の中に、尙ほ一道の神聖なる表情なしとはいふべかちず。全局の調子は確かに人間化したり。されど人間化して、尙ほそこに神的淸淨あらば是れ神と人との和合にはあらずや。隔絶不可思議を許さずして、寧ろ之れを人間に引き下さんとせるは、軈て近世思潮の意義なり。神人一致、語は古けれども意は常に新たにして、近世は實に有ゆるものを人間化せんとしたり。知識化せんとしたり、我が模索の內に置かんとしたり。神も此れが對當たるをば免れず。されば、第三期に於けるマドンナが人間となれるは、實に時勢の影なり。近世を豫表するの大藝術たる所以こゝにあり。何ぞ異しむを須ゐんや。此の如くにしてラファエロは始めて大なり。

母子の顏には、單に無邪氣、聰明、優美といふが如き表現あるのみならず。また實に神聖あり。神聖といふに幣あらば、たゞ心を靜かにして、數分時間其の眉目の邊を注視せよ。玆にも亦第一期のラファエロに於いて最も赤裸々に見はれたる、一種の幽致を認むるに至るべし。其の情は明かに說きがたきも、譬へば我が體漸く虛靈となつて、永久無限の邊に導かれ行くが如く、優しく、心細く、物哀れなる心地となるにあらずや。是れ凡て大なる宗敎畫が有する一作用にして、畫家の宗敎的感情が、おのづから光澤となつて、畫面に流れ出でたるなり。

聖母の眼は、更に一段の驚異なり。第二期までの圖にありては、兩眼常に下に向かひて俯したり『ワージンの戴冠』に於いて、『太公家のマドンナ』に於いて、『金翅雀とマドンナ』に於いて、はた巴里ルーブルのマドンナに於いて、みな然るを見る、思ふに、是れ人世の消極を意味し、悲哀を意味するものにはあらざるか。眼は感情の窓なり、之れを鮮やかに開きて、望み見るに便ならしむるときは胸に燃ゆる感情の火、其の色に從つて一々外に輝き出でんことを恐る。別言すれば、生きたる感情之れより漏れて、聖母は遂に人間に墮せんことを憂ふ。畫家は則ち易きに就いて眼をうつ俯しにせしめ、感情を隱して其の光りを消し、以て僅かに其の神々しさを保たんとせるなり。一切の感情

を活かして、直ちに神に合せんとするは、積極たり。之れを消して神に合せんとするは、消極たり。眼を伏せて感情の窓を閉づるものは、消極に行けるにあらずや。また伏し目は常に悲哀憂愁を意味す、孤獨なり、寂寞なり、小弱なり、逡巡なり。前に目的とすべき光明なく、希望なく、また之に向かつて猛進すべき英氣なし。悲觀的たり。

此の如き意義を有する第一、二期のマドンナの眼は、第三期に入りて、深夜の星影よりもあざやかに見開かれたり。其の瞳は下を見ずして正面に向かへり。霧とかゝりし愁の雲は消ゆると共に、星の瞳は燦爛として麗しき光りを放ち來たりぬ。天地始めて光明あり、希望あり、生氣あり、生きたる感情も此れより輝き出づるよ。其の感情を直ちに導いて、永劫に入らしむるも、此の眼ならずや。美術史家リュブケはおもへらく、ラファエロは、此の圖によりて自家の最も深遠なる思想と最も美しき人とを結合せんとせるかと。ラファエロの心は知るべからずといへども、事實の跡は、是れよりも更に〳〵深き意義を示すに似たり。彼れは、此の畫によりて實に神と人とを合一せんとしたり。而して是れが爲めには、舊來の信仰一邊なるものを損するの危險を恐れず、活きたる人間の感情と知識とを之れに導き入るゝを辭せざりき。知識的、而して人間的是れこそ誠に近世を標榜する根本精神にはあらずや。」

第八

「あれ見給へ、東海の客、青き道には早くも宗教革命の大旗を飜へし來たるものあり。獨のマルチン、ルーテルに紛れもなし。宗教として地歩を占めたる中世の感情が、近世の知識の爲めに征服せられ行く世相は是れなり。

次いで赤き道より快活の態度にて上り來たるものは、シェークスピーアなるか。濃紫に黄金の縁つけたるガウンの袖を反し乍ら、左右を顧みて諧謔一番するに似たり。彼れ今は詩國の帝座について久しければ、儀容おのづから王氣を帶ぶと覺ゆ。

彼れが文藝上の地位は、一大驚嘆なり。凡そ古往今來彼れが如く時代を破り、彙類

を破りしもの他にありや。當時歐州が中世の長き眠りより醒めて、文藝復興の光りにより、こゝに新鮮の天地を見たりし喜びは、おのづから映じて彼れが一代の作にあり、彼れの諸作を通じて見たる天地は、エリザ王朝のそれの如く、豐富なり、燦爛たり。廓寥として底に無限の淋しみを藏する中世の調子とは、おのづから類を異にす。加ふるに彼れが興味の中心の人間にありし、はた其の、事に逢へば直ちに之れを戯曲化し、客觀化する力の逞しかりし、凡て是れ近世的傾向の特色にして、ラファエロが第三期に於いて成さんとせし所のものを、シェークスピーアは一代の事業として大成せるの觀あり。其の他『マクベス』『ハムレット』、就中『ハムレット』に於いては、彼れまた近世の知識的傾向を最も明らかに表出したり。されども、彼れはまた矛盾の一面を有す。『ハムレット』『マクベス』の類より『眞夏の夜の夢』『あらし』の如きに至るまで、諸作に一貫して存するものは、一種の超人間的興味なり。單に超人間的といふは尙ほ盡きず。ローマンチックといはゞ、或は一層便なることもあらむ。『眞夏の夜の夢』『あらし』等が全篇此の調子に滿てるはいふに及ばず、『ハムレット』の亡靈、『マクベス』の妖婆、皆超人間的若しくは傳奇的空想的風味を、彼れが作に注加する所以なり。而して此の如き風味は、溯つては之れを中世に求むべく、下つては之れを十八世紀の末に起こりしローマンチシズムに見出だすを得ん。ラファエロは、始終宗教の藩籬に賴りしが故に、中世の感情を宗教、若しくは神、若しくは信仰として保留し、之に人間を和合せしめんとしたれど、シェークスピーアは宗教に執せずして中世を見たり。故に、其中世は傳說的、妖怪的、騎士的、巡禮的、超人間的といふが如き、ローマンチシズムとして彼の心に留まれり。近世の評論家、ローマンチックといふ語を直ちに中世的といふ義に解するものすらあるに至るは、以て如何に此の二つのものゝ相接するかを證するに足らん。而してシェークスピーアが作中のローマンチックなる風味、若し源を此に汲むとすれば、彼れは斯くの如くして近世と中世とを一に會流せしめたりと謂つべし。人間的、知識的、戯曲的は近世の潮流にして、超人間的若しくはローマンチックは中世の潮流

なり。更に簡單にいはゞ、ラファエロは人間と神、シークスピーアは人間と超人間、といふ形に於いて近世と中世との精神を一身に湊めたり

それより二百年の間、ラフエロが爲せし所と同精神なるものには、ミルトンの『失樂園』クロップストックの『メシアス』ハンデル。ハイヅン等が聖劇歌、乃至近くは英の畵家ワッツ、露の作者トルストイ等ありといへども、是等は未だ一時代を劃するに至らず、之れに反してシェークシピーアの爲せし所は、十八紀の末に及び、一大潮流となつて再び全歐文藝の岸を洗ひたり、史家之れを名づけてローマンチシズムといふ。されば、シェークスピーアが作中のローマンチシズムは、一方之れを中世に尋ね上りて、此所に中世と近世との會合を認め得べきと共に、他方は之れを十八世紀末に尋ね下りて、此所に學問興復の近世と、二百年の後之れに對して起これる反動的氣運との會合を見るを得べし。畢竟するに、彼れは中世と近世との調和なるか、將た近世と其反動との豫表なるか。そも〳〵また兩つながら之れを其の身に總ぶるものか。彼れが地位の重大且つ無類なる所以はこゝにあり。」

第九

論ます〳〵進まんとして、シェークスピーアは早くも我が眼界より去れり。懷かしかりし人の面影かなと思ふうち、ダンテは再び指を擧ぐ。

「群を成してシェークスピーアの後に續くものは、十七世紀の文藝星等なり。十六世紀は、ラファエロ等あるが爲めに前半を伊太利の文明に捧げ、シェークスピーアあるが爲めに後半を英國の文明に獻ず。十七八世紀は佛蘭西及英國の天下たり。彼の一列は佛のコーネイユ以下ヴォルテヤ等を前隊として、英のドライデン。ポープ等を後詰とせる人衆と覺ゆ。何れも身だしなみ上品に、整然また瀟洒としては居ながら氣力光彩に乏しと見ゆるは、十九世紀の反勤の羽風に、あさましくも揉み落されし爲めなるか。更に異しきは、見よ、彼等其の赤き道より轉じて、やうやく青き雲の道に移らんとす

るならずや。赤き道次第に落漠たり。文藝傾けるか、感情は遂に知識の急なる追躡に堪え得ずして、其の優越なる地歩を他に譲らんとするに似たり。學問復興の自然の結果は、此の外なること能はず。

此の期に屬する文藝の理想は、前例の一人たるブワローが詩論に明けし。模範は希臘、羅典にありとおぼしく、其の項目は、曰はく理を輕んずべからず、曰はく思想形式共に明瞭なるべし、曰はく外形の統一均整は必要なり、曰はく尋常なるべくして奇怪なるべからず、曰はく諷刺は眞理なり、曰はく詩の各體には各越ゆべからざる制限ありと。凡そ此くの如きものは、十七八世紀にわたれる英佛の大文藝が有せる特色なり。之れを概括するときは、形式的、理知的、尋常的、嘲笑的となる。更らに言はゞ、一切是れ感情を薄めて知識の間に工風を費やさんとする文藝の傾向にはあらずや。形式の整理、理知を容れたる詩、畵、常規を逸せざる思想、嘲笑し諷刺して、熱怒せず、同感せざる氣風、數へ來たれば、すべて知識の按排によりて始めて成就し得べき事項たり。知識的といふ一語は實に此の種の文藝の生命なり。

斯くの如き十八世紀に反抗して起こりしものを、十九世紀初頭の歐洲文藝とす。或は呼んで之れをローマンチシズムといふ。我れは意義の直截明確ならむことを欲して、之れを感情的、若しくは情緒的といはん。蓋し天地の間知識にあらざる存在は情緒にして、情緒にあらざる存在は知識なり。こゝに我家の哲學あり。故に我は十八世紀の知識的文藝に反抗するものは、當然情緒的ならざるべからずといふ。更に精しく言はゞ、形式的なるものに反抗するの心は、赤裸々の中身を抉出せんとして、ルーソーの「自然に還れ」となり、ワーヅワースの「感情の自然の流れ」となり、ゲーテ。シェリー等が理想となる。理知的なるもの、嘲笑的なるものに快からざるの心は、また、情熱主義となり、多感主義となりて、ゲーテの前半、ハイネ。バイロン。キーツ等を生ずべし。尋常的といふことを嫌ふものは、卽ち非常非凡の想像を超自然に求め、神祕に求め、宗教に求め、往古に求む。スコット。コールリッヂ。ワグナー等の傳奇、驚異、

神祕、超自然はこれならん。

さはあれど、是等のもの多くは一に會して感情の本に歸るといへども、或るものは外れて再び舊の知識に行かんとするを免れず。已に自然といふ語生まる、之を推し廣むる時は、所謂自然主義となるも已みがたき狀勢ならずや。已に理想といひ、宗教といふ語用ひらる、其結論が哲理となり、教義となるもまた是非なき趨向にあらずや。而して、自然主義は夫の寫實といふ近世の一潮流を併呑して、ます〳〵惡路に入り、遂に科學主義にまで墮せんとせり。佛のゾラ等は之れが代表者なり。哲理主義は、道德問題、哲學問題、人生問題となりて、一派の作風を成せり。諸威のイブセン等是れに據る。また教義は遂にトルストイを宗教化したり。

我れ語れば多辯にして、談は十八世紀より十九世紀の後半にまで飛躍したり。言ふべき事盡きずして、夜はいたづらに更けんとす。中間は省除して、直ちに現代の二三子を場に登らすべし。」

第十

「十九世紀末の文藝は、實に目もあやなる雜多の潮流の會湊なりき。前にいへるラスキン。ゾラ等の自然主義、ニイチェ。イブセン等の道德問題、ワッツ。トルストイ等の教義的宗教の外、多感派の脈を引ける新ローマンチシズム、神祕派と見るべきベクリン、はた自然主義の別流とも見るべき英のロゼチ等がラファエル前派、佛のマネー。モネー等が標象派、殆んど數ふるに遑あらず。

されども、中に就いて最も著かりしものは、自然主義と道德問題との二流なるべし。自然主義は近世を一貫したる夫の寫實的潮流と合して、殆んど全歐洲の文藝を風靡したり。此の點より見る時は、十九世紀の後半は、自然主義、寫實主義の時代なりきといふを妨げず。されども自然主義といふ中には、種々の波瀾を藏したり。自然を自然

のまゝに、若しくは現實を現實のまゝにといふが如き口氣は、ラスキンに於いて、ゾラに於て聞くを得れども、此は餘りに輪廓的たり、漠然たり。事實に於いても、自然を自然のまゝに寫せるものが、必ずしも十分なるにはあらず。此に於てか、或者は知的工風によつて別の力を藉り來たり、之によりて興味の源を涸らさざらんとす。心理學なり、遺傳論なり、社會問題なり。寫實主義自然主義が落ち込まんとする穽は、常に此の邊にあり。之れを文藝上の科學主義といふ。此に至れば、文藝は科學、否、自然主義に囚はれたるなり。更に適切にいはゞ、文藝は再び知識に囚はれたるなり。

此くの如き意義ある自然主義に對しては、勢ひ感情の反抗、知識の憎惡を表すべき氣運所々に起らざるを得ず。歐洲の評壇に、近時、科學的文藝評の多く喜ばれざる、ラファエル前派、ワッツ派等の畫風の復興を見んとする、若くは白耳義のマーテルリンク等が神祕主義を取つて立つと稱せらるる、皆此の氣運がさする業なるべし、而して前にいひたる佛、獨の標象主義といふものこそ、千八百九十年前後より廣まりて、自然主義に抗せんとする凡ての領向を總括したるが如き名にはあれ。十九世紀の始めには十八世紀末の古典主義に反動したる彼れが如き雜多の思潮を概稱して、ローマンチックと呼びぬ。今は二十世紀の始め十九世紀末の自然主義に取つて代らんとする諸思潮を概稱して、シンボリックといはんとす。面白き對照なるかな。

標象的といふ語は、上は希臘のプラトーンが美論より、下つてはニイチェが『ツァラツーストラ』にまで冠せらるゝ名なり。更に下りては、則ち今の標象派詩文人之れを標榜す。獨乙の一評家は、之れを分解しておもへらく、標象主義の中には、少なくとも三方面あり、頽廢期的兼女性的（デカデント、フェミニスチッシェ）快樂的兼超人間的（デヰオニシッシュ、ユーバーメンシュリッヘ）及び神祕的兼初心的（ミスチッシュ、プリミチーフェ）是れなりと。されども此の流派が果して將來長く此等の氣運を統率するの名たるに堪ふるや否や。此は未解の問題なり。同じ評家は謂へらく、獨乙人等は佛人より標象主義の名を借りて已に十數年、之れに代はるべき新しき題目をば得たしと思へ

ど、未だ之れを發見せざるを如何にせんと。

標象主義は、小說劇等の上にも見はれたり。獨乙のハウプトマンが『沈鐘』は其の好例たるべし。佛のサードゥが英の名優アーヰングの爲めに我れダンテを材とせる劇『ダンテ』も此の部たり。溯りてはイブセン。ニイチェ等にすら、早く已に其の徵を見るといふならずや。

更に試みに學者といふものが理によりて解する標象主義の意義を聞け。現代の歐洲の美學者中、最も覇を稱するは、蘇格蘭セント、アンドリゥ大學のボザンケ、獨乙ミユンヘン大學のリップス、獨乙ライプチヒ大學のフォルケルト等ならん。ボザンケには美學史の著あり。近代歐洲に出でたる美學史中の白眉と稱せらる。書中、希臘の美論を評する爲めに掲げたる三標準の一として、著者は標象的と模寫的との對照を作れり。言ふ心は、模寫とは只だ見ゆるがまゝ聞こゆるがまゝの寫本を極意とするといふなり。標象とは、見ゆるもの以上、聞こゆるもの以上にある一物、すなはち見えざるもの、聞えざるものを拉し來たツて、見ゆるもの、聞こゆるものに寓するを目的とすといふなり。而して希臘にありては、プラトーンすら尙ほ美術は模寫なりといふを憚らず。されども、其の終に眼に見るべからず、耳に聞くべからず、唯心に思念して憧憬し得るものをも模寫すといふに至りては、プラトーンの模寫論はおのづから破綻を生ぜざるを得ず。此の破綻こそ、後に及びて一段高尙なる標象觀の出で來たる端緒なれとは、此の著者の言ふ所たり。此の意を推し廣むるときは文藝は、時勢につれて標象的となり行くを、進步の路程とするなり。ただボザンケは、別にハルトマン等の理想具象觀を援取する所あるが故に、近世の文藝を直ちに凡て標象的とは言ひ得ざらむ。されども、下の一事は明らかなり。曰はく、內在の一物と外在の事象と、二重なるものが、如何なる方式を以てか相結合する所に、標象的といふことを生ずと同じく二重なるものゝ干係なりといふに論を起こせるは、フォルケルトが今春公にせし『美學系統』第一卷の標象論の條なり。此の人はおもへらく、標象は日常の事にもあり、十字架を以

て耶蘇教を標するの類は是れなり。されども是れを導いて審美の世界に入るゝ時は、別なる意味を生ぜん。第一は有相的標象（フォールシュテルングス、ジムボリーク）なり。人事の進行の中に、明らかに思念し得べき別の感想を寄するをいふ。ベクリンが『人生は短き夢』の圖に於いて、花に戯るゝ少女等、戎衣の袖も赤き騎士、やがては老い行き、死に行く白頭の人、是等を配して、我等がはかなき夢と空想とを以て飾れる人生、其の終局の慘憺さなどいふ思想を寓したるが如きは、卽ち是れなり。次は全化的標象（フェヤアルゲマイネルンデ、ジムボリーク）といふべし。事象の一部を取りて其の類の全階級を之れに表出せしめんとするなり。個を其のまゝ全の地に高むるなり。ゲーテのファウストが或る意味に於いて全人間を代表するのたぐひならずや。終りは情趣的標象（スチンムングス、ジムボリーク）といふ。第一の場合に於いて內在の一物が、明白なる感想なるに反し、玆なるは全く無相、たゞ一の名狀しがき情趣の縱橫に浮動するを覺ゆるものなり。此の種の標象美術は、多く其の材を非情物に求む、單なる色、音、模樣、建築といふが如きものに最も多し。人事を避けたるなりと。兎にも角にも、此等の解釋はみな、標象的文藝の要素たるべきこと、爭ふべからず。然れども、我れは斯くの如き標象主義及び、之れに漏れて而して尙ほ十九世紀後半の自然的潮流に反動し來たるべき、幾多の傾向を、總稱する別の名を有す。之れを橫より呼ぶときは情趣的なり。之れを縱より呼ぶときは宗敎的なり。」

第十一

「情趣的といふ語は、我れすでに之れを屢々繰り返せり。所謂自然主義が知識の工風、知識の補助に墮せんとするとき、悍然として之れに反抗するものは、其の主義所執の如何に拘はらず、必ず何れの邊にか感情を生命とせざるべからず。例へば夫の理想といふが如きものも、知識の跋扈を惡みて之れに對立せんとする場合にあつては、其形必ず漠たる感情ならざるを得ず。明白なる理想は知識に入るものなればなり。其

の他快樂的といひ、女性的といひ、神祕的といひ初心的といふが如きは、すべて知識の明確以外、感情の自由なる天地に出でんとする傾向の變形たるを見る。更に之れに多感的傾向も加はり來たるとあるべく、超自然的傾向も馳せ參ずるとあるべく、往古的傾向も來たらば拒むとなかるべし。此等の一切を總括するものは情趣主義なり。

更に繰り返して之れを思ふ、文藝は囚はれたり。十九世紀の後半に於いて遂に精力非凡なる知識の爲めに囚はれたり、追ひ越されたり。我れは、ミューズの壇前に爨ぐを焚いて、囚はれたる文藝の爲めに義軍を擧ぐるものゝ意を諒とす。

今の文藝は一旦、全く知識の羈絆より切り放たるべし。而して其の放浪する所は情の大海なるべし。情の海より搖れ來たる千波萬波は、斷えず我が胸の岸邊にそゞろの音を立つれども、彼方の岸は究むべからず。今の文藝は先づ此の海に入りて自由を得よ、其の垢を洗へよ。」

第十二

「さは言へども、我れは自然主義を呪咀し去らんとするものにあらず。十九世紀の大なる文藝は、大半此の主義の影響を蒙りて生じたり。惡む所はただ其の極端のみ、知識に隷してより後の自然主義のみ。されば此の主義が更に一たび其の自然に還りて、飾らず、矯めざる自然の感情の源を穿つに至らば、是れもまた情海の旅程に帆を幷ぶる一同行たらん。且つや、自然主義は、十九世紀の後半に於いて、彼れが如くならざるを得ざりし理由あり。ローマンチシズムの浪は如何に寄せ返したりとも、一方に於ける知識の進歩普及は、駸々として秒時も止まらず。現に眼に見、耳に聞く所の驚嘆は、すべて知識の事業なり。斯くして、知識は遂に牢乎移すべからざる基礎を近代の人心に据ゑたり。何人が如何なる方向に活動を起こさんとするにあたりても、傍に知識の一席あるをば無視すること能はず。知識は常に何事にも其の言を挿むを忘れざりし。

之れを觀るときは、自然主義はまた時勢なり。されど玆に自然主義と手を分ちて行きし一派あり。十九世紀の兒と生まれし限りは、事に觸れ物に接して、知識は泉と湧き絲と縺れて止め途なし。彼等は、此の含蓄豐かなる知識をとりて、生きたるまゝ直ちに文藝の俎上に拋たんとす。科學者の爲す如く、死なして之れを截り出ださんは容易の業なれど、願はくは之れを活きたる一塊の物として解きほぐしたし。如何にせば、我等が胸底の知の泉は其の甘味を失はずして世に流布せんか。彼等は斯くの如く案じわづらひたり。古のローマンチストは「感情の自然の流れ」と叫びたれど、今は「知識の自然の流れ」と叫ぶものあらんとす。イブセン等が行けるは此の道なり。

イブセン來たりぬ。老體を杖に支へながら、巧みに青赤兩道の中間をあやどり行くを見られよ。彼れは所謂近世問題劇（プロブレム、プレー）の祖なり。問題劇といふ語の意義は廣けれども、近時歐洲に於いて此の名を冠するは、普通に道德問題と相涉れるものなり。或者は、之をイブセンの社會問題劇といふ。されども、イブセンが取扱ひたる問題は、ゾラが、飲酒問題、金力問題、敎權問題といふが如きものを取り扱ひたるの故を以て、社會問題に携はれりと稱せらるゝとは類を殊にす。イブセンの問題は更に深し、道德問題なり、而かも第二義道德にはあらずして、第一義道德の問題なり、道德の根本に關する問題なり、哲學的、人生觀的なり。

八年の間、我れ我れを知らねば、人をも知らず。唯不自然なる人形の如く日を送り來しノラが、一日俄然として眼を開けば、我れは尊き自然の我れを僞はりたり。我が眞を追はん爲には、慈愛ある夫も、いとしき我が子も、顧みるには足らず。籠の戶潛りし小鳥の如く、まつしぐらに高行く感情と翔りたる、また哀れならずや。罪もなき夫を鰥にし、罪もなき我が子を孤にする、それも道德の心に苦しからずとは言はず、されど我れは之れよりも尊きものを見出だせり、之よりも高き道德を認めたり。我が自然の自由を追うて走る心中の情は、夫のため、子のための道德よりも更に尊からずや。一篇の『ノラ』は斯く問ひぬ。やがて是れイブセンが提起ぜる道德問題なり。我れは

思ふ、是れ好個の哲學なり、含蓄ある知識なり、イブセンは、巧みに之れを感情の海にすくひ取りて、一流の文藝をなせり。されども、其の所含あまりに明瞭なるが爲め、新奇の色を失はざる限りは、人の視聽をも動かせど、終には墮して、知識に消化せられ了せん事を恐る。知識に囚はれたりといはず、一歩すれば則はち囚はれんとするものなりといふ。されば知識に飽きたる十九世紀末は、此の異彩ある文藝を早くも反動の氣勢によりて拂拭し去らんとす。我れはむしろ此の種のものに一片の愛着心を有するなり。

次に來たらんとするものは、獨のハウプトマン。ズーダーマン英のピネロ等ならむ。前なる二人はイブセンの跡に續きながら、斷えず身を赤き道に傾くるを見ずや。後の一人ピネロは、むしろ一路にイブセンが跡のみを追ふと見えたり。ピネロは地位に於いてアーサー、ジョーンスと共に英國劇作者界の泰斗たれども、イブセン風なる問題劇の末路甚だ振はず。動々もすれば過去に屬する者と見られんとす。其の回頭期を示したる『後のタンカレー夫人』以來、また一世を動かすべき作なし。此の作と並ぶべきものは、ズーダーマンが『其代榮へよ』の一篇ならんか。二つながら、一婦人が夫に對する我れと、過去の我れ若しくは他面の我れとの衝突を主題とし、其の婦人の滅亡によりて僅に其の衝突も滅亡すと描く。之れより來たる解決の感は、人によりて種々なるを得べし。我れは以上の作風を名づけて哲理的といはん。」

第十三

「哲理的なる文藝は、近代の知識の非常なる發射力に應じて生ぜしものなり。而して斯くの如き思想上の形勢は、實に文藝復興以降數百年に亘れる一大經過の結果なるが故に、萬人如何ともすること能はず。凡そ一旦十九世紀に身を置いたる者は、文藝に於いても宗教に於いても、決して知識の壓迫力を度外視するを得ざるなり。さるが故に、工風はおのづから、如何にして此の知識を文藝の海に溺らしむるを得んかといふ

一點に集まる。智識は常に感情を手取りにして、解體し殺戮せんとす、是れ事實なり。文藝はすなはち感情を斯くの如き危險より拯はんが爲め、知識の足がゝりとなり爪がゝりとなるべき一切のものを包被し、若しくは除去せんとすることあり。之れを、我れは名づけて神祕的といふ。哲理的文藝は、大膽にありのまゝに理知を結撰して、そこに文藝を見んとすれども、神祕的文藝は、退いて十九世紀が集積したる知識より回避せんと欲す。明らかなる月の夜に爛熟の花を見んは、妙ならぬにあらざれど、俗事の眼を遮り來たるを如何にせん。暗夜靜かに滿天の星と語るの神祕さいかばかりぞや。知識は限りあり。感情は限りなし。知識の盡くる所はやがて神秘なり。

獨逸近代の畫家をいふときは、人まづベクリンとメンチェルとを擧ぐ。メンチェルが畫ける所は、宮廷的貴族的のもの多くして、最も有名なるは今伯林の王城にある先帝戴冠式の圖なり。寫實派の巨擘と稱す。之れに對してベクリンは過去數十年を代表すべき理想派畫家の棟梁といはるれども、特色は、其の神秘なる暗色乃至對照色を用ひて、幽玄の情を之れに寄するにあり。有名なる『墓島』の圖は、最もよく此の作者を代表す。蘆々として大魔王の如く并び立てる杉檜なんどの、只輪廓のみ青く黑く染め出だされて、凄凉の氣まづ人を襲ふ所に、樹間極めて小さく、而も極めて鮮やかに一基の墓石立てり。其の前には白衣の女、髪ふり亂したるが、之れも墓石に釣り合ふ程に小さく、鮮やかに、膝を折りて禮拜の掌を合す。繫ぎ捨てたる舟は彼方にあり。全幅の色調、寂然また瀟然、神祕の氣咄々として人に迫るを覺ゆ。斯くの如き畫に就いて見るも、神祕的文藝は理知を要せず、また之れを有せず。尋常の事象よりして、直ちに或る深奥不可思議なる感情に闖入す。中間に理知の容喙を許さず、是れ其の知識的文藝に反して起こるべき資を有する所以なり。

更にまた神祕的と連續して見らるゝは、超自然的といふことなれども、玆には之れを神祕的といふ項下に合せんとす。蓋し超自然に材を取るの發意は、是れによりて知識の干渉を一排し、以て自由廣濶なる感情の天地に羽うたんとするにあればなり。超

自然的、超人間的なるが故に、ここに驚異來たり、不可思議來たり、神祕來たるは當然の數なるべし。

超自然的文藝の好例はオペラに多し。音樂界にありてローマンチシズムの近祖と稱せらるゝ獨のヴェーバーが『フライシュッツ』中、主人公が惡魔に敎へられて魔術の彈丸を鑄る一場は、下には巖穴の間に髑髏の影亂離として、上には妖雲起つて頻に東西し、全面の光景おのづから遠く人間界を出で、鬼氣人を襲ふと共に、沈痛、雄大、神祕なる音樂は、我れを導いて、廓落涯りなき世界に入らしむ。此の瞬間、我れはまた知識を以て其の境の假實を檢するに堪えざるなり。其の他ワグナーのジーグフリートが、鳥の高音に導かれて、歌ひつれながら、ブリュンヒルデの長夜の眠りを醒さんと火もて圍める巖上に登り行くあたり、ロルチングのウンデヰネが、男の邸宅見る〳〵海底と變りたる龍宮に、始めて男と戀を全うする一齣、みな知識以外に出でゝ近代文藝の大を致せるためしなり。我れは之れを總稱して神祕的といふ。知識を絶し、若しくは知識を消したる形といふ義なり。」

第十四

「今若し上の如き諸多の思潮を、縱に次第して見る時は、またおのづから別樣の意義あるを感ず。卽ち自然主義、哲理主義よりして神祕主義乃至標象主義に至れる傾向を推し延ばすときは、次に來るべき頂點は、おのづから明らかなるにあらずや。曰はく、宗敎的といふこと是れなり。

宗敎的といふときは、人は直ちに露西亞のトルストイを連想するならん。されども茲にいふところは之れと異なり。思ふに、トルストイは旣成宗敎に囚はれたるにあらざるか。見よ、彼方の赤き道より殿として登場するものは、此の聖人なり。彼れが敎義を具象的に見得る好作の一例は、『復活』ならんか。主人公ネフリユドフと、女主人公カチューシャとが、西比利亞の荒原に於いて、遂に博愛獻身の大精神を全うしたる、はた其

の取材取景の上に見はれたる所々の基督教的感想は、げに誠實と覺えたり。味の誠實、是れだにあらば、如何なる感情か描いて人を動かさゞるべき。トルストイの文藝は實に宗教的なり。されども、此の場合に於ける宗教は基督教なり。トルストイは所詮基督教的なり。彼れは既成宗教に囚はれたりとは、此の義に外ならず。それ基督教の教義は、大體に於いて已に餘りに明白なり。愛といふ一語、枝葉の解釋は幾ばくあらんも、其の根本的意義は殆んど自明なり。直覺なり。又其の範圍は余りに廣大にして、抽象に近づき、刺戟力を缺く。此等の理由よりして、我れは此のもの文藝全般の生命となるべき題目にはあらずと斷ぜんとす。感情の海は無邊際なり。若し一切の文藝は愛（廣義の）の說法ならざるべからずといはゞ百弊は立どころに生ぜん。前に擧げたるイブセンの『ノラ』は、斯くの如き基督教義をば、宣傳せざれども、其の大文藝たる既得の地位は何人も奪ふこと能はざるべし。トルストイが『藝術論』中の美論に見るときは、彼れが其の結論を基督教に嫁せしめたるの嫌は避くべからず。彼れおもへらく、美の客觀的說明は次第に蹉躓し去りて、主觀の感情のみとなれり。文藝は快感情にして、また他に對して感染力を有するものなり、文藝は文藝の爲めにあらずして、人間の爲めに存在す。故に又道德とも無交涉なること能はず。文藝が感染的に人と人とを結合するは善事ならずや。此等の點よりいふも、最も文藝に適したる感情は基督教の精神なり。但し玆に基督教といふは、其の踏襲的意味をいふにはあらず、眞精神を指すなりと。眞精神は可なり。されども、尙ほ之れを基督教と限るが故に、之れに合せざるものは不善となり、不美となりて斥けらる。殊に近代の文藝に至りては、此の如き、範圍の中に入り得ざるもの、數ふるに遑なからん。而も我れは此等の凡てを一掃して、火中に投ずるの勇氣を有せず。トルストイは基督教に囚はれたるにあらざるか。

文藝の上にて、宗教的といふときは、其の意一層深し。我等が凡ての文藝に對するときは一種微妙の快味を感ず。前後左右を忘却して醉ひ入りたるが如き醇味を嘗む。蓋

し快樂の擴充せられたる狀態なり。此の點よりいふときは、文藝の悅樂には高下の品等なし、凡て絕對、唯一、平等なり。されども斯くの如き感情の下に潛める知識は、到底永く無言にして已むべくもあらず。或る場合には、日常道德の聲となつて善惡の批議を試み、或る場合には科學の聲となつて、眞僞の判斷を下すならん。哲理的文藝は卽ち之れを導いて、理趣そのまゝを情の衣に包みたり、味ある文藝の一方式たり。神祕的、標現的文藝はまた、此の知識の明りを閉ぢ去つて、感情の暗所空所に美の神を安置せんとせり。之れも風情ある文藝の一方式たるを失はず。去りながら、此等のもの單に此に止まらば、美の最上座は尙ほ一扉の奧にあるべし。我等が眞に大なる文藝に於いて味ふ最後の者は、言ひ難き一種の妙機なり。我れ之れを何とか說かん。譬へば讀下に、觀底に、鏗然憂然として音を成すが如き機微あるなり、魂魄愕くの境あるなり。事は一小部なれども、其事直ちに全人間、否我が全經驗に響きわたりて、人生、運命などいふものに今更の如く頭を回らし來たるの情禁じがたきの謂なり、哲理的より進んで、其の上に悟入あるなり、神祕的より進んで、其の奧に直觀あるなり。之れを宗敎的といふ。要するに此くの如き主義にての宗敎的とは、人生最後の命運に回顧するの情を刺戟するなり。文藝の奧に、廓落として、廣大無邊の天地開け來たるなり。文藝は此の域に達して始めて眞に大なりと謂ふべし。」

第十五

「東海の客。我が宗敎的文藝といふの意義を領せられしか、いかに。文藝一たび此の妙相を着くる時は、たとひ其は刹那的たらんとも、聊かも厭ふところにあらず、文藝は滿足すべし。之れを讀むもの、見るもの、聞くもの、みな必ず是れによりて、忘れがたき妙旨を味ひ得べし。

而して文藝が漸く此くの如き域に向かはんとすると共に、全般の思想界また、傾き行く所は宗敎にあるか。世人或は未だ意識せずして、さま〴〵のものを要求しつゝある

こともあらん、而も其の落ちつく所は、宗教を求むるの聲なりしことを發見するの日、必ず來たるべし。たゞ我がいふ宗教は、此の所にも既成の宗教を指すにあらず、一層廣き意味に於いてするなり。各個人各個の教義出づるも妨げず。またわが求むる宗教は理知の調和を要するものにも非ず。宗教は所詮感情なり、理知の絶したる所に生ずる一種の感情ならざるべからず。從つて之れに到達する方式は、悟入的、頓悟的なるの外なからんか。而かして此くの如き感情は、傳染的なるか、または個々自發的ならざるべからざるか。此は我が玆に答ふる能はざる所なり。

宗教の意義、上の如くなる時は、之れに入らんこと甚だ容易、また隨意とはいふべからず。一旦之れに入る時は、其の持續及び復現も必ずしも難事にあらざること、學者等のいふが如きものあらん。されども、先づ入ること、易からず。此に於いてか文藝の門を開いて、我等は、そこに少時ながらの妙法を示さんと欲す。

あゝ我れ論に興湧きて、いたくも夜を更かしたり。今夜はさらば。」

名殘惜しく、袖を引き止めんとするに、姿は早くも失せて、彼方水天の極みに、青赤の雲道虹の如く消ゆると見れば、今まで開いたりし天と水とは再び相迫つて、僅にもとの一髮線の明るみを殘すのみ。天地闇々、山腹なるラヴの火もまた火勢衰へたりと覺し。

後の半夜は、狹き船室の寢床に、眠りもやらで過ごせしが、船は未明に錨を抜いたり。而して歸來早くも百餘日、ヴェシゥヰアスの火は今も燃ゆるなるべし。

附記

わがナポリの沖の一夜の瞑想は、ダンテをして我れに情趣的、宗教的の二語を語らしめたり。文藝の舟を知識の杭より解き放ち、情趣の海に浮んで宗教の岸に到らしめよ。取るべき針路は、哲理的可なり、神秘的可なり、標象的可なり、はた、自然的可なり、寫實的可なり。要は目ざす所に一境非凡のもの、人をして、胸躍らしむるもの

あるに止まる。是れ幻中のダンテが說法なり。

我れおもへらく、情趣的よし、宗教的よし。されども尙此の外に、日本の現代といふ特殊の事情に應ずべき文藝觀なかるべからず。其は、正しく日本的若しくは東洋的文藝の發揮といふことならんか。時は國興こり、國民的自覺生ずるの秋なり。東西兩洋の感情には根柢に於いて到底容易に混ずべからざるの相違あり。此の感情の發揮たる文藝は、さればまた、東西別彩として存するも當然の事ならずや。文藝若し終には世界に統一せらるべしといはゞ、それにても可ならん。只其の前に當つて、先づ十分に自家を發展せしめんと要するなり。我れ嘗て匈牙利に遊び、劣りたる西亞の文明が、千年の間に如何に全く勝りたる東歐の文明に征服せられ滅亡せられたるかを見て、涙のにじむを禁じ得ざりし。日本は先づ、日本乃至東洋の文明を確立するの必要を感ぜんか。

英にキップリング等の英帝國主義を歌へるあり。獨逸の文藝は世界にありて、最も多く國民的といふことに意を注げるものなるべし。十八世紀後半以後の、いはゆるローマンチックの文藝が、此の一語によりていかに誠實を加へ、奮發を加へたるかは、史を讀めるものゝ知る所なり。近くは標象的文藝の蔭に、早くも自國文藝（ハイマート、クンスト）を喚ぶものあるも、此の國なり。日本文藝の特種の刺戟は、それ東洋趣味の發揮といふことにあるか。

情趣的、宗教的、東洋的、此の關係論はなほあるべきなり。「放たれたる文藝」を說いて更に我が想を尋ねん。（明治三十九年一月）

沙翁の墓に詣づるの記

一

千五百八十六年の春、四月の央(なかば)でもあつたらう、ウツドストツク街道からオツクスフオードの北の宿はいづれに差しかゝつた、二十二三の旅人がある。疲れた足を停めて今宵の宿はと見廻はすと向ふに何某のインといふ、古風な蔦なんどの這ひかかつた旅籠屋の土壁が、今しも薄れ行く春の日影を一杯に浴びて、あか〳〵と照り榮えてゐる。

北の都會からロンドンへの街道筋とて、此邊は殊に上り下りの人馬繁く、宿屋の門には朝夕の送り迎へが賑やかに見られる。インの狹い階子を昇つて、明りのついた取りつきの部屋に這入ると、玆は石入の厚い叩き壁に古色ゆたかな、天井の低い、小さな、穴倉の樣な室がある。四月といつても北歐羅巴の夜陰はまだ薄寒い。ストーヴには薪火が今丁度燃え上つて、マントルピースの上の燭臺の明りが却つて心細い。

椅子をストーヴに近く引き寄せ、手を拱いて、默然として燃え立つ火影を見つめゐる、彼の旅人の面は赤く輝いて、額の廣いのが目立つ。

折から靜に扉を押して這入つて來たのは、此の家の娘であらうか、十八九ばかり。客は不圖瞳を擧げて其の方を見た。娘は面はゆげに顏を背むけて、無言のまゝに晩餐のテーブルを調へやがて出で行かんとする。

「姉さんは此の内のお娘御だね。」

「どうですか。」

「まあ、聞きたいことがあるから、お座んなさい。さあ此の椅子に。」

「有りがたう。何ですか聞きたい事つて。あなたはロンドンへお出でなさるのね。」

「さう。ロンドンへ行くのだが……。其のロンドンがね……。」

「結構ですわ。わたしも來年の誕生日は、ロンドンの伯母の處で爲る筈ですが、來年といへばねえ、隨分待ち遠いこと。」

「あゝあ、ロンドン！　そして何ぜさうロンドンへ行くのが嬉しいのだらう。」

「何ぜつて、それはロンドンですもの。わたしの從兄妹だけでも三人居りますし、その中のフレッドといふのは、去年の暮も此處に來てゐました。男には珍しい程美しい眼を持つてゐて、そして唄が上手で……。それは善い聲ですよ。」

うつとりして、目のあたり其の唄に聞き惚れてゞもゐるかと思はれた時、入口の戸をコン〳〵と叩く音、メーリーと優しき呼び聲、イエスと輕く答えて、女はたち去つた。

「あゝ！　戀だ！　戀を求めてロンドンへ行く。あれで人生が濟めば仕合せなものだ。自分は何を求めてロンドン三界へ迷ひ出るのであらう。自分だつて故郷には戀もある。夢もある。その故郷に住みかねて、行く手は雲のはる〳〵、是れから浮世の波風と戰はねばならぬ。前途の闇の明け方は、空に明星か、海に眞珠か、望みの的はあざやかに我が手に落ちやうか。それともロンドンの大路の塵にまびれて、一代をすがれ行く荷馬の如く、死して跡なくなるであらうか。天使の樣なあの乙女が身は、成程光明に包まれてゐる。それに照り合はせて、今さらのやうに我身の謎が目につく。此の謎の解き場はロンドン。あゝ、ロンドン！」

と獨り思ひに耽つた旅人は、翌朝オックスフォードの町を越して、重ねて南へ〳〵と旅を續けた。

我れには此の弱き旅客の名が、ウィリアム、シェークスピーアであつたらしく思はれる。

二

山の懷水の畔と、地上の住ゐは廣いが、こゝ英國のロンドンから西北へ百ヶイル許

り、エヴン川の岸のさゞ波に夜毎の夢を洗はする、スツラッフォードの片隅に、方五間には足るまじき一地を劃してそこを長しへに世界の眼目とし、そこに不滅の靈火を點じた、造化の寵兒シェークスピーアが家は、まことに人の世の譽れかな。大英國は縱し亡びても、シェークスピーアは亡びぬ。此の一地域ありしが爲に永劫不壞なる英國も亦た幸ひではないか。

ロンドンに出でしより後のシェークスピーア、殊にも其の著作ありてより後の彼は、千の傳記、百の考證よりも、彼れみづからの書こそ最も明白に之れを傳へてゐる『ハムレット』、『マクベス』の著者は『ハムレット』『マクベス』の著者として天日の輝くが如く遍く後昆を照してゐる。之れに想像を加へんには既に余りに煌々たるに過ぐるであらう。唯我が最も想ふは、スツラッフォード、オン、エヴンの一青年たりしウォリアムが身の上である。

斯やうな思ひ出に導かれて、我が始めてスツラッフォード、オン、エヴンの土地を踏みしは過ぐる年の春、某月某日であつた。オックスフォードから汽車で二時間が程、巴旦杏の花の暖に赤い家幾つかを過ぎて、停車場近く來れば、かしこに見える一群の樹立が、早やホーリー、ツリニチーの森といふに、何となく心ときめく、繁みの色はまだ調はぬながらの蒼さ、中央から肅然として立ち上つたる尖塔は、げにも默して天をさす指の如く、其の深い意義をば、唯感涙あるものが測り得やう。停車場から新開の道を病院の前に出で町に取りかゝると、もうそこに行き當りがある。廣い四つ辻の眞中にしつらへた噴水はいま樣ながら、町は何所ともなくさつぱりとして優雅の趣を具へてゐる。店の構へ看板の具合などまでどうも唯の町では無いやうだ。右手は商人宿で向ふに農作物の店が見える。あの店！　シェークスピーアの父の店も盛んな時はあんな風であつたらう。見れば店先に小供が遊んでゐる。

ひよつとするとあの子の顏がシェークスピーアの幼な顏にでも似ては居まいか。

と用もないに其の間近まで行きかけると小供は外國人と見て逃げ出した。馬鹿らし

とは思つたが、いや併し、此のあたりは、古來交通が薄く、血統が單純であるため、面相がおのづから類似型を有してゐると聞いた。シェークスピーアの面相にはスツラッフォード型といふものが過たず現はれてゐるといふ。さすれば今の子供に、彼れの幼な顏が寫つてゐまいにも限らぬ。も一度跡をつけて見やうか。

など忙しき空想に耽つてゐるあひだ、時は午に近くなつた。地圖によると、此處から向ふの角の小路を抜ければ、すぐ其所がヘンレー、スツリート。シェークスピーアの舊宅の殘つてゐる所である。と思ふと飛び立つやうには感ずるが、先づ宿を取つた上と、大橋通りのゴールドン、ホテルといふを探した。廣い通りを眞つ直ぐに辿ると、幾らもあるかぬ内に早や、橋が見える、其の下はエヴン川であらう。町は之れで盡きるのだから、誠に小さい可愛らしい都會である。ホテルは橋のすぐ手前であつた。

三

旅行の季節とて、ホテルの客室は凡て約束濟、よつて是非なく近所の室内裝飾品を賣る家の一室を借りさせ、食事だけはホテルに來てすることゝなつた。晝食はひとり後れて調へたれば、食堂の模樣などはまだ見ず。兎も角もと、近くのヘンレー、スツリートへ先づ驅けつけた。

あれがシェークスピーアの生まれた家といふ、其の前には成程多勢の人が入場を許されるのを待ち合せてゐる。また此方の軒下には馬車の客待ちをしてゐるのもある。併し斯う見わたすと、さして長くもない通ながら、何となくからんとして、人の往來も少ない、如何にも田舍の小町といふ趣である。折しも空には薄雲が掛つて冷氣を含んだ風が町を吹き渡つて來た。何だか淋しいやうな悲しいやうな風情である。

想像して見ると、シェークスピーアがまだ腕白盛りの頃は、例のグラムマー、スクー

ルに通ふ朝夕の途すがら、弟と肩を組んで、此の邊を行きつ戻りつしたものであらう。そして年よりも老せた彼れは、十六七にもなると、もう一廉の若い衆氣取りで、日本ならば湯歸りの手拭を肩に、つっかけ下駄か何かでそこらをそゝりあるく方であつたらう。いや彼れは案外におとなしい質で、朋輩からは若年寄といふやうな綽名をも附けられてゐたかも知れぬ。父が家産の傾くにつれ、生活の辛苦は早くもこの大天才が青春の夢を蝕みそめて、弟と共に商品の買出しから、偶には得意回りもする、稼業の手傳に追はれて好きな雜書にも讀み耽ける暇は無くなつた。夜遲く店を仕まつてから、僅かに自分の寢室で覺束ない蠟燭の光をたよりに、昔の心ゆく唄の本などを讀んでゐると、其の明りが、あの今見える東北角の窓から微かに漏れる。

頃しも秋の末、月も無い霜夜の事であつた。シェークス ピーアが優しい情を忘れかね、八つの姉でありながら、我れから戀をして、深くも彼れと契つたアン、ハサウェーは、三月の身重く、窶れた樣の目につく頬を風に吹かせつゝ、窓の明りを心あてに、そつと尋ね寄つて呼び出せば、男は心得て忍び出づる。つれ立つて指して行つたはあの橋の袂、アンが身の始末を二人しみ〴〵泣きつ語りつしたであらう。氣がさして、ぶと橋ある方を見かへれば、二人の後姿にはあらぬ一群の男女が、アメリカ音に語り興じつゝ、此方を指して來かゝつた。

四

げに世界の如何なる處にも見がたい偉觀は、此の矮屋の一隅シェークス ピーアの誕生室であらう。金字に雕られては、帝王の書架をも飾る文學史上の大名が、見よ此の一室に來ては、如何に賤小に、如何に謙抑に、窓、壁、天井に其の跡を留めて居るかを。說明係の男が、一葉の薄紙を窓の硝子に當てゝ指し示す所を見れば、縱横に切り込みたる名字の中に、鮮かにスコットの名も見られる、カーライルの名も見られる、天井には、ブラウニングの名が切つてある。そして此等の人々は、此の室の主人の前には、

一切の地位階級を棄脱して、無名微賤の巡禮者として讃仰の意を主人に捧げてゐるらしい。

其の外に、いはゆる何人も一度は腰かけて見る紀念の椅子。我れが其の側に立つて長々しい説明に耳を傾けてゐる間、傍にありし一老紳士と、そが娘とも見える妙齢の一婦人とは、先づ紳士から始めて試みに其の椅子に腰を托した。

「シェークスピーアは、さう太つた男であつたとも思はれんが、私のやうなものがしばしば腰をかけると、成程是れでは脚も減りさうぢや。はつは。見物人が腰をかけるために椅子の脚が減るといふのは、丁度あのカンターベリーのお寺で、巡禮共が禮拜の膝を突くために石段の中程が凹んでゐるといふのと好一對の話ぢやな。さあお前の番ぢやぞ。」

娘は輕く周圍の人に會釋して、しとやかに身を落とした。

「お父つさま、似合ひまして?」

と心持ちそり身になつて見せる。

「うむ、ク井ンぢや。」

「ほゝゝ、文學の玉座に直つたのですもの。」

と父と我れとの方を等分に見て立ち上つたが、父の側に寄つて「日本の紳士を」とささやいた。すると老紳士は我が肩を叩いて、

「さあ、あなた、一つ腰をかけて御覽なさい。」

我れも同じ道に心を寄するもの、緣なればこそと、人のする通りを爲て見た。續いては、シェークスピーアの指輪、シェークスピーアの印形、シェークスピーアの肖像と、確否は知らねど、斯かる場所には附き物の遺物の數々を巡覽して、再び町に出る。

五

大通りに沿うてシェークスピーアが專ら羅典の知識を得たといふグラムマー、スク

ールの前からホーリー、ツリニチーの寺地まで、殆ど此の土地を縱斷しても、三十分とはかゝらぬ。

町の周圍に散在する菅笠を伏せたやうな丘、其の間に廣がる牧場、畠。立木は楡柏山毛欅、水松の類が多からう。總じて綠の廣い緣をつけたやうな瀟洒たる小都會、その東南を限つて流れるのが、可憐なエヴン川である。

春であつたからでもあらうが、打ち見た所、町の雅趣あるに對して、四圍の色調は青いといふよりも綠である。いかにも若々として、新鮮の氣は野に森に漲つてゐる。華やかな日光が青紗のやうに透ける青葉の蔭には、水の乙女、空の乙女が踊つてゐる、あのコローの繪にでもありさうな趣。我は曾て、始めて鎌倉に勝を探つた時、先づ其山色の、いかにも歴史と相呼應して蒼古の調を帶びてゐるのに魅せられた。其の土地が有してゐる內容と、之れを覆ひ包んだ色調との間に、自然の調和があるのを面白く思つた。然るに今スツラッフォード、オン、エヴンに來て見るに及んで、そこに一種の、意義ある對照を認める。鎌倉三代の歴史は、如何にドラマチックであつたにもせよ、畢竟歴史である。其の調は茂古老蒼を加ふるに從つて愈々妙を增す。スツラッフォードの內容は詩である、藝術である、シェークスピーアである。年時を忘れて常に清新に、常に快活にして、却つて回顧の情を深うするではないか。「歴史は老いよ、藝術は長しへに若くあれ。」

寺の門は、幾百年の菩提樹道の兩側に列を正し枝をわたして、青葉の天蓋を引く。左右に、楡の葉蔭ひろく塵も留めざる一面の墓地は、凡ていはゆるホーリー、ツリニチーの神領である。その楡の木隱れから、遙に尖塔の頂のみを示して、人をして想望の情に堪えざらしめた聖院は、今や、菩提樹の若葉香る穹道の奥に扉を見はして來た。我より先に、遙か離れて行く小さい人影は、黑い外套と空色の絹服と、男女二人の後姿天國の門を叩きにでも行く人かと思はれる。

入口には黑き法衣の僧がゐて、出入を取締り、入場料も取れば、案內記、繪葉書、紀

念印紙の類も賣る。之れも寺の維持費と思へば故障はあるまい。

さて建立の由來、建築、窓繪の說前はざつと聞いて、つか〳〵と香壇の前に進めば、此處である、欄を隔てゝ右より二つ目の床石の銘は、

善き友よ、耶蘇の願なり、止めよ、此處に納めたる塵を發くことを。幸ひあれ、此の石を庇ふものに、將た呪ひあれ、我が骨を移すものに。

三百年のあひだ斯くの如き銘を負うて靜に眠つてゐる大詩人の骨は、今後といふとも、彼れが著作の亡びざる限り、永劫に亘つて動かさるゝことはあるまい。思ふに敢て此の願ひを亡みせんと企つるものがあつたら、世の憎み禍ひは必ず其の頭上に集まり來たるであらう。墓の主が遺したる呪詛の祈りは、今や夫の古の豫言の如く事實となつて功力を現はし來たつたと言はずばなるまい。

右手には、之と並んで妻アンが墓、左には三ツ相續いて、娘スザンナ及び其の夫等一族の墓がある。

回顧すれば我が始めて學窓にシェークピーアを習讀して以來、殆ど十年、しば〳〵想像の間に出入してゐたスツラッフォード、オン、エヴンの地、別けても彼の銘を刻んだ詩人の墓を、今目のあたりに見て、我れは眞實我が身の此の境にあるかを疑ふの情に堪えなかつた。

けれども、斯やうにして墓前の欄に手をかけたまゝ、しばし茫然たる胸の底から湧いて來るものは、一種の喜悅光明の情であつた。伽藍の中は取りわけて空氣がひやびやとしてゐる。光線は色硝子に透けて明るさを減ずる。場所は人氣の少ない寺院の、而も十字架像の前である。それにも拘らず、此の時の我れは、千古の詩人が冷かに骨を横たへてゐる傍に立つて、一種の温さを感じた。嗚呼玆にこそシェークス ピーアの靈は安まれと思ふに、おのづから、肅然として容を正しうするの氣は生ずれど、されども哀傷の心寂寞凄愴の情は絕えて萠さぬ。むしろ愛慕の感、喜恍の感、光明の感が身邊を圍繞するやうに思はれた。由來英雄の追懷は如何なる莊嚴美麗の形に於いてす

るも、畢竟生時の燦爛と死後の變易荒廢との對照に外ならぬ。玉壘浮雲、無主の江山、何れか廢墟を傷み荒殘を哀しむの情でなかちう。所詮英雄を弔するの意は荒廢を弔するの意である。而して斯くの如きは亦實に現人生を弔するの意味ではないか。人生は到底其後へに變易を豫想し廢滅を豫想しなければ、深切の感味を發しない。ひとり我は今、詩人シェークスピーアを弔せんと欲して此の以外のものに逢着した。彼れの追懷は繁榮である、光明である。而して夫の藝術の追懷もまた玆に歸するであらう。滅び行くは人生の姿、之を、暫く天上不滅の光に照して示すものが藝術ではないか。さればいふ、「人生は常に荒廢也、藝術は常に繁榮也」と。

六

後年巴里にナポレオンの墓を訪うた時は、其の構造の如何にも壯麗を極めてゐるに拘らず、金粉榮華の底に、堪へられぬ程の淋しさ物悲しさを感じ、愴然として寺を辭したが、シェークスピーアの墓に詣でゝは、我れは覺えず笑みの眉を開き、和親の面を輝かして、周圍を見まはした。

ホーリー、ツリニチー、バストと言つて此の寺にある半身像は、世にあるシークスピーアの肖像中でも最も古いと信ぜられるものゝ一つである。是からそれを一見しやうと、振りかへるはづみに後から聲をかけるものがある。誰れかと見れば、曩に誕生室で會つた老紳士親子であつた。

「あすこにあるバストを見落しちやいけませんぞ。」

成程像はすぐ香壇の横、我等の左手の壁龕に安座してゐる。床から數尺の上に、黑い大理石を彫り窪め、同じ石のコリンス式圓柱で左右を裝飾した龕中に、半身をあらはしてゐる石灰石像が卽ちそれで、本來は赤の上衣に黑の袖無しガウンと、粉塗の跡あざやかであつたといふ、その服裝は人のよく知る通りである。左に紙、右に鵞ペンを持つた手は臺の上にさゝへられて像の下には夫の「停まれ行人、何とて御身然は急

いで行き過ぐるぞ」云々の文句を彫つた石が箝めてある。

「お父つさま、此の像をよーつく見つめてゐますとね、笑つて來ますよ。そら御覽なさい、ね。」

と眼は我れの方を見ながら、娘がいふと、

「あ、それは此の像についての有名な話ぢや。是れはもと墓作りのジョンソンといふ土地の石工が刻んだもので、一つは据えやうが心持高過ぎるからでもあらうが、あの通り顎は二重顎のやうで、顔が總體下から見上げた形になつてゐる。御覽なさい、日本の紳士、唇が少し開いて齒でも見えさうではありませんか。あれが此像に特殊の表情を與へて、愛くるしい小供のやうな所が見えるのぢやと言ひます。」

「いかにもさうのやうですね。そしてあの眼と眉とがまた……」

「さうですよ。わたしもさう思ひますの。何か斯う向ふに見詰めてゐるものがあるやうですわね。」

「さうです。何か普通の人には見えないものを、はつきりと見据えて寫し取らうとでもしてゐるやうではありませんか。おもしろいですね。」

「いや私の考は少し違ふ。あれはアブスツラクト、アイといつて、深く思想を一事に集中してゐる時の狀態ぢや。眼は明いて居ても何も見當をつけて見てはゐない表情ぢやと思ふ。私には寧ろ何か我々には聞こえぬ靈妙の音樂どもを、耳で一心に聞いてゐる時の眼と見えますな。」

「それはお父つさま、考へやうですけれども、若しあれが耳の方に氣を取られてゐる眼なら、今少し上を向くか下を向くかして欲しいと思ひますわ。」

「私もどうも其の方の說に贊成したいですね。あれをアブスツラクトの眼としてはちと意味があり過ぎるやうに思ひます。」

「さうかな。私にはどうもさうは思はれんが、併しこんなことは主觀的な所の多いものぢやから何とも言へん。」

と和して同ぜざる英國紳士のゆかしい氣質を見せた老人は、更に言葉をついで、

「それであなたは此の像に對して全體に何ういふイムプレッションを得ましたか。」

「さうですね、それは、ちやうど今の前私が此の墓石を見てつく〴〵と感じてゐた所と一致した一つの感じですが、言はゞ藝術は如何なるものをブライトにする、藝術の標徴はブライトネス、プロスペリチー、プレジユラブルネスといふやうなもので、シェークスピーアの此の像は、よく此の事實に結論を與へてゐるやうに思はれるのです、わたしのシェークスピーア觀及び藝術觀の一部が此の像によつて完結せられる、と云へば少し大層なやうですが、まあそんなものです。お孃さんのお考はどうです。」

意外の見識に驚いたといふ風で、我が方を見つめてゐた娘は、あわてゝ眼を外らすと共に、其の緣をさつと紅めて、

「わたし、あなたのお說にすつかり賛成ですわ。」

「ぢや多數決ぢや。しかたが無い。どうです是れから墓地を見やうではありませんか。」

紳士に導かれて戸外に出た。

七

川に沿ひ寺を圍んだ廣い墓地には、楡の大木が所々に蔭をなして、細工を凝らした花壇や、硝子箱に入れた造花の仰々しい新墓の脇を通りすぎれば、青苔に埋もれた古い墓、試に手で拂へば、木蔭の露がしとゞ滴れる。地は一面に掃き淸められて、塵一すぢも落ちてはゐない。時々さらゝの音を立てるのは、エヴン川を渡る微風に、楡の葉の摺れるのであらう。川向ふの牧場からは、稀れに牛の鳴く聲が聞こえる。墓地を一巡して川に臨んだ小高い土手の上に出れば、木の下に共同椅子が据えてある。三人は之れに腰をおろした。見渡す限り、エヴン川は、水嵩ゆたかに牧場の草の根を浸して、漣波の果て遠く、もとは一面の葦の繁みであつたといふ小島の跡に續く。別けて

ゆかりは此の川の白鳥である。ベン、ジョンソンがいはゆる「エヴンの美しき白鳥」こそは去つて繼ぐものも無けれど、まだ肌寒い川風に羽を搔く鳥の風情は、今も昔のまゝであらう。

「あすこにシェークスピーアが。」

といへば娘は崩れるやうに笑つて、

「ス井ートスワン?」

「此の白鳥はス井ートであるか、どうぢやらうか　わからんな。」

「わたし、向ふの牧場へ行つて見たいのですが……。」

「もう茶の時刻ぢやらう。一旦歸つて、茶でも呑んでからにしてはどうぢや。あなたも御一緒にお出でなされてはどうです。まだ御名前も存ぜなかつたが、お名が伺はれませうか。」

我れも名刺の交換を乞うて、宿所を聞くと奇緣か同じホテルの相客であつた。されば論もなく同道して四時といふに、ホテルの食堂で茶を共にした。紳士は愛蘭土の者で身分ある人であるが、妻を失つて、娘一人をたよりの身であるといふ。血の冷熱の激しいアイヤリッシュの所は少なく、却つて英蘭土の氣象を多く持つてゐる。

八

ホテルの客は二十人の上に出でゝ食堂は中々の賑ひである。我等は今一人亞米利加に育つて、獨逸に長くゐたといふ、五十左右の元氣な婦人を加へて、四人片隅のテーブルに席を占めた。

今日の話題は、自然のこと、あちらでもこちらでもシェクスピーアで持ち切つてゐる。亞米利加の婦人は盛んに獨逸が文藝の國であることを說いて、シェークスピーアは本國たる英吉利よりも却つて獨逸に多くの眞知己を有してゐると主張した。そして英國が此の大詩人を表彰することの尙足らざるを慨した。被方のテーブルで一際高くべ

ーコンといふ聲がすると、それを捉らへてこの饒舌博識な婦人は、さらにベーコン、シェークスピーア論に移る。

「おゝ馬鹿々々しい。先達つても或る書物を見ると、二人の名を一つにしてシェーコン、ベークスピーアなんて書いてゐました。そして言ひやうが面白いぢやありませんか。一つ此の際に折衷案を立てゝ名をベークスピーアと改めたら善からう、眞理はいつも中庸にあるから、ですとさ。人を馬鹿にしてゐるぢやありませんか。」

「ではあなたはシェークスピーアとベーコンとは全く別人といふお說なのですね。」

「勿論ですとも。まあ考へても御覽なさい。『學問の進步』を產み出した頭が、どうして『ハムレット』や『キング、リア』を產み出し得ませう。『學問の進步』と『ハムレット』と、どれ程違つてゐるかといふことが分れば、跡は議論をするまでもないぢやありませんか。ベーコンのやうな、あんな羅典狂、活字引、論理機械が、どうして〳〵、シェークスピリアン、ソンネッツの、唯の一句でも作れたら世界の不思議でせうよ。是ればつかしはわたしが……。」

と鼻息あらくテーブルの上から手を引くはづみに、飲みさしの茶をひつくりかへした。ミルク入りの灰色のものが白いテーブル掛を浸して、スカーツに流れかゝる。あわてゝ立ち上らうと椅子を後ろへ押せば、後ろの椅子とからみ合つて此所にも一騷ぎ、給仕人を呼ぶけたゝましい聲、あちらの方ではくす〳〵と笑ふ聲。我等は總立ちで、急いでハンカチーフを取り出し、婦人の前の洪水を防いでやつた。座が靜まると、日本のシェークスピーアは誰れであるかといふやうな話から、老紳士は愛蘭土の人が往々人種上の偏見に驅られて英蘭土と反目せんとする結果、シェークスピーアにまでも冷淡なのを批難した。

「さうですね、今英國でシェークスピーア反對の旗頭はお國のバーナード、ショー氏だといふことですね。」

「恥ですね、わたし、あの人は大嫌ひ。書いたものを讀んで見ましても何だか冷た

くて、皮肉で。」

「あれは佛蘭西の系統ですよ。佛蘭西ではあの通りヴォルテヤの昔から、今のサードゥに至るまでシェイクスピーア嫌ひが多いのですからね。なあに佛蘭西人なぞにシェクスピーアが分かるものですか。一體ケルト人種は……。」

といひかけて、婦人は氣が附いた風に、跡を引き込める。座の白けるのを恐れてか、娘は先づ立ち上り、老紳士も我もつづいて立つた。

九

夕暮前の一時間許りは、橋を渡つて、川向ふの牧場近郊などをそぞろあるきした。娘が、持つて來た菓子をしきりに白鳥に與へてゐるあひだ、老紳士は岸づたひに水下へ下つて行く。我れは立木の幹に倚つて眺め飽かぬ川の景色を見てゐたが、心は何時かまた空想に這入る。

此土地の風格の、何とはなく淸らかで、情ありげなのは、畢竟この川あるが爲めであらう。シェークスピーアと、エヴンとは、土地の命である。若しあの白鳥がシェークスピーアの靈であつて、それがエヴンに浮んでゐるとすれば、其の關係はいよ〳〵面白くなる。

など考へてゐる間に娘はそこらで一つまみの櫻草を摘んで來て、笑ひながら、「之れを君に捧ぐるのを名譽を許したまへ、」といつて我が胸の左の釦穴に挿んだ。

「何を考へて居らしつて？」

「今妙な事を考へました。あの白鳥がシェークスピーアの靈ではないかといふ……。」

「ほゝあなたも迷信家ですことね。」

「迷信といふ譯でもないのですが、今日午にも、あのシェークスピーアの家の窓を見てこんなことを考へた。夜遲くあの窓から明りが漏れてゐると、アン、ハサウェーが村から尋ねて來て、そつとシェークスピーアを呼び出して、この牧場の邊から舟でも出して、

夜中月の下に身の振方の相談をしたのではないかといふのです。」

と言つて不圖見ると、娘は赤面して俯いてゐる。是れはしまつた、アンが身の振方といふ裡には、私通の懐胎といふ疑が籠つてゐる。デリケート、センスの淑女紳士の前では言ひ及ぶまじき事柄であつたと思つたが追つつかぬ。話題を轉じやうとしてゐるうち、娘はポッケットから美しい袖珍本を取り出し、

「わたし、シェークスピーアのソンネッツを持つて來ました。二人で讀んで見やうぢやありませんか。さあ入らっしやい、此所がよござんす。」

みづから草を敷いて席を造つた。歌の中からは、所々會心の章を引き出して、自分も誦し、我れにも讀めよと勸める。我れに朗讀を迫つて抑揚の正しからぬ箇所をば一々直して呉れる。

はつきりしなかつた夕日が、ぱつと一時に榮えて沈みそめると、川づらも遠くから靄の幕を引いて來る。と思ふ途端に流れに沿うて一艘の端艇が下つた來た。漕いで居るは二十歳ばかりの若者、情人でもあらうか、一人の若い女を載せてゐる。

我れは之れを見ると、何となく心とどろいて立ち上つた。シェークスピーアとアン、ハサウェーとが話の繼ぎめを、また思ひ合はせたのである。すると娘も同じ電氣にでも感じたかのやうに、まじろいて身を起した。端艇は過ぎて行く、そして遠靄の中に沒してしまふ、岸にはあゝとの嘆息のみが取り殘された。

しばらくして、娘は、

「シェークスピーアが此の土地に居られなくなつたのは、サー、トーマス、ルーシーの蓄つてる鹿を盜んだからだと言ひますが、わたしは何だかそれにはシェークスピーアに言ひ譯がありさうに思はれます。」

「さあそれはごうとも言へないやうですね。」

といふとき、老紳士は後の畠道から歸つて來て、我等の傍から口を挿んだ。

「私の讀んだ範圍での傳記によると、よし盜んだにしても、それは半分は習慣、半

分は徒戯くらゐのものでは無かつたか。『盗んだ』といふ語が餘り強いから、彼れを呪ふやうに聞こえるのぢやらう。そんな例は今でも田舍にはよくある事ぢや。それで私はシェークスピーアの此事件に關しては、一種の哲學を立てゝゐますよ。」

「おもしろいですね。どんな哲學でせう。」

「倫理上では善と惡との中間に無善惡の事柄があるかどうかといふことは既に人も論じてゐる所ぢやらうが、私は其の外に、半善惡といふやうなものがあると思ひます。シェークスピーアの場合が丁度それぢや。盗んだは盗んだがそれは普通の盗賊が夜陰に他人の家へ忍び入るといふたぐひとは、心持が違ひはせんか。土地の若い者等がよく自分の庭へ紛れ込んで來た鷄を締めて喰ふ。又は通りがけに葡萄園の葡萄の房を摘んで行く、是等は田舍の習はしによくある事ぢや。行る者は善い事とは思はぬが、さして惡い事とも思はぬ。徒戯をして叱られるくらゐの心持ちで行つて居るのです。シェークスピーアの鹿の事も、事實なら恐らくはこんなものぢやつたらう。それをルーシーが意地わるく咎め立てをしたのでせう。あなたはどう思ひます。お前もどう思ふ。」

我等はちよつと答へかねたが、娘は滿足の體に見えた。

オックスフォードのインで見た時、直接に彼れに質して見れば好かつたと不圖考へて、思直せば、何の事、それは平生我が空想から造り上げてゐる夢に過ぎなかつたのである。

ホテルへ歸る途々も、娘は、かの舟の事が心にかゝると見えて、月の冴えた夜、自分等も、エヴン川に露蹠ちるまで葦を分けて、シェークスピーアの歌の本でも讀んで興をふかして見たいと繰り返して言つた。けれども今は生憎月が無い。明日は早や三人ともに此の地を去らねばならぬ。我れも月のエヴンの舟遊びは期してゐたのであるが、此の度は齟齬して了つた。明月の一夜を、露が骨身に冷え徹るまで此の流れに上下して、或時は牧場の岸に舟を寄せ、或時は寺に沿うて木蔭にしばし纜をかける。耳

を澄ませば彼方の牧場には銀絃を彈くやうな蟲の聲、寺を周つてさゝやくものは、楡や菩提樹の葉に戯れる風。あゝ此の時、願はくは舟に樂手の乙女あれかし。樂器はヴイオリン、曲は戀、泣かずには已みがたい興趣であらう。

而して東海の一後進が捧ぐる愛慕の歌に、詩人の夢も涼しめられやう。

＋

オックスフォードのアイシス川の月も美しい、來て見られよ、といへば、さらば、バーミンガムよりロンドンへの途すがら、必ず立ち寄ります。彼處で月の思ひは果たさせ給へと、言葉をつがへて、夕食の後、急に親子はバーミンガムへと出立した。我れも翌日は見殘したものを見て、此の靈地を辭した。

＊　＊　＊　＊　＊

越えて數日、一封の書狀によれば、彼の老紳士と娘とは、遂にオックスフォードへは立ち寄る機會がなくなつた、殘念との事である。そしてスツラッフォード、オン、エヴンの一日の紀念は永く消えざるべしと書いて、末に當日讀んだソンネッツの一節が抄してある。

When to the sessions of sweet silent thought
I summon up remembrance of things past,
I sigh the lack of many a thing I sought,
And with old woes new wail my dear time's waste:
……
But if the while I think on thee, dear friend,
All losses are restored and sorrows end.

歌はおもしろいが、思ひ出は淋しい。噫「我れは記憶か、藝術は悅びか。」

（明治三十九年四月）

沙翁の墓に詣づるの記

ルイ王家の夢の跡

一

ブールボン王家の榮華は三代にして亡びぬ。千七百九十三年、ルイ十六世がギロチンの露と消ゆるや、流れ淀みし斷頭臺下の血は、凝りて王者の恨と朽ちず。されど、傳へ聞くだに魂銷ゆと覺ゆるは、十四世王が豪奢のさまなり。藤門平家の例は物の數かは。佛蘭西一國の富貴を身一つに荷ひて、全盛は歐洲二千年の歴史に幷ぶものも無し。七十二年のあひだ人間の權勢悉く己れに歸して、「吾れは是れ國家」、藝術は以て己れを莊嚴すべく、劍戟は以て己れを誇耀すべし、ヴェルサイユの金碧裡に恒住の春ありて、羅綾の風、粉黛の香ひ、燕樂日夜を分かたず。ルイ大王が黄金の代はまこと人生の夢に似て、而してのち二百年、明けがたの薄あかりする我等が世にも、輪廓あざやかに影を遺すは夫の二百餘房の歡樂殿なり。されば阿房宮の昔は知らず、主亡き榮華そのまゝの跡を訪はんとするものは、佛蘭西ヴェルサイユの宮殿に往け。

二

ルイ家三代の文明は、煥發してヴェルサイユの宮殿となれり。宮殿の全部は、やがて一黨の藝術にして、富麗豪華の態、眞に世界の何ものも以て比するに足らず。十七八世紀の歐洲の文華は、伊蘭西に精粹を萃めて、此の一宮殿に結晶せりと見るべし。ポツダムなる無憂宮の規模は、獨逸國民が示して世界の誇りとするところなれども、ヴェルサイユの原本に比すれば、氣品に於いて、はた技巧に於いて、同日の談にあらず。

ヴェルサイユの宮殿がブールボン家三代百餘年の間に於いて多少の變易增減を經たるは言ふまでもなし。ルイ十四世に驕妃マントノンあり。麗はしきこと雪の如く、冷や

かなること氷の如く、舊教の狹隘なる情味に矯飾虛榮の色を塗りて、こゝに一代の風尙を作り出だしぬ。ルイ十四世期の文明は、此の意味に於いて一婦人マントノンの導くところ、彼の女もまた大いならずや。ヴェルサイユの藝術に其の風あるは、固より異しむに足らざるなり。

ルイ十五世の內廷には寵妃ポムパドゥア及びデュバリーあり。ポムパドゥアは絕世の美人と稱す。王官祿を以て之れを廷臣の妻たる身分より購ひ得て妾となす。宮殿は是れよりたゞ彼の女が紅嬌翠艶の化粧の間と化し了んぬ。

さはれ是等は尙ほ言ふに足らず。ルイ家の一門悉く革命の浪に漂ひて、引く潮のあとに怪巖の如く聳へ立ちしは、ナポレオン一世の帝國なり。此に至りて、佛蘭西の藝術は明かに一轉化しぬ。ブールボンの文華衰へてボナパルトの文華起こる、ヴェルサイユの宮殿はまた此の對照をも示したり。

去年の夏、われヴェルサイユに過りて、其の建築裝飾庭園にルイ家の藝術を見る。所謂ロココ（Rococo）の一體是れなり。ルイ十四世の始めて此の宮殿を經營するや、一代の風尙ぼなほ大にクラシカルなりき。其の庭園の狀はよく此の理を示せり。然れども其の建築內に裝飾を加ふるに及びて旣に大に後のロココの風を成せり。或は之れをバロック（Barock）式と見る。畢竟やゝ原始的なるロココに外ならず。而してのち、マントノンの世はポムパドアの世となりて、玆に所謂ロココは其の發展の頂上に達せり。ロココは實にルイ十四世に發し十五世に滿ちて、十六世に衰へたりといふべし。是れ其のルイ王家を代表するものたる所以。而して其のマダム、マントノンの爲に建てたりと傳へらるゝグラン、ツリアノン宮に入るに及んで、其處にナポレオンの遺物と傳へらるゝ家具のかずゞを見たり。當時おもへらく、何ぞ其の風致のロココと異なることしかく甚しきやと。我れはこゝに所謂アムピール（Empire）體と稱する一彙の藝術に接したるなり。ナポレオンの第一帝國成るや、建國の基礎もと武にあるが故に、音樂に軍樂の發達あり、建築に武器の裝飾あり。されど其の最も顯著なる時尙は、發し

て雄健の氣、英邁の態を帶びたる裝飾美術となりぬ、雄健の氣、英邁の態、之れを統ぶるものは力なり。力の發現、是れ實にナポレオン帝國の精神にして帝國式と稱する藝術の生命また玆にあり。帝國式藝術の標現は偉大なる力が暢達して無碍不撓なるの姿なり。

ロココに粉脂の氣、柔婉の態あらば、アムピールには、帝王、權を行ふの概あらん。我れは二つのものゝ對照に、言ひがたき味ひあるをおぼえたり。

三

ヴェルサイユの地は巴里を去ること汽車にて略々一時間、ルイ王朝三代百餘年の帝都にして人口五萬を超ゆ。定規もて區劃したるが如き長方形の市街を、横に矢の根形に貫き來たる三條の大路は、ブラース、ダルメーの廣場に相會して、尖頭はすなはち宮殿の入口たり。宮殿の地域は凸字形をなして、矢の尖端は其の底邊の中央に接す。街衢の全觀、たとへば水干の袖を張りて烏帽子を載けるものゝ如し。烏帽子は宮殿なり。束帶の紐の垂れたるが如きは三條の王道なり。而して宮殿の背後はすなはち一面の大庭園、其の規模の大にして其の按排の精微なるは、眞に人の目を驚かす。後の自然式築庭法に對して、所謂古典式庭園の模範たり。

左翼の門を潛らんとして先づ足を返して此の廣大なる一廓の建物を展望す。中夏の空青く澄みて白雲の僅に其の一隅に漂ふところ、麗はしくも聳き出だせる凸凹の古典的輪廓は、左右に延ぶること蜿々千餘尺、優に五萬の廷臣を容れて、居然としてまことに人間の天に驕る姿とも見るべし。されど其の高さの二層三層に止まるに比して横に房を連ね閣を並ぶるの限りなきや、全局の眼界おのづから天より壓せられて地に這ふものゝ形を成す。頭上に何物かの重きを戴くが如きは、此の建築の一瞥が與ふる感情なり。即ち些の重濁、沈鬱の氣は之れより生ず。中に不斷の歡樂を藏するの宮殿が、外形に於いて却つて此の對照を有するは奇といふべし。思ふに是れ、ルイ家全盛のは

じめ、マダム、マントノンが冷靜の風格をこゝに印するものか。

同じき情味は更に後庭の眺めに於いて明に認めらる。試みに宮殿の西の階に立つて眼を放てば、大いなるかな人の智巧や。翠嵐滴る樹林の間には、中央に一線の大道果つるところを知らず。是れより左右に或は直く、或は斜に、枝線縱横に發して、而も均整方圓は必ず規矩によらずといふことなし。芝生あれば彎の形に小路を切り、花壇あれば色を組みて鍵子の模樣となす。水あれば、小なるは之れを花瓣に象り、大なるは之れを十字架に象る。紋所に似たるは角切、武田菱、九曜星、幾何圖に似たるは大小等邊不等邊の三角形、辻は必ず圓形をなして、路の八方より會するもの車の輻の如し、さしも廣濶なる庭園は、ただ是れ花木水石を使役して織り出だせる一面の絨氈模樣なり。

されば此の庭園には、智巧ありて自然なし、それ智巧は常に劃一を意味し、均整を意味し、規律を意味して而して此の一面に限らるゝものは人間なり。自然はすなはち劃一の裡に變化多態を藏し、均整規律の上に放肆の趣自在の形を有す。我等が人間の事に倦みて自然に之くとき、放焉として救はるゝが如く感ずるものは、實に此の變態自肆の新生命に觸るゝが故にあらずや。人爲の煩に堪えずして自然に還るものには、常に此の意義あり。

今ヴェルサイユの庭園は此の變態自肆の一面を缺く、滿目すべて均整なり、劃一なり、之れが調子を定むるものは直線と鋭角となり。されば、明澄徹底の趣は是れあらんも、紆餘たり雜然たり、朦朧たるの情致は此所に求むべからず。冷かなり、重々し。端嚴はあれども煙波の情に乏し、前人が之れを呼んで嚴刻なる古典式といへるもの、亦た此の義に外ならず。

而して此の端嚴明徹の底には、實に一味の哀傷潛む。夫れ端嚴明徹は我等が知識を窮むるの形なり。知識の到達せんとする形式は、如何なる場合に於ても端然井然として一明徹底なることなり。然れども我等一たび知識の之くところを窮めて洞然たるの後、靜に回顧反覆して其の達し得たる理略に習熟するときは、異しむべし、他が底心

より更に微かに一派の哀感を發し來たることを。言ひがたく微妙なる荒凉寂寞の感は、一見滿足ありて虧隙なきが如き知識の奥より閃き出づるなり。名づくべくんば是れ知識の哀傷か。我等は此所に至りて、天地の最深所に横はる矛盾の大塊に觸着せるなり。我等は知識のあらゆるものを征服せんことをねがふ。而も一たび征服し得たりと信ずるものは、之れに住するとき却つて寂寞の感に堪えず、哀傷は洞穴より吹き來たる風の如く我等を襲ふ。ヴェルサイユ宮の庭園は一たび見て端麗なり、二たび見て寂寥なり、三たび見て哀傷を惹く。

想ふ、其のいにしへ、宮中の夜宴曉に徹して、花の如く蝶の如き滿延の士女、やうやく翠帳のあなたに疲れ去る頃は、初夏の空に殘月淡く、星薄く、庭の芝生に置く露の繁さ。此のとき窓に憑つて望むものは嬌瞼三分の眠を帶びて、明けがたの風に鬢の亂れを吹かす楊家の子、刀もて劃れるが如き後庭の大路の末、霞にくろむあたりを眺め入りては、歡樂足んぬ、そゞろに新愁の我れを誘ふに堪えざりしなるべし。

四

ヴェルサユイ宮殿の外觀は、以上の說に盡く。傍門より入りて、室を巡ること階上階下すべて二百餘房、金粉堆裡を過ぎりては花を出でし蜂蝶の、身邊悉く黃に染むかと疑はれ、滿壁の畫圖、每扉の明鏡に包まれては、顧望たゞ七彩の虹、往返悉く日月の影、人をして路迷ひ眼眩して出づるところを知らざらしむ、斯くの如きは、謂ふ所のロココ式建築の意を示せるものなり。我れは更に精しく此の絕富麗の藝術を敍するの前少しく之れが說理を加ふべし。

帝國博物館の編述に係る日本美術史は、我が日光廟を以て彼の土のロココ建築に比せりと記憶す。是れ固より何人も想ひ及ぶべき類似なるべく、一は廟宇、一は宮殿たるの差こそあれ、諸多の連想に於いて、まことに日光は我がヴェルサイユたるに耻ぢずといふべし。但し此の場合に於ける建築式上の類似は、單に其が有する濃味の彼此相

通ずといふに止まる。豐富を示し、華奢を示し、靡麗繁縟を示すに於いては兩者一なり。

然れども、ロココが生命とする裝飾の樣式は此の外にあり。何ぞや、曰はく放肆なる曲線の疊用是れなり、之れを卷曲線の美術と呼ばん。

更に適切に之れを言へば渦紋、螺線卷葉蔓草の濫用なり。形は悉く彎曲して、線は悉く婉柔自在、舒びて端に至れば、卷縮して必ず多少の螺狀をなす。若し我が國に類を求むれば、渦、浪、雲、唐草の組織之れに外ならず。而して日光廟は其の堆金堆朱の臺に必ずしも唐草模樣の輪廓を用ひず。是れ其の樣式の異なる所以なり。

今ロココの由來を考ふるに、其の名は佛語のロカイユ（Rocailel）より來たりて、螺狀裝飾を意味し今は世に飽かれて、殆んど陳腐俗惡といふ語と同義に見らる。其の樣式に至りては、之より先き十七世紀にバロック式あり、端をミケランゼロが一側の技巧に發して末流の弊は輕快活動の線を用ふること漸く度に過ぎ、典雅平靜なる古建築の威容次第に崩れ行きぬ。ロココは實に此の脈を引けるもの、されば或は之れを以て直ちに佛蘭西化したるバロックに外ならずとするなり。

五

凡そ建築裝飾の如き美術に於いては、色彩の外、美の材料となるものは專ら線にあり、而して線は如何なる形に於いても、曲直の二つを離れず。

金を楹（はしら）に泥し、朱を寢（たるき）に塗り、璧を璫（たるきじり）に埋むるが如きは、色彩によつて美を成さんとするものなり。塔の圓きもの、尖れるもの、壁は横に劃り、階は斜に渡す。此等のものが畫き出だす輪廓の美はすなはち縱横曲直の線の配合なり。直線は常に沈靜を意味し、威嚴を意味し、清涼を意味して、色ならば青を以て譬ふべき性を有す。曲線が與ふる感銘は活動なり、輕快なり、溫潤なり、紅色を以て之れに比すべし。

建築が最も多く有する美は直線的なること言ふまでも無し。建築の威容は多く之れより生ず。されば、バロック式よりロココ式に及んで、裝飾に曲線美の應用せらるゝこ

と其の極度に達するや、柱に、桁に、長押に、累々として堆きものは蔓草の形なり、卷葉の形なり、螺背の形なり、渦紋の形なり。建築本自の柱や長押やの力ある直線は悉く之れが爲めに蔽はれて、輕浮滑脫の曲線のみ表面に蔓り來たりぬ。其の標象するところ察すべきにあらずや。

今渦紋狀の卷曲線が殊さらに斯く寵用せらるゝに至りし起原を考ふるに、夫のカーツーシュ（Cartouche）といふものと通ずる所あるに似たり。而してヴォリュート（Volute）といひスクロール（Scroll）といふもの、また皆カーツーシュと相通ず。蓋しカーツーシュは、上古埃及人が用ひし羊皮紙類の貼札のさまゞに刻みし緣のあたりおのづから卷縮して、橫斷面より之れを見るとき、一種の卷曲線をなすに基づくといふ、されば夫の建築史上にアイオニック式と稱する圓柱の柱頭には、明かに此の起原を想像し得るの裝飾を用ひしもの多し。譬へば一紙を展べて其の兩端を援く下方に卷き放ちて之れを柱頭に冠したるが如きもの是れなり。

然るに下つてコリンス式圓柱の行はるゝに及べば柱頭のカーツーシュは中央より折れて二線と成り、恰も尖端を外に卷きたる對生葉の如く、はた百合の花瓣を抱き合せたるが如きものと展開し來たれり。是れをアイオニック期に於いて單に直橫線の兩端卷縮せるに止まりしと比すれば、媚態幾ばくを加へたるかは、言はずして知られん。後世ロココ式裝飾の中に濫用せられし卷曲圖線は、此に至りて形を成せるなり。啻にロココのみならず、あらゆる樣式の曲線裝飾に於いて、最も寵用せられしもの、此の卷曲線の原理に如くはなかるべし。

六

また等しく卷曲線の原理といふも、或は對生葉に似たりといひ、或は百合の花瓣に似たりといひ、或は蔓草の手に似たりといふ。之れを夫の水の渦卷くに比べて渦紋といひ、螺の背に比べて螺線といふに對すれば、其のあひだ截然として意義の變遷ある

を認むべし。後者は尙ほ多く線條其のものに執す、生きたる自然の形似に近づけるの度甚だ微少なり。『意匠の理論及實技』の著者英のジャクソン(F. Jackson)氏は裝飾美術の原素を分かちて幾何學的、建築的、工業的、植物的、動物的、人間的とせり。

若し此の分類に從はば卷曲線は其の初め專ら幾何學的若しくは工業的より起こり、植物的形似に達して、其の繁盛を極むるものといふを得ん。蓋し幾何學的とは、單に線條の組み合はせに美を求むるの謂なり。工業的とは諸器具類の形似に意匠を藉るの謂なり。植物的とは植物の枝葉花莖に圖案を托するの謂なり。之れを水の渦卷くに譬へて渦紋と呼び、之れを螺の拗れたるに譬へて螺線と呼ぶのたぐひは、其の比喩的稱呼が自然物の形似を示すにも拘らず、必らずしも實の渦實の螺を聯想せしむるが爲に美なるにはあらず、意匠の源は單に其の動いて窮まらざるが如き曲線の一種特殊の進行に存せり。是れ其の幾何學的なる所以。ただ之れを貼札の卷縮せるものと見るのカーツーシュに於いて、僅かに器用工業の上に美の一源を發せしめんとするの意あるを見る。何とならば卷縮せる貼札は一の器具にして此の形を聯想するとき、そこに單なる線條以外の興味を發し得べければなり。また我が邦に雲の卷舒を模したる雲文といふものあり、浪の頭に擬したる返浪といふものあり。是等は夫の渦紋、螺線に比して、一段多く自然の形似に近づけるものなれども、なほ植物形の卷曲線よりも多く幾何學的か、然らずんば逸して模樣の外に出で繪畫の域に入らんとするものに似たり。以上の理によりて我は卷曲線裝飾をまづジャックソン氏のいはゆる幾何學的乃至工業的境域にありしものと見んとす。

之れに植物的標示の加はりしは何の時代なるか、今得て明にすべからずといへども、其の決して新らしきことにあらざるべきは、早くすでに上古のコリンス式圓柱、乃至溯つてはアイオニック式圓柱の或るものにすら之れが應用を見るに徵して察せらる。さればこの今日にありては、植物的原理もまた始より此の種の裝飾の基礎の一となれりと見るを可とすべし。啻に一基礎たるのみならず、今は之れを以て幾何學的、工業的原理

を壓し去りたるものと見るも不當ならざるに至れり。我が邦に唐草模樣の稱あり、最も此の意を標するに適せるを覺ゆ。

さらば斯くの如く幾何學性の卷曲線裝飾が其の内容を展開して植物性の卷曲線裝飾となりしには如何の意義ありや。普通に裝飾圖案の要素を分かつときは、上の幾何學的と呼べる無意味無標示の圖紋と、意味あり標示ある自然物の模寫より成れる模樣との二とするを例とす。之れを我が邦の紙門（ふすま）の模樣に徵せんに、其の方圓さまゞの紋樣が或は井桁に、或は巴に、單に紋樣として描かれたるは幾何學的なり。進んで線を薄に象り、圖を姫小松に作り、雀を散らし、鳩を對するが如きは模寫的なり。卷曲線の植物性を帶び來たれるは、此の模寫的裝飾の部に入れるに外ならず。而して模寫的圖紋の最も重要なる特色は、其が自然の有機物に象る所ある點に存す。有機物はやがて生命あるものなり。生命！實に此の一義を加ふるにより圖紋美術は別箇の新彩を發し來たるにあらずや。

我が見るところを以てすれば、植物、動物、人間の三界にわたりて、有機物中最も形式の勝てるを以て直ちに圖紋模樣等の形式美術と調和し得るもの、換言すれば生命はありながらも、生命が未だ甚だしく其の物體の線形、色彩等を壓するに至らずして、色彩や線形やの外觀が直ちに生命の標示たるもの植物に如くは無かるべし。動物以上にありては其の名の標する如く、動といふ一現象が中心意義として表はれ來たり、他の諸形式をば注意の燒點より押しのくるの感あり。言ひ更ふれば、動物に於いては、單に其が色を見、線の輪廓を見たるのみにては、直ちに生命と聯想するを得ず。之れに動くといふ一要素をたしかめ得て、始めて滿足するなり。よし極めて微妙なる線形、色彩の特徵によりて、其の生命の如何を見得る場合はありとせんも此の如きは以て粗大なる圖紋美術の模し得るところに非ず。强いて之れを模せんとすれば、走つて繪畫の領に入る。此等の困難以外に立つものは植物なり、我等は、草木花芹に動を豫期せず、ただ其の延びたる枝葉幹根の形式乃至其の色によりて、彼等が有する生々の氣に接す、

是れ其の形を模して生命を聯想せしめ易き所以なり。且つや植物の形似に於ける曲直線の表象は、比較的に簡易單純なり。例へば種々なる葉の周圍は種々なる曲線の配合にして而して其の曲線はたとひ多少の變形を受くることありとも、必ずしも以て其の草木が有する生命の表象を失ふには至らず。之れに反して夫の人體の面を劃れる曲線の如きは、一分一厘の微といへども、之を變ずることによりて其の體の生命を疑はしむるほどに鋭敏なる表象を有す。是れより推せば、いちぢるしく線形の變形を要する圖紋美術には、植物の形似こそ最も攝取し易き材料にして、動物の形似は之れを圖紋化するの頗る困難なるを見る。

七

總じて圖紋美術の原理は美學上稱するところの形式美の原理なること言ふまでもなし。而して形式美の原理は之れを一括して變化の統一（Unity in Variety）といふ一語に簡示するを得べし。或は線を用ひ或は色を用ひ、或は形を用ひて種々の圖樣を描くものあらば、其の種々の線種々の形はやがて變化なり。すでに二個以上のものありて、加ふるに此等は地位形態一ならず、變化にあらずして何ぞ。然れども此等多態變化の形象は、決して無制限に雜多なるべからず、必ず如何なる邊に於いてか劃一せられ統一せらるべからず。部分は雜多なり、されど全體にわたりて一定の規律あり、是れを變化の統一といふ。圖紋が美術の性を帶び來たるは此の理に合すればなり。

然れども斯くの如き原理の下にある圖紋は、他の姉妹美術と同じく、おのづから二つの相反せる方向に馳せんとす。一は其の原理の半面たる變化に重きを置くものなり。變化を先にするものは、自由を喜び、不規律を喜び、自然を喜ぶ。自然の物象は凡て必ずしも赤裸々の統一性を表せず、一見等く不規律なるが如く見ゆるところに其の妙あり。是れ、自然物を模寫すれば、其の形圖は多く自から變化勝ちて統一性に乏しき所以、前にいはゆる模寫的圖紋は、來たつて玆に美を求めんとするに至る。日本の裝

飾美術に此の傾向の著しきは何人も容易に想ひ到るところなるべく、花草を描き鳥魚を描くも、すべて之れを原形の自由なるに象りて、ただ僅に圖紋美術の必要性たる統一の意を點す。されば日本の模樣圖は、模樣化したる花鳥にあらずして、花鳥化したる模樣といふを適當となすの觀あり。西人にして此の理を考へたるものゝ一例は、夫の『生理的美學』を著して近世の美學界に一紀元を作れる英のグラント、アレン氏が千八百七十九年の雜誌『マインド』に寄せたる文中に見るを得べし。其の要に曰はく、均整(統一といふも同理)といふことの快味は智識の滿足に萠す、理解を助くといふこと是れなり。又斯くして此れを喜ぶの情は遺傳的に集積して一種の愛着の情となり、此の情の滿足みづからも快味の一源となる。また斯くの如きものを產する人の熟練を嘆稱するの情も同一理に歸すべし。之れを總括して均整統一の快味といふ。然れども均整の快味に慣るゝ時は厭きて一種の反動を生ず、規律を効稱として不規律を喜ぶの情是れなり。昔者希臘人は早くすでに模寫美術、裝飾美術の區別に於いて、此の反動を模寫美術の上に示したり。更に極端にまで此の意を示したるものは日本の美術にして、日本人の自然を寫すや、先づ其の不規律の方面に筆を着け、進んでは裝飾美術にすら此の方法を用ひたりと。變化の一面を過分に愛するの趣味が、果たして統一を過重する趣味の反動として起れるものなりや否やに就いては、尙ほ大に論あるべしといへども、日本の裝飾美術が西洋のそれに比し、一見別樣の觀あるは實にアレンの言ふが如き事實に基づくなり。形式美の原理中、統一の方面よりもむしろ變化の方面を顯著にして、裝飾美術より模寫美術に之くの中途にあるが如きもの、我が模樣類の特色たるは爭ふべからず。之れに反して、統一を先とするの圖紋は、よし自然物の模寫に其の形を發することあるも、而も統一といふ約束のために多大の制縛を蒙りて、自然物が有する自由放奔の態を失ひ、固滯して生動の致なきに至る。余りに規律あり、余りに整然たるなり。夫の、始めより全く幾何學的なる圖紋類、たとへば龜甲形といひ、綸子形といひ、萬字といひ、雷文といふ如きは、辯ずるまでもなし。形を植物に取りたる

ものにすら、此の傾向あるもの少なからず。十六の菊は菊の花に則り、五三の桐は桐の葉と花とに則りといへども、其の模樣化して均整統一を重んずるの結果は、殆ど模寫の原意を沒して、幾何學的圖樣と成り了りたり。其の他斯くの如く全然有機的本性を沒却するをも厭はず、單に模樣圖案を自然物中より探り出ださんとするに於いては、進んで之れを動物の形に求むるも容易なるべし。蓋し動物の形は概して均整的・規律的なり。植物に於いては我等は其の不規律的なる點に自然の生命を認むれども、動物にありては、却つて規律的なるを自然と見る。若し樹木にして左右全く均等に枝葉を發したるものあらば、人は之れを不自然にして造り物の如しと感ずべけれど、魚鳥の形にありては、左右略ほ均等ならざれば不自然と呼ばれん。色線等の幾何學的形似よりいふときは、植物界の支配原理は變化にして、動物界の支配原理は統一なるを見るべし。

八

然らば統一的なる動物の形似は、同じく統一を生命とする模樣圖紋の材案として最も妙なるべきの理なれども事實は之れに反すべし。蓋し圖紋が幾何學的立脚地より離れて模寫的立脚地に接せんとするの動機は、アレンの所謂單調幼稚なる均整に厭きて、之れに不規律自然の趣を加へんとするにあればなり。卽ち統一を生命とするものが、之れに變化を加へんとするなり、模樣が繪畫の姿態を着けんとするなり。從つて單に形似よりいふときは、動物よりも寧ろ此の點に自由なる植物を取るを便とすべし。動物の形は之れを淺く寫すときは均整統一の意には調和し易きも、自然の生趣を失ひて、殊さらに之れを借り用ふるの本意に違ふを如何にせん。また之れを寫して深く其の生命に觸れんとすれば、已に高遠に過ぎて模樣圖紋等の形式美に止まるに堪えず、逸走して寫生本意の繪畫に投ぜんとす、模樣美術の約束を破るなり。要するに模樣と繪畫と、若しくは形式美と內容美との混和に最も恰當なるものは、植物程度の自然物なるに似たり。

模樣が、繪畫の分子を混和して、統一裡の變化を自由にせんとするの意は、また靜的趣味に動的分子を加味せんとするにあり。統一といふ現象に對しては、人心は常に靜止に近き態度を持す。凡て領會し、徹底し、結了せる形は統一なり。我等の意識作用が一たび、斯くの如き域に達して、之れを反覆するときは、慣れ滑りて漸く其活動力の消費を減じ、玆に靜止の狀に近づき行くは何人も經驗する所の事實なるべし。此の際之れを搖り興こして、新たなる活動に導かんとせば、其の結了し徹底するまでの過程に曲折を加へて、意識をして容易く駛走せしめざるに如くはなし。變化多態にして、各部の經過にも多分の活動力を要するが如くならしむるを妙とするなり。變化を豐富にし、自由にするの義これに外ならず。動の理また玆にあり。

而して此の如き變化と統一と、動と靜との美學上の原理を、最も簡單に標出するものは二個の線なり、所謂曲線と直線と是れ。

直線は統一を意味し靜的を意味す、蓋し線のうち最も單一にして力を要せざる進行の形を標せるものは直線にして、從つて其の印象は冷靜、明徹、威嚴といふが如きものならざるを得ざればなり。曲線は之れと異なりて、すでに二個以上の力の協同を意味し、直線の靜的なるに比して遙に動的なり。我等の是れに對するも、直線のひたすらに無碍なるものを追ふとき、突として彎曲したる線に移ることあれば、玆に一種の刺戟を感じて、將さに靜止に入らんとせし注意力が、遽然として活動し來たるを覺ゆべし。之れに反して、若し曲線より直線に移るときは、其の結果また相反す。要するに曲線には常に努力の意識を伴ひ、直線には休止の意識を伴ふ、一は動的にして他は靜的なる所以なり。

而して此の如き意義ある曲線を比較的自由に表はすものは植物の形似にして、植物の形似を、或る度まで生動の原意と共に傳へんとする圖紋は、實に唐草模樣の類に外ならず。唐草といふ稱呼については、古來絡み草のミの字の省かれたる名なりといふ說あり、

此の說に從へば、から草とは蔓草といふ義に外らうず、然れども他方より觀るときは、夫の唐紙唐繪等と同じく、支那より渡來したる珍しき草模樣といふ義ならずやとも想像せらる。稱呼の起原はしばらく何れにありとするも、此の種の裝飾模樣が我が國にては如何なる時代に如何にして現はれたるか。同一原理に基づける類似模樣にて必らずしも草ならざるもの、例へば前來しば〳〵いへる渦紋、螺線乃至卷雲の形等の何れが先なるか。古き建築物乃至經卷類の金具、梵鐘の緣飾等に彫られたる唐草、蕨手、渦まきの類が古きか、將た狩衣地、錦、緞子等の織物に見えたる雲菱、龍膽、唐草、蔓牡丹などいふものが古きか。此等は全然支那より輸入せるものか將た我が國自發のものか、そも〳〵兩源相合したるものか。若し其の起原を支那にありとすれば、之れと西洋との比較、關係如何。すべて此等は趣味深き別箇の研究題案たり。

九

而して如上諸圖紋の根本原理は卷曲線といふ事なり。夕映の空にさま〳〵なる雲の卷舒を見、若しくは河中に水の渦まき海邊に浪の逆まくを見て、こゝに卷曲線圖の落想を得るが如きは、稍々稀なる場合なるべしといへども、紙片、葉端、花瓣等の卷縮せるを見て、卷曲線圖の工風を案出するが如きは、むしろ頗る自然の順序ならんか。さらに進みて、蔓草の一莖生じては卷彎し一莖伸びては卷彎し行くさまに想を托するに及べば、卷曲線の原理は十分の發展をなせるものといふべし。

さらば、卷曲線の原理とは何ぞ。古來線の美に論及したるものゝうち、曲線美について最も重要の說をなしたる者は、『美の分解』の著者英のホガース（W. Hogarth）なるべし。彼れは、形式美の原理たる變化の統一を以て、美一切の原理とし、之れを一種の曲線に代表せしめて、以て就中裝飾美術について巨細の論をなしたり。之れをホガースが美の線の說といふ。要は波線若しくは蛇線を描いて、其の二個以上の曲線の連續せる所に變化の意を尋ねんとするもの、ホガースみづからの語を藉れば、美の最要素

たる複雜葛藤(Intricacy)を之れによりて標示せんとするなり。

曲線の連續によりて複雜なる一切の美を說明し去らんとするの難事たるは言ふまでもなけれど、之れによりて形式美の一面たる變化活動の理を標示するの思想は、注目に値するものなり。また『裝飾意匠の原理』と題する書を著はせし英のドレッサー(C. Dresser)氏が楕圓曲線の說に以爲へらく、楕圓線が正圓線よりも美なるは、正圓線が一中心點に發するものなるに反して楕圓線は二個の中心點を有するがためなり。言ひかふれば一個の出立點を有する曲線よりも二個の出立點を有する曲線が、之れを考察するとき意義複雜なるの理なればなり。從つて楕圓線は更に三個の中心點を有する卵形曲線の複雜なるに如かずと。是れまた曲線美の說明に於いて注目すべき思想の一たるべし。

我等は以上の說より更に一歩を進めて、卷曲線の上に同一の原理を認めんとす。之れを例へば、蕨の芽、浪の頭の如き圖紋は、其の軸に於いて直線若しくは非常に鈍き曲線をなし、其の頂に及びて急遽彎卷して、而も圓に還らず、次第に其の彎曲の度を急にして、こゝに二個以上の中心點を有する曲線が、不即不離の微妙なる關係を以て連結するの狀を呈す。其の意義、夫の卵圓線よりも更に複雜なるを見るなり。蕨の芽、浪の頭が、枝を生じ脈を分かち、且つ伸びては且つ卷曲して窮まるところなきの觀を成すものは、卽ち一層複雜なる唐草模樣の原理なり。卷曲線の美は玆に至りて十分の展開をなせるものといふべし。

此の點を超ゆるときは、形式美の原理盡きて、內容美の原理其の作用を始む。すなはち、寫生の意を援き來たりて、模樣の中に繪畫の味を點加するなり。而して唐草模樣の多くは、また此の原理をも適度に包含す、其の謂ふところ成長の原理(Inflorescence or Principles of Growth)を加へたること是れなり、植物が根より長じ行くの姿を攝取したること是れなり。植物に象りたる殆ど凡ての卷曲線圖には、如何なる形に於いてか其の根を標すべき區劃線を加へて、之れより上騰し行くといふ、成長の意を明にする

を例とす。卷曲線は此に至りて普に其の線形を蔓草に似するのみならず、其の精神をも蔓草に擬して、以て生動の氣を着け來たるを見る。一彙の卷曲線圖は模樣ながらにして生きたるものとなるなり。

卷曲線の理はしばらく玆に盡きたりとせん。斯くの如きものを堆積したるヴェルサイユ宮殿の樣は如何。

十

幾變遷の後のヴェルサイユは、一箇の美術宮たるに過ぎざれども、其の昔は、眞に情海無限の波瀾をこゝに寄せたり。庭の構へは冷きまでにクラシカルなり。膨らみに微妙の線を見せたる古代の石瓶、冷靜の美を希臘に寄せし大理石の彫像、此等のものを點綴せる道は悉く直線にして、此所に逍遙せる宮人等が、肉を暴らし情を暴らしたる蒼白の顏には、歡樂の底より湧き出づる荒凉の感、隱すべくもあらず。

然れども、一たび紅線の帳を揭げて內裡に入るときは、光景おのづから一變す。冷靜沈重の威あるすべての建築的直線は、漸く注意圈外に墮ちて、視界に進み來たるものは、彫りたる裝飾、塗りたる裝飾の堆積なり。中にも長押に、柱頭(カピタル)に、額緣に累々として彙をなすものは、夫の卷曲線形にして、卷曲線形のあるところ、金粉狼藉、碧堊を照し、紅帷に映じ、燦爛として我が顏も輝くかと異しまる。すべてこれ歡樂圓滿の姿なり、粉脂溫柔の氣、歌舞周旋の態、到るところに充ちたり。壁に名畫を懸け、床に名器を列ね、柱に彩紋を施し、天井に神仙を刻む。二百の房子之くとして是れならざるはなし。人間富貴の家も亦た極まれるかな。

十一

中央正面の階上に、幅六間、高さ七間、長さ四十間に余るの一室あり。淨玻璃の間(Galerie des glaces)と呼ぶ。室內一切の裝飾は此の宮殿と共に一代の文華を代表する名畫工

ラブリンの意匠に成りて、當代美術の粹を集めたりと稱せらる。天井の區界長押まはりの凸凹線等に、尙ほ必ずしもロココならざる趣味はありといへども、全局に漲れるものはロココの風潮なり。此の室、庭に面して十七個の大窓を開く。窓の高さ三間に餘り、幅之れにかなふ。白玉を溶したるが如き日光此の窓より汪溢して正面の壁に達すれば、こゝには柱間悉く大玻璃鏡を掲げたり。埋め木の床また精磨したる一面の玉の如く、走るものをして直ちに滑り且つ倒れしむ。日光この間を左往右往に照射して、身はたゞ大光明の中にありと感ずるの外、何事をも思ふの遑なし。柱はすべて碧、黑の大理石にして、磨き出だせる自然の理紋は或時はしよろ〳〵流れの水の跡、或時は曉の空に棚引く横はた雲、或は蔓の如く延び、或は蟲の如く這ひて、こまやかに其の面を飾れり。畫幅を舒したる圓天井は、虹の如く其の脚を垂れて、脚のつくるところ、簇々として群り起こる彫刻彙は、多く形に於いて卷曲、色に於いて黃金、柱頭以上の壁面は之れに蔽はれたり。コリンス式の柱頭、窓のアーチの花環、見るとして黃金の光りの

饒なる卷曲線にあらざるはなし。されば此の淨玻璃の間に緩舞の裳を飜したる當年の宮女等が、其の風俗に於いて、浮誇の粧ひ殆ど人間の自然にあらざるが如き狂態に陷りて異しまざりしもの、まことに故あるかな。

十二

淨玻璃の間に隣して大いさは其の十が一とも見るべき一室あり。ルイ十四世の寢室にして、彼れが臨終の寢床も今なほ舊のまゝなりといふ。蓋し王者の富と力とにより て、あらん限りの善美をつくせる此のヴェルサイユ宮殿に於いて、更に其の華奢の極點を示したるもの、此の室の如きは無からん。此の意味よりすれば、ルイ十四世の寢室は、またヴェルサイユ宮殿の眼目ともいふべきなり。

室に入ればたゞ見る、中央に逞しき金塗の欄を横たふ。蓋しルイ大王の遺物を保護せんがため、後世の構ふるところ其の彼方に一基の寢臺を安置せり。ルイ十四世が七

十二年の長き王位の後、千七百十五年九月一日を以て安らけく此の世の眼を閉ぢしはこゝなりといふ。深紅の帳を深く絞りて、上には天蓋に淡紅淺綠の彩帷を垂れ、崩るゝばかり盛り上げたる卷曲葉の彫刻には、金紛を恣に堆して、指頭を觸るれば指頭も埋もるゝかと疑はる。右に暖爐あり、緣は金粉と唐草となり。其の奥に數尺高き燭臺を置く、また黃金と卷曲線となり。畫幅の緣、柱の頭、長押の上、扉の面、色として金色ならざるはなく、形として卷葉蔓草にあらざるはなし。我れの始めて此の室に入るや、見ること暫時にして眼眩し氣暈するの感に堪えず、終に長く留まるを得ずして出で去りぬ。あゝ是れルイ王が空しき榮華の跡なり。

十三

風物の遷らんとするや、ルイ王の富貴、ポムパドウアの驕奢を以てするも、ヴェルサイユ宮殿をして長く美術の宗たらしむる能はず。其の纖細婉柔に對する反動の機は、早く十八世紀の後半、ルイ十六世が頃に萠したり。ルイ十四世は十八世紀の始めに死せりといへども、ロココ式美術はむしろルイ十五世の寵妃ポムパドゥアの生涯と始終して、十八世紀の後半に其の衰徴を示せるなり。さればまたロココ美術の運命はルイ王家の運命にして、ナポレオン一たび之れに代つて起つや、反動の氣勢は所謂帝國式美術となりて第一帝國と共に興こりぬ。

ロココに對する反動は第二のクラシシズムなりき。一旦卷曲線の下に隱れたる建築的直線が、其の沈靜の威容を呼び返して、再び表面に顯はれ來たらんとせるなり。而して古典的といふが中にも、希臘よりはむしろ羅馬に心を寄せて、一切の事、羅馬帝國の昔に式せんとせしは實に、ナポレオンの理想にしてまた其の期の文明なるべし。羅馬式といふものゝ委細は今こゝに論ずるを得ざれども、希臘の後を受けて、典雅沈靜の中に一味の雄健を加へたるものは、其の主なる特色なるべし。支配の氣、帝王の相はあらゆるものに影を宿して、威力といひ雄大といふことを其の生命とするに至れる

なり。是れ社會國性のおのづからの發現に外ならず。而して歐洲統一の構圖を有せるナポレオンの人格は之れと歸を一にす。彼れが羅馬帝國の古に式せんとするの好尚は、當時の藝術に影響して、第一期佛蘭西帝國の下に帝國式の一體を生ずるに及べるもの、亦た宜ならずや。帝國式美術について稍々精しく論ぜるものには、獨のカール、ロスナー氏(K. Rosner)が『十九世紀裝飾美術』と題する書あり。此の體の美術を標して、威力、單一、適當の三語につゞめたるを見る。

十四

ヴェルサイユ宮殿に遊ぶものは、また必ず之れと隣りしたる大小二つのツリアノン宮殿に過るならん。其の大ツリアノン宮に於いて、我れはロココとアムピール。ルイとボナパルトの對照を見るを得たり。

グラン、ツリアノンは既に述べたる如く、固とルイ十四世がマダム、マントノンの爲めに建てたる小宮にして、其の尚ほ平明なる古曲式建築の面影を存するところ、多く後の氣風に感染せざるの藝術たり。中にナポレオン一世の遺物を保留したる一室あり。彼れが用ひし寢臺は、以て前のルイ十四世のそれと對照すべく、其の他、椅子に卓子に、ある限りの什器は一種別樣の色調を有して、ヴェルサイユ宮の靡麗の藝術に馴れし眼を新たにす。

ナポレオンの寢臺は其の臺の輪廓、截りたる如き方形にして、頭尾の楯の內面に用ひたる卷曲線は細麗の風を避けて、數尺たゞ一卷曲の雄勁なる趣きを寓したり。金を泥すべき所に一面の木地を見せ、圖紋を要する處には直線を以て劃りたる中央に唯一つの卷曲線圖を施して堆積累重の臭味を脫せり。之れを要するに金粉を用ふること漸く濫ならず。鋭き直線は凡てのものゝ輪廓を支配して、圓かりしものは多く方形となりぬ。全面にわたりて小卷曲線を堆積せしもの、今は之れをたゞ一の大卷曲線にして雄健の致を添へ、若しくは之れを中央の一彙に減じて純潔單一なる品位を貴ぶ。其の

印象は高貴なり、英邁なり、帝王の氣を帶びたり。

後のマホガニ細工または我が欅細工の類に似て、橙黃色の木地を磨きたる中央に無造作に黃金の圖紋を置き其の他には周圍の直線の外何ものをも配合せず、たとへば我が漆器類に菊桐または三葵の金紋を蒔繪したるが如き高貴の風あるもの、玆に見えたる裝飾の特徵なり。總じて我が紋章といふものに一種の韻致あるは其の多く曲線を用ひたる圓形圖なるに拘らず、規律を持すること嚴に、且つ之れを累積して濫に流るゝことなく、婉曲を整々の中に保つの微妙なる調和あるがためにあらずや。

十五

帝國式美術は、斯くの如くロココに對して淸新なりきといへども、何ものか長しへに淸新なるを得べき。此の體もまた時勢の遷移には抗し得ず、やがて過去のものとなり了んぬ。ロスナー氏は、此の體の美術を以て千七百八十年より千八百二十年に亘りて行はれたるものとなす。千八百二十年はナポレオンがセント、ヘレナに死せるの前年なり。其の他は、ロココ以後の美術を以て一に古典式復興と概稱するもの、又はルイ十六世に已に此の氣勢ありしが故に之れを古典的ロココ時代と稱して、ナポレオン期はたゞ其の連續たるに過ぎずとなすものあり。我れは帝國式に一期を劃するの說を採れり。而して千八百二十年頃より後の古典的美術は、羅馬より更に希臘に溯らんとせりと稱せらる。

嗚呼ルイ家とボナパルト家と一代の氣風はまた其の代表者の運命なり。文藝も亦た往々にして之れと消長を等しくす。王者逝いて藝術も其の墓に葬らるといふもの、ヴェルサイユに於いて其の理を見る。（明治三十九年八月）

美學と生の興味

上　生の哲學

一

生活といひ生命といふ、要するに論は生の一語にかゝつて存する。我等は現に生きながらへてゐる。生きながらへてゐればこそ、玆に意識があり我れがある。意識ありて我れあればこそ、宇宙萬法の存在といふことが立言せられる。生とは存在といひ意識といひ我れといふが如き諸事實を統括した名である。宇宙のあひだ生といふことほど重大な事實は無い。

今假りに宇宙間一切の現象を地から天に架する梯子と見れば、之れを上から順に降つて來ると唯々存在といふ一語の礎に達する。又之れを下から昇つて行けば、生若しくは意識的生活といふ頂點に達する。元來我等人間は知らず識らずのあひだに己が意識の存在といふことを第一必至の前提として、すべての事を考へてゐる。我等が一たび意識の眼を閉ぢれば、有無の詮議は悉く絶滅してしまふ。意識の第一有を豫定した後でなくては、萬象の有無は考へられぬ。此の意味から見れば、宇宙は意識以内に存する。併しながら客觀的にいへば、此の論ではまだ十分でない。我れ一個の意識が亡びた後にも、他個の意識を存してゐて、我れと同じく萬象を其の中に描いてゐるであらうとは、我等の常識的信仰である。すなはち我れ一個の意識が亡びれば、萬象も共に滅するとは此の信仰が言はさない。更に一歩を讓つて、あらゆる意識的生活が此の世から消滅したらどうかといふに、此所でも肉體だけは土となり水となつて殘らうとは、同じく常識の經驗が類推的に得てゐる信仰である。此の理を順次に推し下すときは、土となり水となつたものが、よし其の土たり水たる形は失ふとも、科學者のいはゆる、元素となつて存しやう、元素は更に幾たびか其の形を亡ぼして原子より原子に

分解し行くとも、結局何等かの形で存在といふ一語の意味をば失ふまい。永劫にわたつて存在といふ一義だけは決して亡びぬといふのが、此の梯子の最底邊の信仰である而して此の存在が現象といふ明かな狀態で我等の意識の前に展開し來たる次第は、無機界から有機界、動植物から人間といふ自然哲學の上の順序であらう。頂點は卽ち人間であつて、其の特徵は意識的生活であること言ふまでもない。

而して我等は通例、存在現象の頂點たる意識的生活卽ち生といふことに價値を附して、之れを最も貴いものとする。こゝで價値を附するとは望ましいといふ意識の伴ふことである。最も貴い價値とは、最も望ましいものといふ意味に外ならぬ。我等の知る限りに於いて、生より以上望ましい存在狀態は無い。但し此處に至れば宗敎的道德的に種々の疑問が起こる。宗敎は生以上の存在を望んでゐるといふものもあらう。道德は自ら望んで生を拋つことがあるといふものもあらう。併し我が觀る所によれば、是等は以て生の最高價たる所以を傷くるに足らぬ。

二

此の問題を解決するためには、先づ生きるといふことに更に一つの條件を加へねばならぬ。それは「如何に」といふ形容詞である。如何に生きるかといふことが、先決問題となるのである。之れに對して宗敎は神的に生きよといふかも知れぬ、道德は善的に生きよといふかも知れぬ。此の場合には、價値の源は生といふこと自身から移つて其の形容詞たる神的若しくは善的といふことに歸する。神若しくは善といふ理想が別に在る。我等は先づ之れを知り之れを認識して、而して之れを要望する。

併しながら此の種の思想に對する根本の難點は、認識して要望するといふ心理的順序が立たなくなるといふことであらう。善乃至神といふ理想は、其の實、理想みづからとしては、古來未だ曾て我等の知識に上つたことが無い。神といひ善といふものゝ內容は、人間に思想の歷史あつて以來、三千年の昔も今も同樣に茫漠であるといつてよ

い。茫漠として取りとめの無い一體物といふが如き意識はあつても、明確な認識は無い。又個々の事象に附着しての認識はあつても、此等を總括しての認識は無い。此に於いてか起こる疑問は、此の如き理想といふもの、畢竟は認識して而して要望するに非ずして、逆に先づ要望して而して認識するのでは無いかといふ事である。言ひかへれば、我等に先づ或る種の要望がある、之れを總括して要望其のものに認識作用を被らしたのが卽ち理想では無いか。隨つて理想とはたゞ我等が最も望ましいものゝ總名たるに過ぎぬ。其の中から特に要望の源たる一概念を明に知識し出ださんとすれば、忽ち茫漠として方を失ふに至る。理想が別に高い所にかゝつてゐて我等が先づ之れを認識するによつて、こゝに要望の標準が出來るといふ順序では無いやうに見える。無いやうに見えるものを有るやうに說かんとする結果、かゝる理想說の根抵には常に直觀といふが如き非說明的の遁路が穿たるゝ。然り、之れを遁路と呼ぶも差支あるまい、蓋し知識の要求に應ずるものである限り、知識の說明を具してゐなくては有るも無いも同じである。說明は出來ぬが兎も角も理想といふ一物があつて、同じく說明は出來ぬが如何にかして我等が之れを認識するといふのでは、知識にはならぬ。さらばと言つて夫の有無、黑白の認識と等しく根本の事實だから仕方がないと言ひ去ることも、此の場合には許されぬ。有無黑白の根本認識と理想の直觀とは、決して等しなみに見るべきものでない、事實といふ意味が違ふ。理想の直觀といふことを、それ以上說明の出來ぬ最後の事實と見るか如何といふことが卽ち疑問なのである。玆では之れを最後の事實と見ず、其の間になほ說明の餘地があると認めて、別途の思想を辿り試みんとするに外ならぬ。

以上要するに、神といひ善といふ理想を生以外に立てる時は、之れが現實の生活に交はり來たる逕路が分らなくなる。神といひ善といふは畢竟生以內に存する何ものかの變名ではないか。若し之れを生の中に求め得るとすれば、生の價値は萬鈞の重きを致すであらう。

三

生以下の事象で生を行きどまりの標準として價値を有するもの〻多いことは言ふを要すまい。生理的乃至心理的に、我が生を增益するが故に之れを所望する。此等はすべて價値の本を生に托するに外ならぬ。口鼻の感覺に快いものは生が之れを要望する、併し進化の具合で之れが生に害を與へる者となれば要望の價値が減じて來る。最後の訴へ所が生にある所以である。同じ次第で種々の心理的生活にも價値がつく。知識は我等の心理的生活の一部を肥して、以て生を衞り、導き、飾るが故に貴いとも見られやう。されば善も畢竟は生を增益せんとするのが直接の目的、神もまた生を完全にした頂上に生ずる名ではないか。此の如くしてあらゆる價値、興味、要望は之れを生の一つに籠める所に、生の哲理が成り立つ。

生きて而して何を爲さんとするか。生の上には傾向があつて、生の末には目的がありはせぬか。換言すれば我等は何のために生きてゐるか。此の疑問に對して知識上明瞭な答の與へられぬのは、神や善の理想の場合と同じで、畢竟と神といひ善といふもの〻更に奥まつた所に横はる根蔕問題である。元來我等が知識上の順序から言へば、先づ神的、善的に生きて而して或る生の目的を成さんとする。神的善的に生きることは生の目的でなくして途中である。朝たに善人となつて夕に則ち死し、昨日神に感じて今日則ち死するといふことは、決して我等の眞の滿足ではない。たゞ〳〵善人となり神となることを生の目的とするが如く說く道德說や宗教觀に對しては、我等は少なからぬ疑を挾む。人生は今少しく現實的光彩を有し活動を有するものであつて欲しい。されば我等は生の目的を單に神といひ善といふこと以外に求める。同時に此の點に於いては生そのものをも超越することを厭はぬ。ロッチェの所謂絕對的人格には如何にして達せらるゝか分からぬとしても生以上に何等かの計畫があつて、我等が生を重ね行くうちには何時か其の目的に達すること、恰も東西知らぬ旅人に目的地を告げずし

て旅行せしむるが如きものであらうとは、我等も之れを信ずる。併しながら是れはたゞ茫漠たる信仰もしくは想像に過ぎぬから、知識上の要求より言へば、さうであるかも知れぬが又さうでないかも知れぬ。人生には何等の目的計畫もなしと信ずるものも現にある。結局此の點以上は知識の容喙を許さず、知識に取つては有無ともに關せぬ範圍ではないか。古往今來何人も此の不思議をひらき得ず、たゞ歩々知らずして之れに接近し行くのみと信ぜられる。恐らく今後といへども人間みづから其の境に實到するまでは、此の最後の難問は解けぬであらう。此の點から觀れば人生はまこと不可解である、永久にわたつて不可解であらう。此の不可解を可解に轉ずるの途は、之れを生以内に引き戻すにある。知識の手の屆く限りに最後の說明を求めて、そこに知識上の疑惑を止息せしむる。それが生の哲理である。

四

されば我等は今一度如何に生きるかといふ始めの問題に立ち返つて、「如何に」といふ形容詞の說明を生そのものゝ中に尋ねると、玆に二つの條件が出て來る。一は增進といふこと、一は永續といふことである。生の增進生の永續、是れが最も望ましい生の狀態である。最も赤裸々なる我等の要望は生を支持せんとすることであらう。而して一旦生を支持し得れば更に之れを增進して且つ及ぶ限り永續せんと願ふ、單に生の支持所有といふことだけでは消極的の要望たるに過ぎぬ。一旦有し得たる生を增進し永續せんとする所に積極的の要望が見はれる。此れ以上は無限に之れを追求する。決して是れが增進の極、永續の極といふものには達しない。此の意味から言へば生は、空間的にも時間的にも絕對無限ならんことを欲する。生の理想は自己の無限といふことにあるとも見られる。增進永續の二件は無限といふ一に合して、生の無限が人間最高の要望となる。併しながら現實の社會はあらゆる方面に於いて有限である。一個の生の增進が或る度に達すれば外圍とも衝突し、また內に有する生理的心理的精力の極限

とも矛盾する。又一個の生の永續は生理的に或る年限を超ゆることが不可能である。要するに生の無限は現實社會の有限と相容れぬ矛盾である。造化が何ゆゑに斯かる計畫をしたかは別として、斯くの如きが事實であるから是非がない。

此に於いてか生の無限といふ要望は、變形せざるを得ぬ。ちやうど敷石の下に生えた草の芽が、頭を押へられて屈曲するやうに、生の無限といふ素直な要望は、有限の押さへ石に突きあたり、曲りくねつて、さながら上からでも生えた如く、再び下にきさりかゝつて來た。ちよつと見れば其の根が上方にあるかとも思はれる。これが即ち道德宗教である。

道德とは此の無限と有限との矛盾を調攝せんがために、無限をして讓歩せしむるの謂ひである。生の要望を適度の所、中庸の所に留まらしめんとする消極的解決法である。中にも生の增進から來る矛盾に於いて、道德の立場を認める、外圍との矛盾を說くために恭謙讓等の德を立て、內に對する矛盾を解くために自重節度等の德を立て、以て結局の永續將來の安全を贏ち得んために現在當面の增進を犧牲とするのが道德的現象の本來の意義では無いか。されば道德は賢明といふことの變態であらう。生を比較的永續せしむるに最も賢なる方法が、即ち最も善なる方法であつたのが、進化の結果、移つて價値の感を犧牲その事の上に認めるに至つたのであらう。夫の義務のため、名譽のため、熟愛のため、絕望のために已れの生を拋つて顧みぬものには、其の事情の異なるに從つて雜多の動機が纏綿してゐるやうが、純粹なる道德的動機は右の進化的功利的なる一說明で十分と信ずる。

宗教はすなはち道德が如何ともなし得ざる他の一面、生の無限の永續といふ要望と有限といふ事實との矛盾を解決することを主とした一種の精神狀態を形成せんとするものである。生の有限といふ現在の事實は、人力で如何ともしがたいが故に、無限の永續といふ要望を超現實の世界に導き、そこに種々なる變態を來たさしむる、諸多の宗教的現象は斯くして起こるのであらう。又增進の要望より來たる矛盾も、道德に

よるのみにして解決せられざる場合すなはち根本に生の不如意の苦痛を脱し得ざる場合には、之れを宗教的に解決せんとする。苦痛ある所以を超現實の關係に歸して之れを慰藉せんとするたぐひが其れである。つまり宗教は生の有限、死滅、不如意等に對する諦め若しくは慰藉の道に外ならぬ。我等が髣髴として内に抱いてゐる無限圓滿の生を客觀化したものが神でなくてはならぬ。卽ち神は完我の想像圖である。

之れを總括するに、道德も宗教も第一境は生の無限といふ要望である、我等は之にあらゆる權威と意義とを捧げねばならぬ、第二境は之れに達する方便といふ功利現象である、我等は之れを方便と意識せずして工夫する。第三境は更に之れが進化し訓練せられて第二境を忘れ第一境を忘れ、先天の直接作用の如く思ひなさるゝにある。道德宗教の威嚴がこゝに獨立する。第四境は此の先天の宗教、先天の道德を更に第一境の生と結合せんとする。夫の在來道德、在來宗教に對する近代の反抗的思想は、或は個人といひ或は自我といひ或は人間といふ種々の提唱あるに拘らず、皆此の意味を有するものであらう。道德宗教に「生の爲」といふ自覺の一閃光を注がんとするのである

斯くして宗教道德其の他凡百の現象は生の一義に攝取せられる。世の中に生ほど嚴肅な意義を持つてゐるものは無い。

五

生の哲理を終るに臨み、初に立ちかへつて、生の增進とは何であるかといふことを一言して置く必要がある。生の内容は、之れを客觀にしては、やがて天地間の現象がそれであり、之れを主觀にしては、此等の現象に應酬する我れの態度がそれであるから、其の雜多にして果てしなきことは言ふまでもない。而して其の客觀は知識によつて代表せられ、主觀は情意によつて代表せられる。されば生の增進といふは到底生の内容を數字的に算し出だして解釋せらるべき問題ではない。たゞ我等の目安とし得る一つの事實は、要望の滿足から來る快感といふ心理的現象である。此の事實の有無多

少によつて生が一層よく其の內容を增進してゐるか否かを判ずるの外はない。我等は個々雜多の要望を且つ起こし且つ充たして行くところに其の生を營んでゐる。隨つて一層多く要望を起こし且つ充たすのが一層多く增進した生である。同時に一層多くの快感が生ずる。快感の增進が生の增進の目標である所以。

斯やうに言へば直ちに盜賊姦淫等の要望、滿足、快感をも生の增進として貴ぶかと批難するものがあらう。是等も現に生の一現象として之れを營みつゝあるものに取つては、一層多く之れが滿足快感を得ることが一層多く生を增進することであるの事實は如何ともし難い。過去野蠻の時代に於いて、また恐らく現在に於いても或事情の下には、此等が道德上の罪惡であるといふ觀念すら無くして白晝公然行はれるといふでは無いか。併しながら進化した我等の道德は之れを禁斷する。竟畢之れが却つて生みづからを亡ぼすの危險を伴ふからであつたらうが、今では良心の命令として之れを禁斷する。之れに背けば良心の呵責が苦しい、乃至國法の刑罰、社會の制裁が恐ろしい。

此等の苦痛を豫想するときは、盜賊姦淫の今日の快感は明日の苦感の豫想によつて打ち消される、安全なる生の增進では無くなる。（社會學者キッド氏に、現在を將來に服從せしむるを文明進步の原理とする說がある、おもしろい）。要するに快感は常に生の增進の目もりである。

此所に至れば生の增進永續ばまた快の增進永續となり、生の哲理はまた快の哲理とならざるを得ない。生の興味に基礎を置く學說は、いはゆる快樂說と密に接續する。快樂說の道德上の嫌は、主として其の浮靡遊惰に連なるにあれども、快樂の眞義は決して夫の誤まれる嚴肅派の考ふるが如きものではない。之れを根本の問題に還沒せしめて、生の滿足、生の喜びから發する火花と見るときは、其處に高貴無類の味が認められる。

たゞ斯くの如き自覺を伴ふの快感は現實の生活に於いては容易に得られぬ。其の發現の局部に拘泥して處置せざるを得ざる實行界の要望、滿足、快感は其の局部のみに

して直ちに次の過程に滑り入り、生そのものゝ根底と交渉するの餘裕を許さぬ。剩さへ要望は必ずしもすべて滿足させられず、快苦相磨して愈々其の醇味を失ふに至る。此の際にあつて、此等の生を一幅の圖の如く我等が前に展べ來たり、局部を全體に化して、滿足不滿足を凡て其のまゝ快となし我等をして且つ營み且つ味ふの妙を得しむるものは美である。斯くして生の哲理は、美を生の興味の上に立てんとする。以下之れに關する二三の美學說を述べて此の論の意を明にしやう。

中　遊戲說

一

生は人間の第一義である。前回の文に於いて吾人は此の意を述べた。而して生を中心にしてあらゆる事物を考へる狀態を、廣い意味で實際的功利的といふ。今若し人生一切の事象は其の存立する所以の目的を生の一義に歸するとすれば、此等一切の事象の價値は實際的功利的標準によつて判斷せらるべきである。然るに玆に美といふ一種の事象があつて、其の價値の標準に迷つてゐる。美は果して實際的功利的であらうか。

美學史上に有名な見解の一つは、夫の遊戲說である。此の說の起原は從來ドイツのシラーにあるとせられてゐたが、近來は更に夫の『批評原理』の著者でロード、ケームズと呼ばれるホームに其の先聲を歸する。而して遊戲說の要は、人間に生活力の餘贅ある場合に、それがおのづから溢れて遊戲となるといふに歸する。又斯くの如き遊戲と所謂美とは根本に於いて相通ずるといふに歸する。美は生の餘贅である。今まづ此の種の學說の一二例を擧げると、前記シラーの言ふところは科學的でなくして寧ろ哲理的であるが、其の意、人間には肉的本能（Sinnliche Trieb）と形的本能（Formtrieb）とあつて、前者は人間の生理的存在若しくは肉性から生じ、後者は其の絕對的存在若しくは理性から生ずる。一は變化的で一は不變的、一は我等が生命と呼ぶものに現はれ、一は我等が形態と呼ぶものに現はれる、而して此の兩面の調和した所に第三の本能を生ずる

のが卽ち遊戯の本能(Spieltrieb)である。玆では肉體と理性とが合一する。之れを名づければ生的形態(Lebende Gestalt)と呼ぶべきであらう。而してまた此の生きた形態といふことが美そのものに外ならぬ。生命と形態といふことは、形態のみを考へればそれはたゞ抽象した空のものに過ぎなくなるし、生命のみを感ずれば、それは單なる印象となる、兩者が離れて見える間は、其の事物は決して美とならぬ。形態は直ちに生命で、生命は直ちに形態といふ境が美である。其の斯くの如くなるのは竟畢事物の形態が我れの感情に入り、生命が我れの理解に入つて、我れの中で密なる抱合を遂げるからである。蓋し我等の理性は本然の完成を欲するが故にあらゆる制限を嫌ふ。若し形的本能を追へば形態に限られ、肉的本能を追へば生命に限られる。此の限界を撤して、全く制せられる所なき自由の天地に遊ばんとするのが、人間本性の要求であつて、此れが卽ち遊戯本能に外ならぬ。遊戯本能の對境は美である。されば詮ずる所人間の本性は至高の目的として美を求める。シラーが說に多少の言葉を加へて說明すれば、ざつと斯うである(シラー著『美的教育を論ずる書』)、二つの凝滯したものゝ溶け合ふ所に美が活現しはじめるといふ思想は、無論カント以來既にある所で、譬へば形と命とが坩鍋の中の二塊の金屬のやうに、何時かのはづみでとろつと溶け合ふ、其の瞬間から、もう今までの凝滯した固形物ではなくして、融會無碍な流動體になつて活動する、または明けがたの空に見つめてゐた星が、つるりと滑る、其の拍子に我が眼底の一膜を切り落としたやうに感ぜられて、今まで形と見た萬象が生きて動いて來る。結局何等かの一轉機で、我が心の栓が拔け、自由に八方に溢れ漲る狀態を美の感じと見るのである。吾人は此の種の說が非科學的であるに拘らず、審美上の事實の一面に觸れたものとして之れを重んずる。

玆で必要なのは、シラーが遊戯といふ語の意味である。彼れに從へば、遊戯性とは畢竟精神の自由な活動といふに外ならぬ。而して其の自由はやがて人間の本性の完成せられる狀態であるから、遊戯には人生の理想と相接する重大な意味がある。遊戯と

いふことの價値が非常に高いものとなる。

二

シラーの後、遊戯本能の說を明白に揭げたもの〻一人は、夫のハーバート、スペンサーである。彼れは其の『心理學原理』の中に、先づ「數年前予はドイツの一著者の言を抄せるものを見たるに、美感は遊戯本能（Play-impulse）に發すと結論せり。予は其の著者の名を記憶せず、また其の說の理由、結着を述べありしか否かを思ひ起こす能はず」と書き出して、遊戯を解して餘贅な無用な活動（Superfluous and useless activity）すなはち生を助ける作用（Life serving function）から離れて行はれる活動とし、而して美もまた之れと相接するとした、即ち美感も遊戯と同じく餘贅な無用な活動で、直接な生活作用と隔絕する所に其の特色を有する。たゞ遊戯にあつては、少なくとも其の事みづから到達すべき目的を有し、且つ多く感覺的現實的たるを免れぬ。碁を圍むといへば一の餘贅な活動で、何も是れ無くては生命が支へられぬといふものでは無い。即ち圍碁は遊戯である。併し圍碁を樂むの情は美感とは言へない。圍碁には尙ほ其の事みづからの目的すなはち相手に勝つといふ目的があり、また現に烏鷺の石子を左右して其の事を實行する所に興味がある。美は此等の點で趣を異にする。目的に到達すると否とに論なく、其の過程みづからを主眼とする所が美の特色である、また現實の感覺界から離れて、想像的理想的になるのが其の特色である。物語が美しいといへば、物語みづからを讀み行くところに興味を覺へるのである、讀み了へて何等かの目的を達する所に興味が出るのでは無い。且つ其の物語中の事柄が、現實のものでなくして想像であることは言ふを待たぬ。此等が美と遊戯との違ふ特殊要件である。

スペンサーの意に註解を加へて述べれば、以上の通りであるが、其の事みづからの目的を達するを必要とすると否と、乃至實際であると想像であるとの別が、果たして遊戯と美との區界となるか如何といふことは、尙考究を要するとして、玆に吾人の注

目すべき點は、スペンサーの所謂遊戯の意味及び價値である。シラーと違つて、スペンサーは、遊戯を自由なる活動と言はず、餘贅の活動と言つた。また之れをシラーの如く人間本然の要求と見ずして、生活作用と斷離したものと見た。シラーに於いて人生と至密の干係を有する遊戯本能が、スペンサーに於いては人生の根本要求から閑却せられたものになる。從つて美を之れと聯絡せしむる限り、美も亦シラーに於いては人生の緊要事となり、スペンサーに於いては人生の閑事業とならざるを得ぬ。少なくとも生存といふ事を人間の第一義として事物の價値を判斷する限り、スペンサーの美は其の圏隅に押し除けられるのが必然の結果である。美は此に至つてダーウィンの所謂生存競爭(Struggle for existence)スペンサーの所謂生活作用(Life serving function)之れを總括して生といふ一語と、全く直接の關係を斷たんとする。言ひかへれば、美は全然實際的功利的のものでなくなる。

美を功利實用から引き離すといふ思想は、無論今に始まつたことではない。カントが美感の特質を數へて其の一を無利害(Interessellosig)と斷じたのが、此の思想の近世に於ける明白な發聲である。美は道德からも實用からも獨立する、之れを美の無利害性といふ。而して此の思想は一歩してまた唯美主義となり「藝術は藝術の爲なり」の說となつた。夫のイギリスのオスカー、ワイルド等の唱へたところが其の好例である。美は獨立して人生に其の力を布くを目的とす、他に何ものゝ力をも藉りて立つことなし。眞理の力に緣らんとするもの、現實の力に緣らんとするもの、皆惡藝術のみ、といふのが其の主張に外ならぬ。

下　生の增進と美

一

併しながら斯やうな思想には反對の潮勢も嘗て絕えぬ。殊に近時に於いては此の潮勢が漸く力を增し、美研究の世界は二大別せられて、美と生とを合するものと、美を

生から離すものと、功利的と唯美的とに限られんとしてゐる。功利派は唯美派の「藝術のための藝術」といふ題言に對して「功利の爲めの藝術」(Art for utility's sake)とすら斷言する。而して佛のコントの實際哲學に導かれて、ゾラ等の小說に達したものが此の思潮であると見る。吾人は此の兩說の是非をいふ前に、先づ斯くの如き反對の潮勢の起こつた次第を一見しなくてはならぬ。

蓋し美を目して全く我等の生と無交涉のものとするの思想は、凡そ下の四點から之れを疑はれても致方のない理由がある。第一は夫の『藝術の起原』の著者ヒルン氏がいふやうに、近年の人類學研究の發達は、延いて野蠻民族の藝術が常に實用の爲に造られて決して美の爲でなかつたことを續々證明して來るといふこと。第二は思想の方面でも古代の學者が概して美を實用または道德といふ如き功利と離るべからざるものと考へた點は希臘のプレトーも支那の孔子も其の他凡ての思想家大抵同轍一致であるといふこと。此の二ケ條は少なくとも過去に於ける文藝美と功利との關係を密接ならしむる重要の事實である。現在に於いては或は美と功利とは分離してゐるかも知れぬが、少なくとも過去に於いてはそこに何等かの密着作用があつたのではないか。若し是れありとすれば、それが如何にして現在の如く無關係な狀態に變じたであらうか。太古の人は名おほえの代りに石刀の柄に圖を刻んだ。それがどうしてただ飾の爲に鍔や目貫の彫刻に一代の妙技を盡す後世の刀の欄となつたか、後藤が作の刀の欄に完成してゐる美術も、斯う見れば、そればかりで說明が出來なくなる。背後に長い糸を延いて、太古の石刀の柄の彫り物にまで連續してゐる。而して此の石刀の柄の彫り物は純實用、純功利、後藤が欄の彫り物は純美術純遊戯とすれば、此の間の矛盾は何うして解くか、そこに進化があり歷史があらう。美の完全な說明は此の進化、此の歷史を究めた後でなくては出來ぬ。卽ち近時歐洲の美學が心理的研究と合せてヒルンの所謂社會學的歷史的研究を唱說せんとする所以である。兎に角こんな次第で、美は一途に生から離れたものだとのみも言つて居られなくなる。

次に第三第四は現在にわたつての事實であるが、まづ第三として擧ぐべきは、所謂理想派美學思想の多くが、古來一つの重要な暗示を有してゐる。それは人間の本性があらゆるものを生の要求と分離することを欲せぬといふことである。生と緣遠くなればなるほど之れに對する價値を低減せんとするの傾向である。生に用の無いものといへば、何となく白晝公然と之れを取り扱ふことを恥ぢるやうな氣持である。遊戯、餘贅といふが如き言葉は概して此の氣持を催起する。すなはち所謂人間本自の道德的傾向である。あらゆるものを何等かの關係で道德化せぬ限りは安んじて此の世に存立せしめまいとする、執拗なる一種の傾向である。或時は最上善卽ち美なりと見、或時は神卽ち美なりと見、或時は眞理卽ち美なりと見、或る時は科學卽ち美なりと見る。要するに皆功利に美を近づけんとするものに外ならぬ。吾等は此の傾向の底に、否みがたい人間の本面目が潛んでゐると信ずる。一切の價値を生に還沒して、こゝに最後最牢の極印を打たんとするものと考へる。すなはち以上の理由からして、美と生との分離が疑はしくなる。

第四に數ふべきは、現に美中の或部分が生活作用そのものから成立するといふ事である。フランスのギヨーがスペンサー等の生活分離說に反對した有名な實感說は其の例である、卽ち或る境に於いては、我れの生活を助ける作用が直ちに美になると見る。例へば夏の長旅に疲れた人が美しく熟した一籠の葡萄の實を見て之れを食ふ快味を覺える情は決して美感の快味と根本を二にするものでは無い、といふに歸する。此の說に就いては、異論の餘地も多からうが、幾分たりとも眞理とすれば、玆にも美と生との分割を難んずるの根據がある。

二

以上の四說を總括すれば、第一第二は、上古の代、事實乃至理論の上に美と功利とが同一であつたといふに歸し、第三第四は、現に事實乃至理論の上に美と功利とが同

一であり若しくはあらんと傾向するといふに歸する。既に古がさうであり、また今後もさうであるとすれば、中間にさうで無い事實理論を挿入するとき、如何の結果を生ずるかといふに、それが美の進化の階程を示すものとなる。

フランスのリボー氏が『情緒心理學』に述べてゐる所が、ちやうど此の點を說明するに便宜であるから、借りて見ると、美感の進化は凡そ三段に分かれる。卽ち第一段は美感と實用との密着した時代、第二段は兩者が一層ゆるやかな關係になり、たゞ時々遠い響のやうに實用の感が連帶して來る時代、第三段は兩者全く分離して、美は美のためにのみ存立する時代である。吾人はリボー氏の此の三段に更に最後の一段を加へて、第四、美感が再び實用に歸らんとする時代といはんとする。すなはち第一、美と功利の密着時代、第二、其の半分離時代、第三、其の全分離時代、第四、其の再合時代といふが如き順序を玆に認める。

しかしながら、此の三段乃至四段の發展を進化の原則に藉りて說明せんとするには、今一つ忘るべからざる根本の問題がある。卽ちダーウヰンが所謂生存競爭律の結果として、自己若しくは同種族の保存といふ實用目的に伴はぬ機能は衰滅して行く。美感は如何にして實用から離れたもの、卽ち進化の原則に逆行したものとして發展して來たか。リボー氏は之れに二つの理由を與へんと試みた。一は附屬的實用(Auxiliary utility)といふこと、他は生の根本機能(Vital function)の活動といふことで、前者は明確に之れを斷言し、後者はやゝ曖昧に之れを附加した。附屬的實用とは他に直接な實用目的があつて、それを補助するの謂である。野蠻人の舞踏は、本來多人數相寄つて敵を擊たんとする操練の目的から起こつたもので、拍子を合はせて踊るといふことは、此の目的を補助するがために發達したに過ぎぬ。併し其の踊りは同時に遊戲すなはち生活力の餘贅といふことと連なつて、生の根本機能と間接關係を有するものともなる。言ひかへれば生活力の盛大を促すといふ意味での實用も伴ふ。

リボー氏の此の見地には、依然として困難が殘る。大幹の傍に出た芽生えの樹は、

根の續いてゐる限り茂りもしやうが、一度根を斷たれゝば次第弱りに枯れて了ふ。始は幸にして他の實用目的に縋つて成長した美も、一旦實用目的から分離するが最後、進化の原則は再び容赦なく壓迫して來て、年代を經るうちに之れを仆してしまふ。根の無い木は枯れる道理、根といふのは實用功利であると、斯やうに押して來れば、美は到底實用功利と離れては存立せぬことゝなる。啻に美のみならず、人生一切の所有が此の根に連ならざる限りは悉く亡ぶのである、此に至つて吾人は、リボー氏が輕く附加した第二の理由に、寧ろ重大な意味のあることを認める。此の方が美の進化といふ難關を開くべき眞個唯一の鍵でなくてはならぬ。美は生の根本活力に連なる。是れだけでも美と功利實用との關係は十分である。

三

吾人は便宜のため玆に功利といふ意を、第一義第二義と、深淺二樣に分ける。第二義の淺い意味に於いては、操練が踊りの目的であつたり、名標が彫刻の目的であつたり。乃至勸善懲惡が詩歌の目的であつたりするのが文藝の功利である。第一義の深い意味に於いては、單に生の支持といふ以上に、直接生の增進を助けるのが、文藝の功利である。而して美は第二義の功利を以て始まつたが、社會狀態の變化と共に其の方面の漸く不用に歸して蟬脫せられ行くや、一時、人をして直反對なる無功利を思はしめた。美は玆に全く生より獨立し得たかの如く想像せしめた。唯美の思想は此の階程を代表する。けれども是れだけではどうも不滿足である。絲の切れた紙鳶のやうに、何だかふわ〳〵として落ちつかぬ。色々と勿體は附けて見るが、物足らぬ。そこで更に切れた絲をつないで、今度は衣食住などの上つらなものに結びつけず、其の底にある生命の杭にしかと卷きつけやうとする。是れが美を再び生に歸嫁せしめんとする思想に外ならぬ。

第一義の功利といへば、直ちに宗教問題のトルストイ、社會問題のゾラ、道德問題

のイブセン、乃至理想だの、眞理だのと雜多な道具が提出せられる。併し吾人のいはゆる第一義は是等で無い。是等は依然として第二義の功利で、たゞ操練や、名標と類を異にしてゐるのみである。若し文藝が說敎集となり、社會學となり、倫理學となり哲學となり、知識に仕へるといふを以て僅に實用功利の威を保留し得るといふのなら、其の文藝は名標となり操練となつて實用功利の威を保つものと區別はない。文藝の第一義功利は此の以外に存する、と見るのが吾人の立場である。

美は生の增進である。是れほど功利的なものは無い。こゝに何等か人生自然の眞理を描いた一幅の畫があるとする。例へばフランスのミレーが書いたアンゼラスの圖でもよい。滿幅鳶色がかつた田園の夕暮に、若い夫婦の百姓が一日の勞作を了へて、農具を側に、一籠の薯を中に置いて、相對して心から敬虔の祈を天に捧げてゐる。斯くして一日も無事に暮れた神の惠を思うて、謙遜な彼等の心には油然たる感謝の情が湧く。併しながら其の四圍の配色光景は、人をして深い〳〵一種の哀愁に堪えざらしむる。生の苦みは日に〳〵彼等の若い血を涸らして行く。地も、草も、人も、生活といふものに疲れ果てゝ、やがて彼方の寺から響き來る夜の鐘の音をたよりに、一夜をせめて安らかに休息せんとしてゐる。人間は何故に斯うしてまで生きて行かねばならぬか。分からぬものは運命の意味である。所謂近代的內觀、近代的哀愁の意は遺憾なく此の圖に見はれてゐる。我等が之れに對す時は、圖中に含まれてゐるだけの眞理は勿論、之れに聯續するものをも、何所までも辿り辿つて、其の通りを我が心に實現せんとする。そこに我が生は限りなく增進せられて、增進したる生は更に眼前の畫圖中に流入し、我れと圖と全く別なきに至つて、圖は生きたものとなり美なるものとなる。

吾人の結論は以上の如くならんとするのであるが、其の生の增進といふことから快樂說に入り、生の流入といふことから生化說に入らねば論は完成せぬ。題を改めて更に稿をつぐの機があらう。（明治四十年九月）

文藝上の自然主義

一

『日の出前』とはハウプトマンがドイツに自然主義を廣めた新社會劇の名であるが此の名には慥に一種のシムボリズムが含まれてゐる。一評家が言つた如く、作者はあれ程暗澹悲痛の人生を描きながら、『日の入り前』と呼ばずして『日の出前』と呼んだ。前途に大光明の希望をかけてゐたのであらう。其の希望は社會の改造であつたか、將た個人の解放であつたか、何れにしても當時の人は目を見張つて「第二のイブセン！」と叫んだ。

輓近我が文壇に自然主義の這入つて來た光景も亦た「日の出前」と呼びたい。茲では文壇の夜あけがたに、何時となく東山の第一峰から鮮やかな一道の光を射上げて來た。萬物は一齊に頭を回らして之れを見つめてゐる。中には早く既に若い日の息に感じて歡呼の聲を揚げるものもある。自然主義といふ一語の被らされる限り、小説も何となく清新なものゝやうに思はれ、議論も何等かの新暗示が其處に期待せられるやうになつた。作に於いても論に於いても、自然主義といふ一語が不思議に今の文壇を刺戟する。殊に新代の人に對しては、此の刺戟力が鋭い。此の事實だけでも、十分の考察に値する現象である。さて續いて昇る日影、我が文壇の前途は何であらうか。

自然主義といふ語の始めて我が小説界に掲げられたのは、多分小杉天外氏からであらう。氏は六七年前しきりにゾラを讀んでゐたやうである。其の標榜するところの由來もおのづから察せられる。併し天外氏はまた後年同じ脈、同じ態度の作を寫實と呼んでゐる。自然主義と寫實主義と共に、氏の語を借りて言へば鼻が高か過ぎるからといつて鉋をかけては僞りになる、唯在りのまゝに寫したのが眞の人間であるといふ立

場にゐる。而して天外時代の自然主義は、或時は寫實主義の蔭に蔽はれ、或時はロマンチシズムの反動に壓せられて、未だ一世の風潮となるに及ばなかつた。思ふに天外氏の自然主義は、其の理論に於いても、はた其の作に見はれた所に徵しても、今のいはゆる自然主義中の要素を、少なくとも其の傾向とし目的として含蓄してゐたことは爭ひ難き事實である。描寫方法の純客觀的ならんとすること、題材の肉に及び醜に及ぶを避けざらんとすること等、いづれか自然主義の主要元素でなからう。唯それらの外に尙一呼吸の合致せざるものあるため、我が自然主義にも前期後期の區劃を生ずるに至つた。天外氏の自然主義は其の前期を代表するものである。自然主義論に此の作者の名を逸してはならぬ。後期の自然主義は昨年來現に吾人の眼に新たな現象である。假りに時を限れば、島崎藤村氏の『破戒』國木田獨歩氏の諸短篇等が世の批評に上つた頃を其の端緒と見てよい。前期にあつては、天外氏みづから其の主義を意識していたが、後期にあつては、獨歩氏は以前から同一若しくは近似した作風を續けながら、世間が其の傾向を自然主義と認めるに至らず、現在にあつても、作者みづからは何主義でもないと新聞紙などに公言してゐる。また藤村氏も嘗てみづから自然主義だと宣言したとは聞かぬ。此等を自然主義と呼び做すに至つたのは世間若しくは評壇からの事である。しかも吾人の見るところを以てすれば、是れに聊かの不思議も無く、また不適當な嫌ひも無い。文藝上の名目は其の作家から出ると評家から出るとを問はず、一代の風潮を自覺せしめ改新せしめ、繁榮せしむる上に尠なからぬ便益を與へる。主義とは畢竟或種の傾向風格を統括した總名ではないか。之れを未來に押ひろげんとするの努力が主義の努力である。自己の爲さんとする所に信念と自意識との伴ふ限り、如何なる形に於いてか、如何なる名目に於いてか、はた如何なる明確の度に於いてか、主義標榜の生じ來たるは誠に止み難き近代思想の特徵である。

斯くの如くして藤村獨歩の諸氏はむしろ外間から其の傾向によつて自然主義と總稱せらるゝに至つたが、作者みづからも目下の自家の作風態度が最も此の稱呼中の意味

に近いものであることを承認してゐるであらうと信ずる。更に其後では、近時の諸短篇に見える小栗風葉氏、徳田秋聲氏『蒲團』に見える田山花袋氏『其面影』に見える長谷川二葉亭氏『紅塵』に見える正宗白鳥氏、乃至其の他の新作家、すべて益々自己の傾向主義に對する自覺を明にして行くのでは無いかと察せられる、而して此等諸家の主義傾向を一括して、最便宜な名を與へれば、自然主義であらう。勿論一旦名を與へれば、其名に役せられるといふ弊もある。けれどもそれは何の場合にも存する利害對立の一面に過ぎぬ。

二

過去に於ける小杉天外氏の自然主義、乃至後藤宙外氏の心理的、硯友社風の寫實的等と、現在所謂自然主義との間には、短少ながらも我國相應のスツールム、ウント、ドラング、若しくはロマンチシズムが介在して居る。明治三十四五年頃のいはゆるニイチェ熱、美的生活熱の勃興から、同じく三十七八年度までが卽ちそれでは無いか。今の自然主義は實に此の小ロマンチシズムの後に起つた特殊の現象である。前期の自然主義寫實主義には此の經歷が具備して居なかつた。吾人は玆に重要の意味があると思ふ。切言すれば自然主義は必らずロマンチシズムを通過したものでなくてはならぬ。泰西の事例は勿論のこと、近世自然主義の本土フランスでは、ユーゴー以下のロマンチシズムがあつて後バルザック。フローベールからゾラ。モーパッサンに極まる自然主義が出た。ドイツの自然主義も所謂第二のスツールム、ウント、ドラングの風に煽られて出た者と見られる。而してドイツ文學史上のスツールム、ウント、ドラング卽ち大あらし時代は常は精神に於いてロマンチシズムである。

如上の事實からして、吾人は先づ自然主義とロマンチシズムとの干繫を研究する必要がある。蓋し近時の文藝史家が歐洲の近世文藝を論ずるに於いて略一致する分類法は、クラシシズム、ロマンチシズム、ネチユラリズム、シムボリズムといふが如き名

目である。卽ち自然主義は之れを文藝的に見るときは、首をロマンチシズムに接し、尾をシムボリズムに接する。此の兩者との干繫は本論の重要問題の一つである。

シムボリズム、クラシシズム、ロマンチズムの三名目が哲學者ヘーゲルの美術論に於いて、始めて最も明瞭に文藝彙類の對照語として用ひられたことは人の知る所である。然るに近世の評論家が之れを近世の文藝に應用するに及んで、其の意義と場合とに變化を來たした。近時の用語例による時は、十七八世紀に亙つた歐洲の文藝は、大勢に於いてフランスを中心とし、ギリシヤ、ラテンの古風格に基づいて一種の體を形づくつた。之れを總稱してクラシシズムと呼ぶ。彼等はあらゆる作品に均整統一、規律、明晰等の智巧的條件を要求する。知巧的といつてよからう。また此等の條件は事物の形式に宿るものであるから、彼等が形式に特種の執着心を有して居たことも察せられる。形式的といつてよからう。また彼等は抽象的概念としての外、多くは現實平明の事物に其の形似の美を求める傾を持した。現實的といつてよからう。知巧的、形式的、現實的、此等の特色を總括してクラシシズムと呼んだ十七八世紀の文藝は、十八世紀の末、十九世紀に始にかけて、夫のフランス革命を中心として大廻轉を遂げた。十九世紀初頭の新文藝は、あらゆる意味に於いてクラシシズムの反動であつた。此の傾向が卽ちロマンチシズムに外ならぬ。

ロマンチシズムといふ語の內容は今以て不確定である。十九世紀當初の精神界に見えた新機運は凡て之れをロマンチシズムと呼ぶ。或る者は之れをメデヰーヴリズム(Medievalism)卽ち中古主義と解して、スコツト等が歷史小說の如きを其の例とする。また或る者は之れを神祕的なるコールリッヂの長詩の如きものに代表せしむる。また或は之れを理想的なるシラー等が作の如きに求め、或は之れをワーヅワース等が自然を宗とする傾向に求める。何れも其の一端に觸れて全斑を逸した見解である。今試みに西人が漫然數へ上げたロマンチシズムの諸解釋中最も一見に便宜な例として『十九世紀英國ロマンチシズム史』の著者ビーアス氏(Beers)の說を引くと、其の意に曰は

く、フランスの批評家ブルンチエールは其の文學史で女文豪マダム、ド、シュテールの說、異教主義に對する基督教主義、上古主義に對する中世主義すなはちクラシックに對するロマンチツクといふ解釋を是認してロマンチシズムは抒情主義なり、自我の發射なりとしてゐるが、要するに歐洲の諸國民が過去すなはち中世に回顧するの思想、すなはち中古主義がロマンチシズムの本義であると。而してビーアス氏は此の主義が包括する諸概念を數へて、情緒の强烈、繪樣なるものに感じ易き事、自然の景を愛する事、隔たりたる時代場處に對する興味、不思議神祕に對する好奇心、主觀的なる事抒情的なる事、自我の挿入、熱心なる新藝術の實驗等とした。以て其の內容の雜多なることが推せられる。今若し此等を前段クラシシズムの根本要件と相干繫せしめて、幾何かの重要元素に統括する時は、クラシシズムの知巧的といふことから、直ちに一飜して知識に對する情緒の反動、巧僞に對する自然の反動が生ずる。冷かな知量に反撥して熱烈なる情緒の反動を欲し、煩瑣なる人巧に反撥して醇樸自然の源に還らうとする。情緒的、自然的、是れが先づ認められるロマンチシズムの的確な特性である。續いてはクラシシズムの形式的といふことから直ちに內容的といふ事に反り來たつて、之れを客觀の對境に求めれば理想的となり、之れを主觀の我れに求めれば自我的となる。外形の空虛なるを去つて一指直ちに充實した中心の骨髓に觸れんとする。其の骨髓を向ふに求めれば理想に行かざるを得ず、我れに求めれば自己の個性に行かざるを得ぬ。ロマンチシズムに事物の中身を取り出さんとする二傾向、すなはち理想的と自我的との特性あるは此の理に外ならぬ。最後に、クラシシズムの特質現實的といふことの反動は空想的または超現實的といふことになる。現實平明の境の無味なるに飽いて、大に空想の欲を逞しうせんとする必然の結果は、時代に於いても場所に於ても現實を超越するに如くは無いことゝなる。時代に於いて現實を超越すれば、過去、就中暗澹として人の想像をそゝのかす中古こそ其の恰好時代となる。また場所に於いて實現を超越すれば、人間以上の神祕界こそ其の恰好舞臺となる。斯くしてロマンチシズ

ムには更に中古的、神祕的といふが如き特性を生ずる。情緒的、自然的、理想的、自我的、中古的、神祕的、吾人は此の六項目の何れかゞ併存し若しくは獨存して其の中心動力となり居るものをロマンチシズムと定義せんとするのである。其の他の諸細目に至つてはすべて以上の大綱に攝せらるべきものと信ずる。

クラシシズム
- 知巧的
- 情緒的
- 自然的
- 形式的
- 理想的
- 內容的
- 自覺的
- 現實的
- 空想的
- 又超現實的
- 中古的
- 神祕的

ロマンチシズム

併しながら此等の諸特質は究竟何を生命として發動してゐるか、此等の背後には、さらに〳〵奥深く或る一物の熱い息が力となつて之れを活かしてゐるのでは無いか。何等かの一物が、ギリシヤの昔から廿世紀の今日に至るまで、子となり孫となるものの努力向上の底に横はつて、己れを大白晝の下に露呈し來たらんともがく。之れを對境にしては何物かの形に於いて之れを探し出さんとする氣持、之れを我れにしてはたゞ突出し展開せんとする無方の焦燥心。ロマンチシズムも畢竟は此の一物がクラシシズムの乾枯した殼を蟬脫せんとする息吹に外ならぬ。偖此の一物を何と名づくるか。

三

ロマンチシズムの文藝が斯くの如き途を辿り盡くさんとしてゐる時、忽ち行く手に一路を展開し來たつたものが自然主義である。文藝史上に自然主義の名を最も明白に掲げたものは所謂フランス自然主義であるが、主義と名のつかぬ自然主義は早くイギリスのワーヅワースに端を發し更に溯つてはフランスのルソーに芽組んでゐる。此の場合に於ける自然主義の意味は單に人間の對照として自然に還り、自然を師とするといふに歸する。ルソーは其の第一論に於いて筆も言葉も及ばぬ自然の偉大を嘆美し、

第二論に於いて言語なく習慣なく道德なく戰鬪なき原始社會を想像し、教育小說『エミール』に於いて「造化の手に成るものは凡て善、人間の手に成るものは凡て墮落」の意を述べた。一切人間の技巧を去り文明を忘れて自然の本に還れ、十八世紀の半ばに出たルソーの自然主義は此の意に外ならなかつた。續いて十八世紀の末に出たワーヅワースは、其の『抒情歌集』第二版の序に於いて、詩はたゞ平凡境に於ける强い感情の自然の流溢を平凡の言葉に調べ出だすに止まる。詩に特殊の辭法無く、特殊の人生無しと喝破し、且つ最も自然の景に愛着して、自己と自然物との區別をすら忘れんとするに至つた。自然を愛し自然の狀態に近づく。是れがワーヅワースの自然主義である。更に此の意を押し及ぼすときは、所謂イギリス自然主義の種々なる名目となる。ブランデス氏が言ふところ、「イギリスに於ける思想の傾向としての自然主義は、ワーヅワースに發現した、其狀態は凡て外に見はれたる自然を愛し、自然より得たる印象を著へ、動物、小兒、田舍人、精神上の貧者に對して誠愛なる事等であつた。」而してコールリッヂ。サウシーに及んではドイツ、ロマンチシズムの中身を自然主義で取り扱つた趣がある、之れを自然主義的ロマンチシズムと名づける。またスコットは歷史的自然主義、シェレーは根本的自然主義、バイロンは其の『ドン、ジュアン』に於いて自然主義の頂點を示したといふのがブランデス氏の論の大綱である。吾人は之れを以てたゞ如何に種々なる自然主義があり、また如何に多くの詩人、否殆んど凡ての詩人が自然主義であり得るかの例としたに過ぎぬ。ブランデス氏の此の論は必ずしも凡て首肯すべきものでは無い。同じやうな混雜はブリュンチェールのフランス文學史にも見える。彼れはフランスの自然主義者を數へのぼつて、ボーニー、ゴーチヤーにまで及んでゐる。併しながら若し之れを明瞭に區別せんとするときは、バルザック。フローベールすら既に自然主義と寫實主義との中間にさまようて、『批評史』の著者セーンツベリー氏をしてゾラの自然主義に於けるフローベールの寫實主義に於けるが如しと言はしめてゐる。要するに自然主義と、ふ語の範圍は、今日尙極めて茫漠たるを免

れぬ。

さて以上の如きルソー。ワーヅワース等が自然主義は、同時にまたロマンチシズムである。ルソーがフランス革命乃至ユーゴー等のロマンチシズムに根本の刺戟を與へたことは言ふまでも無く、今日フランスのロマンチシズムを說くものは必ず其の淵源を此の人に置く。ワーヅワースの場合また之れと同じく、イギリスの十九世紀文學はロマンチシズムで幕を開らく、而して其の第一登場者はワーヅワーに外ならぬ。ルソー。ワーヅワースの自然主義はスロマンチッズムの根本であるロマンチシズムの中には初めから自然主義を含蓄してゐた。但し之はロマンチシズムの主要なる一面に過ぎずして、ロマンチシズムそのものには他の要素も結合してゐる。前に掲げた六要素中の自然的といふこと、すなはち人間の巧僞に反して自然の醇撲に還るといふ傾向がやがて此の自然主義であると共に、情緒的といひ、理想的といひ中古的といふが如き諸要素も同時に存在してゐるのがロマンチシズムの特色である。斯くの如くにして吾人は實に明白なる自然主義の端緒をロマンチシズムの中に見出だす。ルソー。ワーヅワースは自然主義の先達であると同時にロマンチシズムの先達である。

然るに降つて十九世紀後半の自然主義に及べば、或は之れを以てロマンチシズムの反動と見るもの、或は之れを以てロマンチシズムの連續と見るもの、全く矛盾した見解をすら生ずるに至つた。是れは何故であらう。十九世紀初頭の自然主義と、十九世紀後半の自然主義との間には、如何なる曲折を藏するか。吾人の見るところを以てすれば、此の曲折はやがて自然主義がロマンチシズムの中から分家して本家を領するに至る經過である。ロマンチシズムを一家に譬ふれば、「自然的」、「情緒的」以下五六の兄弟が同じ屋の下に同居してゐた。然るに此等の兄弟中「自然的」と名のつくものと他の兄弟等とは性來が違ふ。彼等は不和であつた。而して「自然的」は自ら分家して、他からの來援を得て遂に自然主義といふいかめしい看板を上げ、本家を横領するに至つた。是れが此の主義の生じた次第である。

四

ロマンチシズム内の不和合から生ずる自然主義の變遷を說くに先だつて、廣く文藝全般の自然主義について一瞥するに、吾人は繪畫の上に其の最も早い發生を認める。こゝでも文學の場合と同じく自然を好んで題材とするといふだけの意味のものが十六世紀の前半、かの色彩卽生命とまで驚嘆せられたヴェニス派の泰斗チヽアノに於いて早く萠したと稱せられる。其の『殉敎者ピーター』の畫で暴風にどよめく樹木の背景が、背景の地位から進んで本景に入つてゐる例など繪畫界の趣味の漸く人事から自然物に廣まる端を示したもの、從つて歐洲に於ける自然畫若しくは景色畫の鼻祖は此の邊にあると評せられる（此の畫惜しいかな今は亡びたり）。其れより後十七世紀のオランダ派となり、十八世紀のイギリス派となつて、自然畫は益々發展した。中にも十八世紀の後半イギリスのゲーンスボローに至つて、近世景色畫の基礎が確立した。而して後コンステーブルとなり、ターナーとなり、またフランスに其の刺戟を及ぼしては、テオドール、ルソー乃至コロー。ミレー等、近世景色畫の大家が欝然として一時に競ひ起こつた。されば今若し自然を重なる題材にするものを自然主義と呼ぶ意味からすれば、繪畫上の自然主義は實に十六世紀のチヽアノ等から形を成して、前揭の近世諸家に及んだものと言はねばならぬ。けれども吾人がこゝで論究せんとする輓近の自然主義は、此の上に尙幾層の曲折を加へたるものである。例へば夫のアムプレッショニズム卽ち印象派と呼ばれる一派の畫風の如きが、此の曲折ある自然主義を代表する。恰も文學でワーズワース等の自然主義とゾラ等の自然主義とに單複の差ある如く、繪畫でもテオドール、ルソー。コロー等の自然主義とマネー。モネー等印象派の自然主義とに單複の差がある。

複雜なる近代自然主義の說に入るに先だつて、今一つ繪畫史上に見落とすべからざる事實は夫のジャンル卽ち世相畫の自然主義である。繪畫に於ける初期の自然主義は、

むしろ此の方を重要と見るべきかも知れぬ。是れ亦た端を十六世紀後半のイタリーに發して、畫家カラヴッジオ等の一群をナチュラリスチ(Naturalisti)すなはち自然派と呼んだ。其の主義とする所は專ら自然のまゝの事物を手本として人物を畫くにも常に活きた人間を、見るまゝに寫すといふにあつた。今日から見れば歴とした自然主義であると同時に、所謂ジャンル畫の風も是れから興つて、其の餘勢は遠く北方オランダに及び茲に十七世紀の前半を輝かす大繪畫を生んだ。それは卽ちレムブラントの世相畫肖像畫等である。レムブラントの世相畫がカラヴッジオ等の自然派に脈をつないでゐることは、繪畫史の證する所であるが、レムブラントを自然主義と斷定する說の一例は、ドイツのフォン、シュタイン(Von Stein)氏の『新美學階梯』にある。氏は先づ自然主義を以て、外形を細かに寫すよりも自然の全體を我が情趣の助けで描くにあるとし、レムブラントが『ラザルスの覺醒に於ける基督』の如きは、救世主の顏すら明瞭には見えず、其の姿勢また他のイタリー畫に多くある多く仰々しい興奮的動搖をば示さず、救世主を包む光線も殊さらに神祕の光燿を用ふるが如きことをせず、凡て自然にある光景を藉りて、而も其の感じを十分に表現し得た所が自然派たる所以であると論じた。此に到れば繪畫上の自然主義は、十七世紀に於いて早く十九世紀前半の文學が有する自然主義よりも一歩を進めてゐた趣がある。併しながら是れを後の印象派の自然主義に比べれば、尙そこに單純と複雜との距離を存すること勿論である。吾人の論は後の自然主義に入らねばならぬ。

五

ロマンチシズム內の自然主義が他の同居者と分離せざるを得ざる事實は、繪畫及び文學にわたつたイギリスの一主義、ラファエル前派の始終によつて最も明に證據だてられる。此の派の首領とも見るべきロゼチが言ふ所によれば、ラファエル前派はラファエル以前のイタリー繪畫の、全く傳習遺型に縛られることなく、自由に自然と相接し

て之れを師表とする風を慕ひ、彼等も一切の成型を棄てゝ直接に自然を師とし、微細に自然の形似を寫さんとすると同時に、一方には熱烈の情緒を此等の文藝に寓せしめんとする目的であつた。然るに此の情緒的と自然的といふ二面の目的の調和は不可能であつた。團結後僅かに兩三年ならずしてラファエル前派は早くも瓦解した。同志は各々其の傾くところに從つて自個本來の方向に特色を發揮して來た。中について最も著しいのはロゼチである。彼れは單獨となつて自家一個の傾向を追ひ始めるや否や、一歩々々其のいはゆる自然的方角から遠ざかつて、情緒的の方に奔つた。彼れの詩にも畫にも、殊さらに煩瑣な寫實的自然的描寫が挿入して無いではないが、それはむしろ邪魔にはなつても妙所とはならぬ。全體の特色は矢張り極めて濃厚な情緒的傾向にあつた。要するにラファエル前派は始めから分離すべき二面を強いて括り合はせた主張であつた爲、末に及んで相背き、ロゼチによつて其の一方たる情緒派が勝ち自然派が遺棄せられた。蓋し主觀的となり誇張的となるべき情緒派と、客觀的となるべき自然派とが相容れ難いのは自明の事である。

そこで自由主義は文學のゾラ、繪畫のモネー等によつて、實驗小說といひ印象派といふ旗印の下に擁立せられた。同時に今までの同伴者は凡て敵として斥けられた。情緒派は狂熱にまかせて事實を誇張するが故に自然を傷ひ、理想派は事實に選擇作爲を加へて原形を變ずるが故に自然を傷ふ。自我派は己れの欲念を先にするとによつて、中古派神祕派は時を隔て境を隔て事實の的確を失ふことによつて、凡て自然を傷ふ。自然主義は一切是等の繫累を振りすてゝ新しい所から出發せんとする文藝の樣式である。

さてロマンチシズムの中から分立した自然派は、直に世間から新しい應援者を得て之れと結合せんとした、其の第一に來たのが文藝上の寫實主義である。自然がロマンチシズムから分解するとは寫實主義と化合することであつた。啻に寫實主義のみでない、之れを手始めに文藝以外の思想界から、およそ己れに便宜な要素をば幾ばくとなく吸引し來たつて自然主義の成分にした。實驗科學然り、進化論然り、社會問題然

り、新しい自我、新しい理想、凡て獨立後の自然主義が周圍の大氣中から吸集する化合元素である。近代自然主義の複雜な所以は實にこゝに存する。此等はみな吾人が本論に於いて分解し彙類せんとする材料に外ならぬ。

六

吾人は成分論に入るに先だつて、寫實主義と自然主義との干繫を概說する必要を認める。蓋し寫實主義のみは、他の科學問題、社會問題等と異なり在來文藝上の一傾向でまた範圍の廣汎なもの、自然主義と近似したものと見えるからである。

寫實主義は元來理想主義と對應して、美學上に一群をなすべき文藝原理であつてロマンチシヂム、ネチュラリズム等はおのづから是れと別の一群と見られる。而して兩者は互に相交錯して存するを得べく、之れを文藝史上の傾向若しくは分類として見るときは、寫實主義の包容する所は自然主義よりも更に廣く、自然主義は寫實主義の一部とも見られる。また之れを哲理の上から言へば、一面に於いて相違したものであると共に、一面たとへば外に現はれた所を寫すといふが如き點に於いて一致する二原理である。

自然主義と寫實主義との哲理上の干繫は、一層精確に論ずれば、凡そ三樣の見解に歸する。第一は兩者を全然同一と見なすもの、第二は兩者間に程度の差ありとするもの、第三は兩者全く質を別にすると見るものである。蓋し美學上から此の問題を論ずるには文藝は何を如何にして具現すべきかといふ二重な根本論の結合したものとして取り扱はざるを得まい。而して是れまでの美學は專ら其の如何にしてといふ方法論の上から兩者を區別せんとしてゐる。何をといふ主題論の一邊が不十分なやうに思はれる。今先づ寫實といふ語について見んに、かの哲學者にして最も詩味ある美學を立てたシェリングは、之れを中世以後の理想主義に對してギリシヤ藝術の特色であるとした。而して哲學者ヘーゲルは同じギリシヤの藝術をクラシシズムに分類した。されば

此の兩家を突き合はすれば、クラシシズムと寫實主義とはギリシャ藝術に於いて合體する。クラシシズム卽寫實主義といふ奇異なる結論に歸する。けれども此の奇異なる結論に眞理があるのであらう。すなはちギリシャ藝術の特色は通例其の外形卽內容である所に存すると稱せられる。外形に見はれた所だけで滿足する、十分である。外形を毀ちさへせねば、それで美の目的は達せられる。勿論ギリシャにも事實此の以外の傾向はあるが、吾人がクラシカルといふ時の中央概念は外形本位といふことである。クラシシズム卽外形主義、而して外形を本位とする限りは、自然が現實に造り出だしてゐる者以上の標準は無い譯であるから、玆に外形に見はれた自然すなはち現實を最高模範として、藝術は之れを模寫する外は無い。自然の模寫、外形の模寫、是れがギリシャ人につきまとふ美學思想である。一二の學者が外形の模寫から內面の模寫といふ思想に一歩を轉じた事はあつても、大體に於いて外形的模寫論がギリシャ思想の特色で、同時に古代の模寫論と近代の模寫論との區分も此の點にある。外形の模寫、自然の模寫、之れを中心とする點に於いて、寫實主義はクラシシズムと通ずる。ヘーゲル、シェリングの一致は是れに外ならぬ。而して自然主義が寫實主義と合致すると見るものもまた此の點に立脚する。美學者ハルトマンは、シャスレル。カリエール等を論ずる條に於いても、假象說の立場から、文藝上の現實自然といふことを難じてゐるが、それらの場合、自然主義と寫實主義の間に明瞭な區別を立てゝ居らぬ。またベルリン大學のデソア氏（M. Dessoir）は、其の近著『美學及一般藝術學』に於いて、「自然主義は文藝卽現實と見、諸種の理想主義は文藝を現實よりもより多くなりと見、形式主義、幻像主義、感覺主義は文藝を現實よりもより少なし」と見ると言つて、暗に自然主義と寫實主義とを同義に解してゐる。其の他にも此の種の說は多い。

七　文藝上の自然主義

自然主義と寫實主義とを程度の差とする第二の見解は、描意法を如何に多く客觀化するかといふ論に歸する、此の說では、寫實主義はなほ全く自然のまゝを寫す度が足らず私意巧僞の跡が多い。自然主義は一層之れを客觀化して、寫眞の種板が事象の影を其のまゝ印するやうにならなければ止まぬ。技巧細工の痕迹を全然消し去らうといふに落ちつく。たとへば嘗ても吾人の彫刻論に引いたドイツの美術史家ローセンベルグ氏が、寫實主義は描寫の上になほ畵家の圖取、布置、彩色、明暗等の特權を棄てぬもの、自然主義は全く自然に無條件の降服をなして、偶然でも無形式でも無秩序でも構はず自然の來るがまゝを寫すものとした說の如き、若しくはチュービンゲンの敎授コンラッド、ランゲ氏（K. Lange）が其の『寫術の本體』に說くところ、理想主義は自然の理想を思索して文藝の中に据えつけんとし、自然主義は自然を模して眞僞を分かち難きまでに至らんとし、而して此の兩極端の間に立つ第三者は主寫實義であるとした論の如き、皆自然主義を以て最も極端なる自然の模寫と見なし、寫實主義を以てなほ大に技巧の殘留した穩和な樣式と見る意である。つまり理想主義に最も多く人爲があつて、其の漸次遞減し行く度合に從つて寫實主義となり自然主義となるといふのである。

最後に自然主義と寫實主義とは性質の差であるといふ說によると、寫實主義が自然の模寫たるに反して自然主義は單に自然といふ以上に或る條件を加へたものを、單に模寫といふ以上の或る方法で寫すものである。前に引いたシュタイン氏の說では現實から受けた印銘を增減する所なく再現せんとする試みは、寫實主義の新たなる轉化に外ならぬ、自然主義は其れと違ひ自然を一全圓として描出する、其の方法は客觀から刺戟せられた主觀の傾向すなはち情趣によつて其の自然を全圓の形に充實せしむるにある。部分の細寫の如きは自然主義の本來でなくしてただ伴起現象たるに過ぎぬと。一全圓體の自然を寫す、主觀の情趣で大體を寫す、細寫を要せぬ。是れが自然主義の寫實主義に違ふ所である。全圓といふことが加はり、情趣といふ事が加はつて、性質

を變じたものになるではないか。

自然主義と寫實主義との相違は以上の如く種々に解するを得るとして、其の第一說、兩者を全然同一と見る論は少なくとも近代文藝の活きた事實を目睹するものゝ首肯し得ざる所であらう。第二第三の程度說と性質說とは、事實双方とも眞理である。其の理は後段自然主義の成分を研究する條においておのづから說明せられると信ずる。

八

十九世紀後半の自然主義はフランスを中心とする。併しながら其の何年を始めとし何年を終りとするかは明かでない。殊に其の終結に關しては、或は已に反動期に入つて自然主義は過去のものと成り了つた如くいふものもあれば、事實に於いて今なほ歐洲文藝の生命であると如く見るものもある。之れが起原については、吾人はド、ミル氏(A. B. de Mlle)の『十九世紀』文學史が凡そ千六百六十年代を始めとする說を假用する。ロマンチシズムの代表ユーゴーの勢力も此の頃を起點として反動の氣勢を示したらしく、フローベールの出世作『マダム、ボヴリー』の出たのも矢張り此の前後である。續いて千八百七十年代に及べば、ゾラがフローベール。ドーデー。ゴンクール兄弟。ツールゲニエフ等と謀つて暗に自然主義の會を興したのも其の前後であつたと傳へられ、また大作『ルーゴン、マカール』の連篇に書いたやうな觀察に取りかゝつたのも其れより遠からず。一方繪畫界では最近自然主義と見るべき印象派の始めも此の頃である。而して千八百八十年代には早くも隆盛の頂點に達して、反動を惹き起こしたと稱せられる。自然主義、就中ゾライズムに對して逸早く反對の陣を張つたのはブリュンチェールで、千八百七十五年頃からである。引きつづいてルメイトル(J. Lemaître)フランス(A. France)等の重なる批評家も反對の側に立つた。作の上での對照は、ブールゼー(P. Bourget)氏の小說が恰も此の反動期以後すなはち千八百八十五年頃から出はじめてゾラ等の暗澹たる下層の悲慘を描くに對し、好んで上層豪奢の社會の歡樂

を描いた。またユイスマン（J. K. Huysmans）も千八百九十五年の『アン、ルート』以後は自然主義中に漸次神祕主義、標象主義の味を加へて來たと見られる。されば要するに千八百八十年代から千九百年代迄を引きくるめて自然主義に對する反動時代と呼ぶものもある。併し自然主義の反動といふことに關しては、少なからぬ疑問のあることを忘れてはならぬ。先づ其の自然主義者と見なされる文人にいつても確たることの言へぬ所以は前にも述べたが、詩人としてのボードレール（C. Baudelaire）と小說家としてのゾラとは一般に其の最好代表者と見なされる。今ゾラの作品について其の年代を考へて見ると、所謂反動期以後が却つて『ルーゴン、マカール』の大作などの盛んに出た時で、言はば自然主義は未だ其の代表作を出さぬ内に反動の聲を揚げられた氣味である。此等は反動で無くしてむしろ反對者の多い中を十九世紀の末まで濶步して來たといふ概ではないかただ古來ゾラ等の自然主義ほど八面攻擊の矢面にさらされた主義は少ない爲め、利弊長短が明かに見えすくといふ事、及び歐洲全般の思想界が科學主義の過重に對して反動の崩しを示し來たつた、其の餘波が多少は自然主義の上にも影響してゐるといふ事だけは明白な事實であらう。其の以上には、自然主義は未だ必ずしも過去のものとなり切つて居らぬ。論より證據は、歐洲近時の小說壇に、全く自然主義の反對側に立ち得た大作が何程あるか。之れを劇の上に見ても、劇界の自然主義はドイツを最とすべきであらうが、其のドイツに自然主義の入つたのは實にフランスで反動期といはれる千八百八十年代ではないか。而して間もなく玆にも反動として標象主義、神祕主義がハウプトマンやズーダーマンの劇に入つて來たといふ。けれども千八百九十六年に神祕的な『沈鐘』を書いたハウプトマンは千八百九十九年に自然的な『駁者ヘンセル』を書いてゐる。自然派劇の本家たるイブセンにすら、晩年の作には神祕主義、標象主義があるといふ。併しイブセンが作中の標象神祕の味は必ずしも晩年に限らず『ロスマースホルム』の如き自然主義の作にすら神祕の味はある。『幽靈』なども同樣である。是れは必ずしも自然主義に對する反動ではあるまい。要

は、自然主義といへば直に之れを以てあらゆる趣味を除外するものと考へるの弊にだに陷らねばよい。自然主義の眞の運命は、歐洲に於いてすら寧ろ今後に決せらるべきものでは無いか。

九

自然主義そのものゝ研究は之れを構成上及び價値上の二面に分かち得る。吾人は先づ其の構成論を概說しやう。

自然主義の構成は二點から見られる。第一は描寫の方法態度、第二は描寫の目的題材である。

第一、描寫の方法態度から自然主義を分解する時は、純客觀的と主觀挿入的との二つになる。言ひかへれば寫實的と說明的、若しくは本來自然主義と印象派的自然主義に外ならぬ。自然を寫すにあたつて、出來るだけ客觀のまゝを眞寫し細寫しやう。此時の描寫方法は明鏡の事象を射映するが如き物でなくてはならぬ、卽ち純客觀的、純寫實的であるを要する、是が本來の自然主義であるといふのが一方である。蓋し最も普通な解釋である。フローベールが「藝術と作者とは全く無共通なり」といつた事、批評家テーン（H. A. Taine）が自然の再現を極意として作者の個人性を一切其の蔭に潛ましめんといつた事、ブリュンチェールが自然主義の無感情性（アムパシピリテー）無人格性（アムパーソンネル）と評した事、ゾラが其の『實驗小說論』で生理學が生物を試驗するやうに、小說も事實を實驗し解剖し報告すると說いた事、等が皆同じ意を有する。他の一方、印象派的自然主義の主張は、結局一旦斥けた作家の主觀を或る方式で再び挿入しやうといふのである。作家が一旦自然の事象を感受して、自分の印象に纏めてそつくり再現しやうといふに歸する。前に擧げたシュタイン氏の情趣說の如きが卽ち此の論に該當する。また繪畫上の印象派が自然に忠ならんとするの極、自家の印銘を主とし漠然たる大體の自然を描いて、寫眞的の細寫を避けるの意も是れに外なら

ぬ。ドイツでは更に之れを徹底主義（Konsequente Naturalismus）と呼び千八百八十七年頃から抒情詩人ホルツ（Arno Holz）氏等が首唱してハウプトマン氏の劇『日の出前』に實行せられたと稱する者である。同國の批評家バーテルス（A. Bartels）氏の言を假りて言へば、此の主義はゾラ等の報告的自然主義（Reporter-Naturalismus）に對して、感覺界すなはち外物の印銘及びそれから生ずる情趣上の印銘を兩つながら併せて蓄音機的に再現せんとする印象派的自然主義である。内外徹底せざれば休まざらんとする自然主義である。

尙以上の二方法を對比して說いたものでは、イギリスの外交官文學者ベアリング氏（M. Baring）が第九版の『エンサイクロピデヤ、ブリタニカ』に述べた所などが最も參考になる。其の意、自然派には二派あつて、一は印象派（Impressionists）といふ、自然を說明するを目的とし、自然から受けた印象を以て自家の人格を表はす手段とする。他は本來自然主義（Naturalism proper）といふ、絕對に客觀的なる現實を得るを目的とする。ゴンクール兄弟等の作は前者に屬しゾラ。モーパッサン等の作は後者に屬すると。

斯くの如き描寫法上の區別は、事實に於いても存すること明かで、而も二つながら自然主義であるとすれば、理論上の解決は何うなるか。吾人の見る所を以てすれば此の兩面は作者が筆を濕し、刷毛を染めて紙面に蒞むときの態度卽ち覺悟、卽ち氣持によつて統一せられるものである。一は偏に外來の自然を歪まず曲らず映寫し出さんとするが故に、其の態度氣持は消極的となる。出來ることなら無念無想全く謙虛な心で其の事物を迎へ且つ送り出したい。こゝから排技巧、排主觀の傾向が生ずる。併し事實に於いて是れは或る度以上行はれるものでない。空虛な心には何等かの思念が湧いて來る。そこで此の思念を邪道に入らしめぬため、知慧細巧に墮ちないで而も純粹無垢な或る者を拈出せんとするが如き態度で、客觀の事象に差し向ける。又は謙虛にして鏡のやうな我が心の中に事象を映じて、映じたまゝじつと息を殺して其の事象の展開

するのを待つが如き氣持になる。積極的態度である。消極的態度が勝つときは純客觀の自然主義を產し、積極的態度が勝つときは主觀挿入の自然主義を產する。けれども極致は二者の調和にある。

十

既に自然主義に積極的態度を許せば、其の積極的思念の行止りは何んであらうかといふ問題が、必ず起こらざるを得ない。卽ち自然主義の目的論が生ずる。思ふに自然主義が寫實主義乃至理想主義と違ふ根本は實にこゝに存する。寫實主義は現實を寫すを目的とするといひ理想主義は理想を寫すを目的とするといふ。然るに自然主義はひとり眞（Truth）を寫すといふ。眞といふ語は自然主義の生命でありモットーである。自然主義から言はすれば理想といひ現實といふ語はまだ淺い、第二義の役にしか立たぬ。なまなか理想といふが爲に、狹隘な個人の撰擇技巧を自然に加へて、厭惡輕蔑の念を生ぜしめる。まなまか現實といふが爲に、外形に拘泥して深奧な自然の味に觸れ得ない。此等の上に立つて、第一義の標的となるものは眞に外ならぬ。文藝の目的は眞を寫すにある。吾人が積極的態度で何物をか恍惚する。其の惚恍の目的は眞と理ふことにあつたのである。ゾラが世の攻擊に對して『ラッソモア』の序に辯じた所は、曰はく「我が作我れを辯護すべし。我が書は「眞の書也」と。ラスキンが其の『近代畫家中で盛に摸寫主義を詆譏して、自然の眞（Truth of Nature）を寫すのが藝術の目的であるとしたのも、たとい其の眞といふ語の解釋は異なつても、立意に於いて自然主義の根本要件と相合する。

然らば斯やうな第一義の眞は、たゞ深い高いといふだけで、明かに手に取ることは出來ぬであらうか。是れと第二義の理想、現實などいふものとの干繫は如何、此れに對する答がやがて自然主義の題材論である。たゞ自然の眞といふのみでは物足らぬ、不滿足である。そこで之れを割り碎いて、現に手に觸れ得る第二義のものに化し、以て製

作上の實用に供せんとする。此に至つて自然主義は種々の變態を生じて來る。其の圖は略々下の如きものであらう。

- 構成論
  - 描寫の方法態度
    - 純客觀的—寫實的—本來自然主義
    - 主觀挿入的—說明的—印象派自然主義
    - 消極的態度
    - 積極的態度
    - 統一目的—眞
  - 描寫の目的題材—眞
    - 社會問題—個人解放—根本道德問題等
    - 科學
      - 心理學
      - 生理學
      - 進化論
    - 現實
      - 赤裸々—獸性—醜
      - 肉感的
      - 卑近的
      - 平凡的
      - 自然物的
- 價値論——眞といふ目的の美學的價値如何

十一

眞といふ最後の目的が手の屆く所に來れば、碎けてさま〴〵の形になる。作家は手にく〳〵之れを拾ひ取つて作の題材とする。言はゞ是れによつて彼等の注視點を定めんとする。湧き來たる一切の思念の流れを之れに捌けさせんとするのである。目の据えどころ、氣の集めどころを此所に求める。從つて斯かる目的は眞面目でなくてはならぬ、飽くまで眞實でなくてはならぬ、何時までも人の心を占有するのでなくてはならぬ。

さて上に表示した諸目的中、或は其の一を援いて題材とし、或は其の二、三を兼有して題材とする。固より是等は、自然主義のみが題材とするものとは限らぬが最も多く自然主義と聯結するものである。自然主義が近代的、傳習破壞的である結果は個人主義と連なり社會問題と連なるに至るは當然の順序であらう。また自然主義が自然とい

ふ事から現實に連なり科學に連なるも已むを得ぬ干繋である。ゾラが『ルーゴン、マカール』二十篇の小説は、相補うて一の系統遺傳論であるとは言ふまでもない。此の意味で彼れは進化論の眞理を目的とした。また彼れの『ラッソモア』は男女が飲酒、色欲、貧困等に圍まれて如何に墮落し死亡し行くかを語るを目的としてゐる。社會問題である。又彼れの作には病的生理現象を説明するを目的としてゐる樣に見えるものがある。又彼れの作は人間を赤裸々にして全く文明の衣を剝ぎ去つた原始性、野獸性の者として取り扱つてゐる所が多い。其の結果道德感上の醜を描いて怪まぬ。肉感的な所も日常卑近の境を材とする所も景色動植物器具家屋等の自然物を細寫するに筆を吝まぬ所も皆此の條件に合期する。此の意味からゾラは歐洲の文學史中最好の自然主義代表者である。

現實を現實として最も眞に寫さんとするには一切人工虛飾の分子を擺脫するを要する、赤裸々の人間、野性、醜、描いてこゝに至れば、最も眞に近づく、最も痛切である。ゾラの所謂人間の證券(Document humain)は斯くして始めて的確に讀まれる。肉感はすなはち實際哲學が證して最も確實な知識とするもの、之に訴へる現實は最も眞なるべき理である。肉感に近づくだけ、其の刺戟は眞實になり、隨つて痛切になる。卑近の境は最も多くの人が最も多く實驗する現實であるし、自然物は最も明確で且つ虛僞なき撲直な現實である。自然主義は現實を斯やうに考へる。

繪畫の印象派は、アカデミー派が構圖に重きを置くに反抗して、專ら色彩に工風を凝らす色彩は圖柄よりも概して肉感的である。色によつて直に感じを傳へんとする、また彼等は好んで卑近な醜惡な畫題を描く。また人事よりも自然物を多く描く。凡て彼等が自然派たる所以である。

イブセンの劇は殆ど凡て社會問題を取扱つてゐる。社會劇又は問題劇といはるゝ所以である。深いものは直に個人性問題に入り、根本道德問題に入る。また彼れの作にも遺傳論の影が見える。『幽靈』のオスワルドはゾラの書きさうな病的遺傳をあらは

し、『ロスマースホルム』のロスマーは深い性格上の遺傳をあらはしてゐる。

ドイツの自然主義については、コーア氏(Coar)の名著『十九世紀ドイツ文學研究』が最も巧みに其の間の消息を說いてゐる。其の要に曰はく、千八百九十年頃の若い文學者等は相率て自然主義に赴き、人生の精確なる寫像といふことを殊に精確といふことに力を入れて主張した。併し心あるものは、寫眞や機械のやうに直寫することが文學だとは信じなかつた。又事實を見ても、直寫を主張するものすら、我れの感動する部分の重要なことを忘れなかつた。彼等の說は根本に一の希望を含んでゐた。それは事實を寫した底から、其の事實の超越的意義卽ち理想を開發せしめんとする望であつた。例へばズーダーマン。ハウプトマン。ハルベ等の思ひ切つて寫實的な作『ゾドム』『日の出前』『自由の戀』などを見ても、之れはよく分かる。つまり背景に社會的個人性の全現といふ要求が隱れてゐる。自然主義の二努力は社會を定義し個人を解放するといふことであつた。理想とは之れを指す。自然主義の目的は理想にあつたのだ。此とすれば何か。之れを研究することによつて自然主義の價値論が定まる。是れも茲には省いて他日を期する。（明治四十一年一月）

の社會的個人の顯現といふことがフルダをもヴェルデンブルッフをも兜を脫がせた。社會主義の極端なものが自然主義から出るのも此のゆゑであると。

吾人の言を以てすれば、此の透徹した見は、自然主義が理想主義に移ることを證するよりも、寧ろ以て自然主義そのものが如何に深いところに根底を有してゐるかを證するものである。自然主義は決して單純なものではない。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

前來の敍述で吾人の自然主義構成論は大體を了へた。たゞ自然主義が後の神祕主義標象主義理想主義等と交涉する次第を說くの餘地が無かつた。又眞といふ自然主義最後の目的が、美學上如何なる地位を占むべきか。自然主義の最後の價値を定むるには、此上に更に何物かの違つた名が必要ではないか。それは現實でも理想でも眞でも無い

人生觀上の自然主義を論ず

——『近代文藝の研究』の序に代へて——

一

私は今茲に自分の最近兩三年に亙つた藝術論を總括し、思想に一段落をつけやうとするに當つて、之れに人生觀論を裏づけする必要を感じた。

けれども人生觀論とは畢竟何であらう。人生の中樞意義は言ふまでもなく實行である。人生觀は卽ち實行的人生の目的と見えるもの、總指揮と見えるものに識到した觀念で無いか。所謂實行的人生の理想又は歸結を標榜する事では無いか。若しさうであるなら、私にはまだ人生觀を論ずる資格は無い。何故ならば、私の實行的人生に對する現下の實情は、何等の明確な理想をも歸結をも認め得て居ないからである。人生の目的は何であらうか。我等が生の理想とすべきものは何であらうか。少しも分かつて居ない。

勿論斯やうな問題に關した學問も一通りはした、自分の職業上からも、斯やうな學問には斷えず携はつて居る。其の結果として理論の上では、あゝかかうかと纏まりのつく樣な事も言ひ得る。又過去の私が經歷と言つても、十一二歲の頃から既に父母の手を離れて、專門教育に入る迄の間、凡て自ら世波と鬪はざるを得ない境遇に居て、それから學窓の三四年が思ひ切つた貧書生、學窓を出てからが生活難と世路難といふ順序であるから、切に人生を想ふ機緣の無い生涯でも無い。然も尙是等のものが眞に私の血と肉とに觸れるやうな、何等かの解決を齎らし來たつたか。四十の坂に近づかんとして隙間だらけの自分の心を顧みると、人生觀どころの騷ぎではない。我が心は依然として空虛な廢屋のやうで、一時凌ぎの手入れに、床の拔けたのや屋根の漏るのを防いでゐる。繼ぎはぎの一時凌ぎ、是れが正しく私の實行生活の現狀である。之れを

想ふと、今さらのやうに Armer Thor の嘆が眞實であることを感ずる。

二

私は何うしたら善からうか。私は一體何うして日々を送つて居るか。全くの其の日暮し、其の時勝負でやつて居るのだらうか。强ちさうでも無いやうである。事實、自分の日常生活を支配してゐるものは、やつぱり陳い〳〵普通道德に外ならない。自分の過去現在の行爲を振かへて見ると、一歩も其の外に出ては居ない。それで以て、決して普通道德が最好最上のものだとは信じ得ない。或部分は道理だとも思ふが、或部分は明に他人の死殼の中へ活きた人の血を盛らうとする不法の所爲だと思ふ。道理だと思ふ部分も、結局は半面の道理たるに過ぎないから、矛盾した他の半面も同じやうに眞理だと思ふ。斯ういふ次第で心内には一も確固不動の根抵が生じない。不平もある、反抗もある、冷笑もある。疑惑もある、絶望もある。それで尙思ひ切つて之れを蹂躪する勇氣は無い。つまり愚圖々々して一種の因襲力に引きずられて行く。之れを考へると、自分等の實行生活が有してゐる最後の筌蹄は、たゞ一語「諦め」といふことに過ぎない。其の諦めもほんの上つ面のもので、衷心に存する不平や疑惑を拭ひ去る力のあるものでは無い。しかたが無いからといふ諦めである。

三

此所まで回顧して來て、何時も思ひ惱むのは其の奥である。何が自分をして諦めさせるのだらう。私に取つてはそれが神の力でも信仰の力でも無くして、實に自分の知識の力である。若し自ら僭して聰明といふことを許されるなら、聰明なからである。假に現在普通の道德を私が何等かの點で踏み破るとする。私には其の後の事が氣づかはれてならない。それが有形無形の自分の存在に非常の危險を持ち來たす。或は百年千年の後には、其の方が一層幸福な生存狀態を形づくるかも知れないが、少なくとも

すぐ次の將來に於ける自己の生といふものが威嚇される。單身の場合はまだよいが、同じ自己でも、妻と擴がり子と擴がつた場合には、愈々それが心苦しくなる。つまり名といひ、利といひ、身といひ、家といふ、無形、有形、單純、複雜の別はあつても、詮ずる所自己の生といふ中心意義を離れては、道德も最後の一石に徹しない。直觀道學はそれを打ち消して利己以上の發足點を說かうけれども、自分等の知識は、何うも右の事實を否定するに忍びない。却つて否定するものゝ心事が疑はれてならない。（衆生濟度の方便なら構はないが）傍に千萬卷の經典を積んでも、自分の知識は「道德の底に自己あり」といふ一言で之れを斥ける勇氣を持つてゐる。而して此の知識が私をして普通道德の前に諦めをつけさせる、爲かたが無いと思はせる。それ以上、自分に取つて普通道德は何等崇高の意義をも有しない。一種の方便經に過ぎない。

まだ一つある。私は寧ろ情負けをする性質である。先方の事情にすぐ安値な同情を寄せて、氣の毒だ、かわいさうだと思ふ。それが動機で普通道德の道を歩んで居る場合も多い。そして是れが本當の道德だとも思つた。併し段々種々の世故に遭遇すると共に、翻つて考へると、其の同情も、あらゆる意味で自分に近いものだけ濃厚になるのがたしかな事實である。して見ると是れも餘り大きな事は言へなくなる。同情する自分と同情される他者との矛盾が、死ぬか生きるかの境まで來ると、そろ〳〵本體を暴露して來はしないか。

先づ多くの場合に自分が生きる。よつぽど濃密の關係で自分と他者と轉倒してゐるくらゐの場合に、言はゞ病的に自分が死ぬる。又は極局身後の不名譽の苦痛といふやうなものを想像して自分が死ぬこともある。所詮同情の底にも自己はあるやうに思はれてならない。斯んな風で同情道德の色彩も變つて了つた。

更に一つは、義務とか理想とかの爲に、人間が機械となる場合がある。唯何とはなしに、爲なくてはならないやうに思つて爲る、たゞ一念其の事が成し遂げたくてする斯んな形で普通道德に貢献する場合がある。私も正しく其の通りの事をしてゐる。併

し是ればかりでは地球がいやでも西から東に轉ずるのと少しも違つた所はない、徹した心持が無い、生きて居ない、不滿足である。そこで色々考へて見ると、何うも矢張り其の底に撞きあたるものは神でも眞理でもなくして、自己といふ一石であるやうに思はれる。此の意識の消し難いが爲に、義務道德、理想道德の神聖の上にも、知識は其の皮肉な疑ひを加へるに躊躇しない、曰はく、結局は自己の生を愛する心の變形でないかと。

斯やうにして、私の知識は普通道德を一の諦めとして成就させる。けれども同時に其の源が神祕なものでも莊嚴なものでもなくなつて、第一義眞理の魅力を失ひ、崇拜にも憧憬にも當たらなくなつて了ふ。

四

知識で押して行けば普通道德が一の方便になると共に、其の根底に自己の生を愛するといふ積極的な目標が見えて來る。世間には此の目標を目障りだと言つて見まいとするものもあるが、自分には何うしても見えると言ふ方が正直としか思はれない。從つて今のところ、若し私の知識で人生の理想標傍といふやうなものを立てよといふなら、先づ差しあたり是れを持つて來る。「人生の理想は自愛である。自己の生である。自分の實行的生活を導いて來たものは事實この外に無かつた。無論實行の瞬間はそんな事を思ふと限るものでないから、唯傳習の善惡觀念でやつて居ることが多い。けれどもそれは盲目の道德、醒めない道德たるに過ぎぬ。開眼して見れば、顏を出して來るものは神でも佛でも無くして自己である。だから自己が卽ち神である佛である。」

併し斯んな事は畢竟ずるに私の知識の屆く限りで造り上げた假の人生觀たるに過ぎない。是れが分かつた爲に私の實行的生活が變動する譯でも何でもない。のみならず現に其の知識みづからが、まだ此の上幾らでも難解の疑問を提出して休まない。自己といふ其の內容は何と何とだ。自己の生を追うた行止りは何うなるのだ。殊に困るの

は、知識で納得の行く自己道德といふものが、實は何うしてもまだ崇高莊嚴といふやうな仰ぎ見られる感情を私の心に催起しない。陳い習慣の拔殼かも知れないが、普通道德を盲目的に追うて居る間は時として是れに似たやうな感じの伴ふこともあつた。あの情味が新開眼の自己道德には伴はない。要するに新舊何れに就くも、實行的人生の理想の神聖とか崇高とかいふ感じは消え去つて、一面灰色の天地が果てしもなく眼前に横たはる。讃仰、憧憬の對當物が無くなつて、幻の華の消えた心地である。私の本心の一側は、たしかに此の事實に對して不滿足を唱へる。もつと端的に我等の實行道德を突き動かす力が欲しい、而も其の力は直下に心眼の底に徹するもので、同時に讃仰し羅拜するに十分な情味を有するものであつて欲しい。私は此の事實を我等の第一義欲または宗教欲の發動とも名づけやう。或は斯んなことを思ふのが既に陳い夢に囚へられてゐるのかも知れない。灰色の天地に灰色の心で、冷たい、物凄い、荒んだ生を送つて行くのが人生の本旨かとも思つて見る。けれども今日までの私はまだ何うもそれだけの思ひ切りもつかぬ。一方には赤い血の色や青い空の色も欲しいといふ氣持が滅しない。幾ら知識を驅使して見ても此の矛盾は殘る。つまり私は一方には或意味での宗教を觀て居ると共に、一方は極めて散文的な、方便的な人生を觀て居る。此の兩端にさまよつて不定不安の生を營みながら自分でも不滿足だらけで過ごして行く。

此の點から考へると、世の一人生觀に歸命して何等の疑惑をも感ぜずに行き得る人は幸福である。況してそれを他人に宣傳するまでになつた人は、愈々幸福である。私には凡てそれ等のものが信ぜられず、あらが見えるやうに思はれてならない。或るものは持つて廻つた揑造物だ、或るものは虛僞矯飾の申譯だ、或るものは楯の半面に過ぎず、或るものは唯の空華幻象に過ぎない。自分の知識が白い光を其の上に投げると是等のものは皆其の粉塗してゐた色を失つて了ふ、散文化し方便化して了ふ。それを知らぬ振に取りつくろつて、自分でも其の夢に醉つて、世と跂を合はせて行くことは、私には段々堪へ難くなつて來た。自分の作つた人生觀さへ自分で信ずることの出來な

い私であるから、況して他人の立てた人生觀など、其のまゝ受け入れることの出來るものは一つもない。何ものをも批評するのが先になつて、信ずることが出來ない、讃仰することが出來ない。信じ得る人の心は平和であらうが、批評する人の心は何時も遑々としてゐる。茲に至つて私は自分の强梁な知識そのものを呪ひたくなる。

五

自分は何等の徹底した人生觀をも持つて居ない。あらゆる既存の人生觀は我が知識の前に其の信仰價を失ふ。呪ふべきは我が知識であるとも思ふが、しかたがない。何等かの威力が迫つて來て、私のこの知識を征服して呉れたら、私は始めて信じ得るの幸福に入るであらう。

されば現下の私は一定の人生觀論を立てるに堪へない。今はむしろ疑惑不定の有りのまゝを懺悔するに適してゐる。そこまでが眞實であつて、其の先は造り物になる恐がある。而して此の私を標準にして世間を見渡すと、世間の人生觀を論ずる人々も、皆私と似たり寄つたりの邊に居るのではないかと猜せられる。若しさうなら、世を擧げて懺悔の時代なのかも知れぬ。虛僞を去り矯飾を忘れて、痛切に自家の現狀を見よ、見て而して之れを眞摯に告白せよ。此の以上適當な題言は今の世に無いのでないか。此の意味で今は懺悔の時代である。或は人間は永久に亙つて懺悔の時代以上に超越するを得ないものかも知れぬ。

以上を私が現在に於いて爲し得る人生觀論の程度であるとすれば、そこに藝術上の所謂自然主義と尠なからぬ契機のあることを認める。けれども藝術上の自然主義はもつと廣い。また藝術は必しも直接に我等の實行生活を指揮し整理する活動でもない。

六

餘論として茲に一言を要するのは、史上にいはゆる人生觀上の自然主義である。過

去に於いて明に斯やうな名辭を用ひたのは、私の知る限りでは、Professor W. H. Hudson のルーソー論に Naturalism in Life と言つてゐるのなどが其の最近の例である。是れは言ふまでもなくルーソーの「自然に還れ」「自然の人」「反文明」「反人巧」の人生觀に冠した名であるが、若し之れを定限とすれば、さやうな人生觀上の自然主義は、私に取つては疑惑内の一事實たるに止つて、解決の全部とはならない。

ニィチェが人生觀の、本能論の半面に見はれた思想も一種の自然主義と見る人がある。それなら是れもまたルーソーの場合と同じく、我が疑惑内の一事實を提示するに過ぎないのは言ふを待たぬ。

ロシアの作者、ツルゲネフやトルストイに見はれた虛無思想を以て最もよく人生觀上の自然主義に當たるものと見る人もある。虛無思想の中心は、ツルゲネフの作が定義する所によれば、あらゆるものを信ぜず、あらゆる權威に抗爭する點に存する。併し此の思想を一の人生觀として取り上げる時、そこに當然消極か積極かといふ問題が起こり來たらざるを得ない事は、既にヨーロッパの論者が言つて居る通りである。而して其の當然の解釋が、信ぜず從はずを以て單なる現狀の告白とせず、進んで之れを積極の理想とするに傾くとすれば、是れも私には疑惑圈内の一要素となるばかりで、最後の解決とはならない。

斯くの如くして所謂人生觀上の自然主義も、私には疑ひの一面たるに過ぎない。

（明治四十二年五月）

懷疑と告白

上　本論の背景

私は今此の文を先達て公にした「人生觀上の自然主義を論ず」(『近代文藝之研究』序)といふ一文の續きの積りで書く。併し何の必要があつて私は其の續きを書くのであちうか。ちよつと考へて見たい。

私に取つては無論斯うして書く文章が一の藝術である。從つて之れを書く因緣を考へるのは、やがて少なくとも私一個の上で藝術發生の實情を研究することになる。卽ち私の態度が依然として一の研究者といふ埒内にあることをば免れない。一體何ぜ研

究だの考へるだのといふ事をやるのだらう。昔の懷疑者流は、判斷といふ事を拒絕すると同時に研究だの知識だの考へるだのといふ事をも拒絕しやうとした。從つて學問めいたことや書物めいたものをば遺さないのが多かつたといふ。成程之れも一理窟だが、併し今日の我々から言はすれば一向に斯う言ひ切るのも矢張り矛盾である。第一それで事實我々の研究だの、考へだの、判斷だのがばつたり息んで了へば申分は無いがさうは行かない。ソフ井スツの後にソクラテース以下の哲學が起つたり、後の懷疑派につゞいてプロチーヌス以後近世に及ぶまでの大哲學が起こつたりした以上、今日の我々が眼には、此等の事實が一方に立つて物を言ふ。それのみでなく、私みづからの本心に振りかへつて見て、今のところまだ明白に研究とか考へるとかいふ事に根本の要求がある。事物に觸れるごとに必ず何等かの程度でそれを考へなければ不滿足で氣がゝりで仕方がないのだから是非が無い。斯う思ふと、結局私は私みづからの根本要求の爲に研究考察をやるのである。是れをやらなければ自分に滿足が出來ないからで

ある。昔の學者が何うの、現代の誰々が斯うのと言ふのは、それこそたゞ自分の根本要求の後援を、其處に求めるに過ぎない。

自分の根本要求でたゞ考へたいから考へると言へば、一種の道樂とも解せられるが、道樂と解せられるのは厭だ。厭な理由といふのは、道樂といふ語の中には考へても考へなくても、其の人の生活には無關係だからといふ意が籠る。斯う思はれるのが厭だからである。事實自分に取つては、考察といふ經過の無い觀念は、それを推し進めて次の實行過程に移すのが不安心である。色々の意味で不安心である。現に此の論文を書きつゝある間も、直に本文に入ればよいのに不圖思ひついて、全體書くといひ考へるといふことからして極めてかゝらねば、跡の仕事は皆地ならしのしてない普請のやうなものぢやないかと考へ出す。さうなると是非何とか此の問題を片づけて置かねば、氣がゝりで跡が心地よく進まない。此のまゝ抛つて置いて、縱し自分は我慢しても世間から突つ込まれたら、忽ち自分の立場は崩れて了ふ。自衞の上から言つても是れではならないといふ氣になる。つまり私の實生活を沮碍せられるからである。斯う說明して來ると、玆までは事實の告白に過ぎない、極平凡な事實の告白に過ぎない。と同時に動かすべからざる眞實である。自分自身の生の爲めに研究もすれば考へもする。けれ共ちやうど男女の愛が子孫を遺すための方便として與へられた本能であると解說せられる如く、自愛本能の一つとして現はれた研究本能考察本能も、結局はそれで以て漸次に天地人生の眞理を闡明させやうといふ造化の計畫なのかも知れない。併し此所まで來るともう事實の告白でなくなる。事實の推斷である、哲學である。從つて其の通りかも知れないが又さうでないかも知れない。人さまゞの解說を容れ得る所以である。眞理の爲に研究するといふのと自分の爲に研究するといふのとは哲學と事實との相違である。私は玆で哲學は立てない、事實に止まる。

斯んなにして自分の生の爲に考究するものを何で私は文字に書きつけて世に公にするのだらう。通例世間の人が此の問題に答へるには一定の型がある。已れの所思を發

表して眞理の研鑽に資する爲だとか、己れの發見した眞理を世に布いて他人と分け前する爲だとかいふ。つまり眞理の爲、世の爲といふのだ。そして史上の逸話などを引いて、誰々は自分の身を殺しても眞理は曲げなかつた、宣傳は已めなかつたといふ。成程それも一面の事實であるには相違ない。が自分の眞理と思ひ込んだ事や況して一旦それと發表した事やが、輕々しく變更せられるものでないのは、必ずしも逸話の場合のみぢやない。其の人の事情境遇に應じて、皆それ〴〵に自分を眞理に殉せしめざるを得ない複雜な理由を有して居る。例へば行が〻り上、何と威嚇されても此處は前來の說を固持しなければ都合が惡いといふこともあらう。玆で前說を飜せば、自分の地位が亡びる、世間へ出す面目がない、それを思ふと苦痛だ、寧ろ殺されても生きてる苦痛よりは樂だ、といふやうな動機が隨分多量に作用することはないか。斯うなれば實は眞理非眞理や救世濟民の問題ぢやなくて、自分の存在といふ問題になる。其の他是れに似た元素が幾らもあり、又反對にたゞ眞理だと信ずるが爲それに愛着するやうな元素も幾通りかあつて、到底單一の動機で說明することの出來ないのが心作用の特色である。如何に單純に見える人でも心の中の色彩は決して簡單なるものではない。行ひに對しては油斷しても、心に對しては油斷の出來ないものだと信ずる。人間を單一な動機で動いてるものとするのは、陳い人間觀である。

私は玆で現に此の論文を書くに至つた動機を數へて見やうと思ふ。一番直接には雜誌のため是非とも九月號には何か書かなくちやならぬ、若し書かなければ雜誌が困る。そして其の雜誌は自分乃至自分の親しい人々がやつてゐるのだから、打ちやつて置く譯に行かない。是れだけの動機が餘程强い要素になつてゐるのは疑ひない。つまり論文さへ書けば此の論文たると他の論文たるとは問ふ所でないのである。又是れが別な雜誌の場合なら、自分が困るといふよりも、金が是非入用だからとか、編輯者に對する情實だとかいふものが重要な動機の一つになるだらう。何れにしても眞理のためとか研究のためとか世間のためとかいふ事とはかけ離れて全然自分の爲の動機である。

此の動機が無かつたら事實私は此の論文を書かなかつたかも知れない。

それから今一つは、何かしつかりした物を書いて、自分が論文壇に立つて居る地歩を益々強くしなくてはななぬ、自己存在の地盤を築いて行く、少なくとも現に有してゐる地歩を脆弱にしてはならないといふ自己的な動機も加はゝつてゐるに相違ない。

更にまた前に書いた論文の越意が世間から誤解されたり、十分徹底しなかつたりする恐れで、是非あの跡を書き足したいと思ふ、何ぜなら、あのまゝでは自分の價値が傷けられる恐れがある。現に世間の批評の中などにさういふのが見えて、其のまゝほつて置けば自分の存在を弱めるかも知れないからである。

以上の諸動機と類の違つたものと思はれるのは、此論文に書く思想そのものを、初の内段々と心の中で熟させるに從ひ、唯何となくそれを公にしたいやうな一種の傾向を覺える。勿論其の中にすら一部はそれで世間の人を感服させたら愉快だらう、從つて早く發表して見たいといふ氣持が交らぬとは言ひ得ないが、それ以外唯何となく其の感想を發散させなければ胸に滯りを覺えて氣持が惡い、古人の謂はゆる腹ふくるゝといふ心地なのである。是れは感想といふものが凡て強まるにつれ、自然に實現方面へ表白の途を求めて來る心理上の原則に應ずるものだらう。一つの科學的現象と見てよい。

又これも強ち自分の爲とは見えない一動機として擧げると、例へば世間の人があんな間違つた事、僞りの事を本當と思つてる、見てゐるのがもどかしくて自分の說が出して見せたいといふ氣持である。先づ言はゞ眞理を顯揚して世が救ひたい爲とも言ふのだらうが、併し斯う言ひ切ればもう誇張になる。實際の心理狀態はもつと漠然たるものである。僞妄に過まられる他人が不憫でたまらぬといふ程强烈な慈悲本願で論文を書いた經驗は曾て無い。却つて此の動機が强く明になればなる程たゞ偏に自分の信ずる所を立て通さうといふ形になる。つまり眞理の爲、世上の爲といふに近い氣持と、自分の主張だから擁護し擴張したいといふ氣持とのうべ合はされたやうな動機で

ある。或はこゝでうんと踏ん張つて、眞理のため世上のためといふ事一圖に熱發するのが卽ち大文字を成す所以だと反駁せられはしないか知らん、とも思つて見るが實際私には何うしても其所まで行けない。其自分を標準にして觀察するから。勢ひ世間で右の樣な動機で大文字を製作すると公言する人々の多くは、みんな己れを僞り若しくは誇張して夢を見てゐるのだとしか思はれない。自分を以て他を忖ると言はれても仕方はない。それが自分の現在の最高眞理である以上、自分以外に何で他人を忖度する目標があらう。斷るまでもなく以上の諸事情は動機論であつて目的論ぢやない。目的は云々の眞理を說明して見やうといふ點に存する。別事である。

さて斯んな風に數へ上げて見ると、此の一論文を作るにすら雜多な動機が雜多な比例で結合してゐる。そして其の不純粹な動機といふことが、私には己み難い本性のやうに考へられる、同時にだから其れが結構だと讃美する氣持もない。唯無闇と一方づいて、眞理のため天下國家の爲めの一動機で仕事をしてゐるやうに言ひ做し觀做すものを疑ふ。若しそれが聖人なら、私は聖人の心事を疑ふことを祭じ得ない。それと共に人間が自利一點で仕事をしてゐるとも思はない。推しつめて解釋すれば矢張り自己の爲といふことになりさうな場合でも、直接動機としては他人の爲にも、眞理其のものゝ爲めに動かされる。要するに事實は以上述べたやうな複雜なものである。それを鉈で薪を割るやうに、荒つぽく一つか二つに片をつけて了ふのは私の承服し得ない所である。

此の論文が懷疑と告白といふ題目で私の人生に關する現在の考を述べやうとする。それだけは自明の事としても述べてさて何にする。述べやうと決心するに至つた動機が既に以上の如く雜駁であるとすれば、此等の諸動機の凡てを是認するだけの統一目的が潛んでゐて、それの力が我々をして書かざるを得ざらしめて呉れなければ困る。現在の心理狀態を檢べれば前言つた通りあの無統一な有樣で、眞理の爲世上の爲といふ氣持もあるが、それと反對にたゞ自分の爲といふ氣持もある。現狀を告白して見る

と自分で恥かしいやうな不愉快な感じがする。將來も是れでやつて行つて善いものだらうか、不快不安だ。出來るなら單一な、あらゆる部面を滿足させる解決がつけて貰ひたい。何時か何處かで一度は是非それをつけて置かないと、我々の生は一代ぐらぐゝとして過ごさなくちやならぬ。それは苦痛だ。そこで斯んな考の起こるたびに彼あか斯うかと考察に耽る。けれ共遂に是れが最後の鐵案だといふものに行き當たらない。此の論文を書く必要卽ち根本目的はと問はれても、結局今の私は明確な答を與へ得ない。已むを得ぬからそれを催進した諸動機を漫然數へ上げて見る。あれも一理由、是れも一理由だといふ。そして其のあれと是れとの間の矛盾を思うていやな、不滿足な感を殘す。何とかして此等の矛盾した動機の奥に凡てを是認して安心さする統一目的又は統一動機があつて欲しい。私は今斯んな背景の中で此の論文を書く。

中　現代の哲學も宗教も懷疑に生く

何う考へても、今日の自分等が眞に人生問題を取り扱ひ得る程度は、懷疑と告白の外に無いと思ふ。今迄の人は餘りに信じ過ぎた、他人の思想を信じ過ぎたり、自分の思想を信じ過ぎたりした。或は信じて賴りすがるべき思想のあるのが一生の平和の爲には仕合はせかも知れないが、時勢はそれを出來なくして了つた。早い話が近代の新聞紙の發達だけでも優に天下を凡人化し平等化せる力があるでないか。凡人化といひ平等化といふのが、實は人間をして眞の人間たらしめたのである。衆人を擧げて一種の自覺に導いたのである。聖人であらうが、英雄であらうが、人格の一面から見れば、路傍に客待をしてゐる俥夫、足に鎖のついた囚人と少しも違つた事はない。隱微もあれば矯飾もあり、天眞流露の美しさもある。偶像崇拜、英雄崇拜の時代が過ぎ去つて、人は皆平等對等の世となつた。所謂る現實暴露だ。今日の新聞紙を一週間も讀んで居れば、天下に聖人だの英雄だのといふものは居なくなつて了ふ。勿論一藝一能に秀でた人は居るけれ共それは全人格の上の英雄でも聖人でもなく、從つて崇拜などゝは思

ひもつかぬことである。政治家としての伊藤氏、相撲取としての常陸山氏、俳優としての羽左衛門氏、皆一面に他に及ばぬ特技を有してゐると共に、一面は共通の人間たることを最も明白に見はしてゐる。是れが人間の眞相であらう。昔は新聞紙なども無かつた爲、キリストも孔子も馬鹿々々しい程人間離れのした偶像に飾り上げられた。現代ではそれが出來ない。

斯んな世の中に立つて、我々は誰をたよりに自分の全生活を支配する問題を打ち任せやう。何處に一つ我々を全部服從させるに足る思想があるか。我々はたゞ現在の自分の心内に振り返り見て、其の紛亂に驚くのみである。口を開いて眞眞を語らうとすれば、たゞ此の紛然たる心内の光景を、ありのまゝに告白する外はない。其の以上の凡ての思想は我れといふ眞骨髄に徹するには隔たりのあるもの、我れの一部には違ひないが、隙のある我れである。充實した我れはたゞ懷疑、未解決といふ點までだと思ふ。私が他人の說を聞いてあれ迄が眞實權威のある部分で、あれから先は造りものだなど感ずる境目は常に此の點である。高山樗牛の思想は、其の狹義本能の覺醒と共に生ずる心内の矛盾煩悶告白といふ點までが、充實したものとして、私を壓して來る。それから先は日蓮に行かうが、ニイチェに行かうが、皆彼れ一個の試みであり、假定であるに止まつて、私といふ別個のものゝ目から見れば、合理もあり不合理もある一の研究材料たるに過ぎない。若し彼れが是れに解決を得たと言ふのなら、私は其の部分から先の彼れに疑を挿む。更に綱島梁川の思想は、彼れが其の見神法悅を最後の解決としたに拘らず、あんな風になりたいと努力する人が心内に經驗する個々の閃光を集積したものとして私に力を與へる。けれ共之れを統一した見神法悅の解決其物は一篇の詩に過ぎない、尙實生活と觸れて行くに從ひ、必ず變じて今一度磊々たる灰色の現實に戻つて來べきものだと信ずる。あれがあのまゝ眞に充實した我れとして永續すべきものではなからうと疑ふ。

其の他多くの思想家が道德を說き人生を說いてゐるのを聞くと、其の骨折には尊敬

を拂ふし、結論も參考として無用だとは言はぬが、惜しいことには其解決以前の心內の實光景たる疑惑狀態を傳へる聲が足りない。賽の河原のそれではないが、知慧の塔の積み上げ競をして居るな、といふ感を起こさせる。畢竟第一歩に充實した現實感の基礎が示してないからからである。要するに哲學といふものが現代に於いて眞に生きてるとするとすれば、それは唯その素材となつた現實感に存するので、組織や結論で私等を動かす力は無い。私は此の意味からして、哲學が、今のまゝでは、人生に對して働いて居る力の量は頗る疑はしいものだと思ふ。

近頃世に唱へられるゼームス、シラー等諸家のプラグマチズムの思想の如きは、最も巧に此の活きた現實と襯貼して立たんとする哲學である。從つて若し此處で一つ最も自分に近い哲學を選び出せといはれゝば、今のところ此の思想を擧げる外はないと思ふが、それすら私は其の懷疑に立脚して、それから多く離れまいとする所に生命を感ずるのであつて、若しあれが究極の解決だと言はれると、首を傾けざるを得ない。

實際我々は唯自分々々の實生活に都合のよいやう、其の時々に適應する經驗の整理統一をやつてゐる。事實はプラグマチストの言ふ通りである。之れを外にして何の哲學も成り立つ譯はない。併し之れだけで凡てだとは何うしても言へない。問題は實は是れから先にある。實生活に好都合なやうに統一すると、一口に言つて了へば何でもないが、事實其の統一が滿足に行はれてゐるか否かといふことが第一問題である。勿論何うにか斯うにかやつてはゐる。其の人の其の時の境遇事情で滿足は滿足なり、不滿足は不滿足なりに否應なしやつて行く。併し大體の傾向から言て、進んだ複雜な思想の人ほど不滿足の統一に陷り行く趣のあるのが、見逃すべからざる悲しい人生の事實である。過去生活に對する悔恨反省、それから將來の生活に對する不安、心配、是れらが丸で人生に無いものなら、プラグマチズムの命題は十分の權威を以て我々を支配しやうが、事實は其の反對である。昨日の行爲といふのが實は不滿足な、仕方なしの一時凌であつた。結果は的面、今日に色々の苦痛を殘す。悔恨の傷が胸から消えな

い。これでは明日からの生活が心元ない。時の宜しきに從ふなど〻暢氣なことは言つて居られない。此の、將來に對する不定不安が當然要求して來たるものは統一の標準である。何んとかして間違つこのない目安が立ちはすまいか。此の氣持ちで人生を回顧思量する、所謂る第一義を思ふ心である。是れは實に已み難い自然の事實だ。プラグマチストといへども、之れを消して了ふ力はない。然かるにプウグマチズムが其のまゝ解決哲學にされて、人生觀論にまで來ると、此の要求を事もなげに無駄だと打ち消さゞるを得なくなる。但しプラグマチストが此の場合に提出すべき言葉は別にある。卽ち生活の爲めに都合よくといふ。けれ共實は生だの生活だのといふ言葉が本來詩であり謎であつて、中身は充實してゐながら定義の下せないものだ。分かつたやうで分からない、言はゞ哲學も宗教も文藝も此の一懸案の解答を得んが爲めに存在してゐると言つてもよい程な言葉である。そうであればこそ、其の中に矛盾があつたり衝突があつたりして、之れを標準とする限り無統一無解決の不安が消えないのだ、實生活の爲めといふのは、實は一つの逃口上、乃至は詩として据えて置くべく、哲學として知識の手をば觸るべからざる言葉である。それを哲學上の標準論に何度持つて來てもトートロジーに過ぎない。要するに生活の雜多な矛盾、それを過去現在未來の時にかけて何う統一するか、之れが根本の問題で、プラグマチズムではそれが解けて居ない。居ない所に生命があつて、解いたとする所には空な聲がある。

宗教に對しても同じ事が云へる（六月の『太陽』に「宗教の三分化と文藝」と題する文を載せた、讀まれた讀者は、此の點に參照を乞ふ）信仰といふ言葉が祕傳めいたものにされ過ぎて、人間の生きた血と遠ざかるにつれ、今では信仰よりも寧ろ疑惑の方が宗教の味となつて居ないか。玆で私は宗教の味といふ、宗教の全部とは言はない。けれ共兎に角宗教が現代のものとして生きた溫い息を呼吸して居ると見えるのは、此の部分だけである。青年などの、本當に深い眞面目さで宗教を語つて居るのを聞くと、

其の普通生活に統一を失つて、神に據り處を求めようとする、痛切熱心な祈願の一面が惻々として人を動かすことはある。言ひ換へれば彼等の懷疑の問へが宗教的に現はれて居る間は眞實の味が漲る。けれども一歩してその求める所の神を得たりと號し、悟り顔をして、信仰の隱れ家に澄まし込むに至れば、もう其の言葉は洞々として空なるものになつて了う、信仰を說かないで懷疑を說き、安心を說かないで煩悶を說く間が、依然として現代宗教の味である。跡は私等の精神生活と殆ど全く沒交渉と言つてよい。

下　文藝と第一義生活

今の私に取つては、宗教でも哲學でも、生きた血の通つてゐるのは其の懷疑的方面ばかりだと思ふ。併し懷疑は何時でも終點を意味するものでないから、之れに住する限り、必ず何等かの形、何等かの程度で終點を知らうとする努力若しくは要望が殘る。

其の實終點は恐らく知れないものであらうとは今までの經驗が敎へる所であるが、それにも拘はらず之れを知らう〳〵とあせる氣持は、古今を通じて少しも減じない。又あせらざるを得ない事情が人世の根本に横はつて居る。知れないものを知らうとする。此のパラドックスがやがて造化の神祕なのであらう。近代の經驗派の諸哲學は、成るたけ此のパラドックスに手を附けまいとする。けれ共手を附けないことが其れを無くすることにはならないで、パラドックスは依然としてパラドックスのまゝ人世に生きて殘る。第一義欲は消し難い我々の眞實であつて、決して夢では無い。哲學も宗教も此の軸の引力に吸ひ寄せられて、周圍を回轉してゐるものに外ならない。

日常の第二義生活は何うにかして果たして行く。併し同時にそれの不滿足を意識して絕えず一層圓滿な第二義生活に入りたいと焦燥する必然の行當りとして、第一義の最勝道に頭を回らす、其の第一義の主觀にあると、客觀にあると、具象であると抽象であると、乃至それが摑み得られると得られないとは關する所でない。得られないと聞

いたからとて休められる道ではない。そして此の一念を何うにか心の中で取扱ふ所に人間の第一義生活若しくは精神生活の中樞が存する。

此の第一義生活の、最も著しい發現であり、また刺戟であるものは哲學、宗教、それに加へて文藝がある。そして少なくとも現在の哲學なり宗教なりは、僅に上に言つたやうな部分でのみ私の第一義生活に觸着する。それでは哲學の哲學たり、宗教の宗教たる本領からは外れたものになる。之れを一言で言へば現實の觀照卽ち文藝的だ。哲學の文藝化、宗教の文藝化、私には斯う名づけたい現象である。

そこで本論の終結に近づかうと思ふが、哲學、宗教、文藝の三姉妹を併せ觀て、現代に最も生きてゐるものは文藝だと考へることを禁じ得ない。眞負目と言ふ人は言へ事實私の第一義生活に全力を擧げて刺戟を送るものは文藝である。固より深淺强弱はさま〴〵であるが、兎も角も全機能を働かせて第一義生活に迫るの使命を果たしつゝあるものは文藝だとしか思へない。現實の人生を與へて切に第一義を想はせる。唯想はせるが故に、宗教でもなければ哲學でもなく、矗然として文藝である。或は今は文藝の時代であつて、哲學の時代でも宗教の時代でもないのか、或は哲學宗教は已み難い現代の要求であつても、それが一たび文藝に立ち戻つて出直すべき運命に際してゐることを暗示するのか、何れにしても現代に於ける文藝の地位は哲學宗教よりも意義の多いものと感ずる。私の第一義生活は、深かれ淺かれ、文藝によつて最も多く滿足させられる。同時に今後の哲學たり宗教たるものを何うして貰ふことかと思ふ。

終りに、私が文藝に緣の近い事を職業として居るのは、決して文藝に右のやうな讃仰の意味があるからではない。之れに携はつたのは唯私の性質や境遇が然らしめたのである。初めから文藝にそんな意味があるのを見拔いて、それに從事したなどといふ譯でないことを斷つて置く。（明治四十二年八月）

——終——

12614

大正八年二月七日印刷
大正八年二月十日發行

進文館叢書第二篇

（定價八拾五錢）

不許複製

著者　島村瀧太郎

發行者　橘三千三
東京赤坂區丹後町五番地

印刷者　宮田龜六
東京神田區西小川町二丁目六番地

發行所　進文館
東京赤坂區丹後町五番地
電話特長芝七一四七
振替東京二六一二〇

進文館叢書第一編

法學博士 高田早苗著 （新刊出來）

教育論議

菊半截布表紙美本
定價七拾五錢
郵送料金八錢

内容

□外遊所感
□歐米漫遊中の宗教
□立憲思想と普通教育
□世界的戰亂と工業教育
雜感
□實業的帝國の建設
□米國新大統領ウィルソン
□立憲思想と立
□學業年限短縮と官
□模範國民の養成
——以上九編——
私人學併立
□新時代の教育方針

諸編悉く渾厚親和の氣に溢るる常に育英の根本議に即して社會各方面の病弊を論評しその長所を助成する所、淳々として然も其言辭の妙味盡くるところを知らず、戰後他事の今日世を指示する大なるを疑はざるなり。